
今一度、貴方に

さゆ&梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今一度、貴方に

【Nコード】

N3161Y

【作者名】

さゆ&梨

【あらすじ】

ヒトリにしないと、誓ったはずだった。（例え、この想いが通じずとも、）決して彼を、己達の為に茨の道を選んだ彼を、誰かの為にしか生きられなくなってしまった彼を、ヒトリにしないと。

…誓いは破られ、彼等は“大きな悔い”を残して死んだ。――
そして彼等は、再び、

初めに

ちょっとした忠告です。

このお話はボーイズラブというより年齢的にメンズラブかもしれませんが。

とはいえ、肉体的には年上×年下。その差約十。しかし精神的には逆転どころか年下が幾回りも上という…考えちゃいけない。彼等は子供。子供ったら子供。

綱様総愛され。書いてる人は総受も総攻も両方イける口ですが（色々表現がおかしい）最近の攻派に傾きがちです。でもたぶん、どっちでも読めるんじゃないかな…？

タグ見てる人はわかってるかと思いますがアルコバレーノは大人化してます。大空はルーチェさんかアリアさんにしたかったんですが、上手く書ける自信が無かったのでユニ。

ヴァリアーの大人組は綱さんよりちょっと上くらい。原作みたいに一回りも上ではないです。跳ね馬も同じく。

あー、ランボはさすがに犯罪的年齢差になるので他の守護者達と同年代くらいまで引き上げてます。

白蘭と入江正一は出てきますが彼ら以外のミルフィオーレ関係者は出てきません。

…あ、何だかんだ言ってますが露骨表現は無いです。愛人がどうのこうのって話はしてますけど。救いのない話になりかけてたらさゆに「やめれ」って言われたので頑張ってハピエン路線でいきます。

シリアスだけど。

でわでわ。

初めに（後書き）

B
y
梨

大空の勘

「ツナ、早く守護者決めねーと幹部どもがウルセーぞ」

「…リボーンが勝手に決めていいよ」

「あゝあゝ？」

シックなインテリアでコーディネートされた、深い渋みを持つ執務室。

それなりの付き合いとなる家庭教師様に睨みつけられた生徒は、執務机に両手を組み頬杖をついていたのをやめて肩を竦め、くるりと振り返ってそこにある大きな窓から空を眺めた。

時は夕暮れ。 彼が一番、スキでキレイな時間だ。

「…焦らなくっても、向こうからきつと現れるよ」

「……そりゃ、勘か？」

「まあね」

ぽつりと呟くように言われた言葉に、リボーンは少々疑うように問うた。そして彼は、あっさりと返事をする。

「今必要なのは、探すことじゃない。…見つけた時に、受け入れられる体勢を作ることなんだ…」

言いながら両手を握るように組んだ彼は、そこに光る指輪を見て、やや暗く笑った。

「……………守れるなら…」

どんなことでも、するから。

組んだ手を祈るように額に当てた彼に、リボーンは言葉を失くす。

この決して強いとは言い切れない頑固な生徒が、決して望んでいなかった茨の道を選んだ理由を、誰よりも、知っているから。

その決意を、覚悟を、固めたその時から、決して読めなくなった彼の心を、これほど知りたいと思ったのはいつぶりだろうかともどかしい思いに駆られながら、リボーンは静かに部屋を後にした。

雨の場合

『——…ナ、…め、』

『謝らないで、……オレは、大丈夫だから』

ごめん、ごめん。本当に、ごめん。誓ったのに、オレは、絶対に、お前を、ヒトリにしないって　———

ジリリリリリ！！！！！！

「つつっ！！！」

飛び起きて、目覚ましをストップする。時刻は六時半。朝のトレーニングの為に着替えをして、軽く身体を動かしつつ朝の仕込みをしている父親に一言声をかけ、彼は家を飛び出した。

（また、夢…）

滲んでいた涙。顔を洗ったときに流れてしまったが、その感触はずっと残っている。

（何なんだろうな…？）

幼い時分からずっと、彼はその夢を見ていた。しかし、内容はいつも同じとは限らず、しかも全て覚えられてはいない。

覚えているのは、自身が物凄く後悔していたこと、ただそれ一点のみ。

（けど何を後悔してたのか思い出せねーんだもんなあ…）

それじゃあどうしようもない、と彼は内心溜め息をついた。

「どうしたんだ武、晴れの日になんな暗い顔して？」

「…何でもねえよ親父」

「そうか？」

ああ、と応える彼は、今日、中学に入学する。

すぐに成長するからと、少し大きめに作ってもらった真新しい制服に手を通す。ぶかぶかだが、すぐに小さくなると言われているのでそんなもんか、と彼は納得していた。

彼の中学の入学式は昼からだった。朝は素振りなどして時間を潰しつつ、昼食を取ってから家を出た。

「おー、人一杯だ」

途中、同じ小学校の知り合いと出会い、和気藹々としながら向かう。中学校までの道のりは、そうわかりづらいものでもない。けれど、彼は何か違和感を感じた。

（こーゆーの何て言うんだったか…）「あ、そうだ、デジャヴ？」
「何だそりゃ？」

「何かこれ見たことあるなーって景色のことだろ？　それがどうかしたのかよ、山本」

「んー、何か見たことある気がするんだよなー」

前に通った時は感じなかったのになー…、そう思った彼は、以前通った時との違いを考える。

（…制服を着た奴ら）

以前通った時も人はいた。けれど今回は何より、制服を来た人間が数多くいる。というかそればかりだ。

（何だ、この胸騒ぎ…？）

ドクドクと、心臓が鳴っているのを強く感じて、彼はそっと胸を押さえ顔を少し俯かせた。

「お、校門が見えたぜ！」

仲間の誰かの声に、顔を上げる。　：そして、瞠目した。

涙が、止まらない。

「お、おい、どうしたんだ？」

彼は思い出した。全て。

「山本っ!？」

“唯一無二の人”。尊敬し至上の愛を人知れず捧げた相手。

「ちょっ、大丈夫か!？　どっか悪いのか!？」

『沢田綱吉』のことを。

くらり、と彼の身体が傾き、彼は気を失った。

それは、前世の記憶。

中一の秋に知り合った親友とは、前世の彼が死ぬその瞬間までの殆どの時間を共に過ごした。

彼はいつの間にか、親友に対して、友愛をある意味超えた、深い愛を覚えていた。

しかし、親友は中学時代の初恋をずっと引きずっていた。

相手の彼女の方も、親友のことを憎からず想っていたようだった。それは誰に目にも：親友の目にすら明らかで、いい加減告白しちまえと、多くの人に言われていたのを知っている。

けれど結果的に、親友は想いを告げることはしなかった。

『苦しめたくない。：オレは、弱いから。一緒にツライ思いをして、なんて、言えない』

その頃は“元”がついていた家庭教師に凄い勢いでどつかれ、親友が言ったのはそんな言葉だったという。

確かにその頃状況は捗々しくなかった。婚約、結婚と進んでいれば、親友も彼女も苦しい思いをすることになっただろう。

……そしてしばらくして、状況が良好になった頃には、彼女は良縁を見つけとくに結婚していた。

『京子ちゃんが、幸せなら、それでいいんだ』

そう言った親友は、恐らく殆ど意地で自身以外のボンゴレの血を引く血筋を見つけ、その子供を養子として生涯独身を貫いた。

そんなことをしても無駄だと言う者の多い中、親友は決して折れなかった。：それが、ボンゴレ十代目となつてから、親友が一番頑固を貫いた瞬間でもあった。他の面では大抵譲歩していたから。

彼は、そんな親友を狂おしい想いを抱えてずっと見つめ続けた。

『山本の笑顔は、何だかほっとする』——だからできるならずっと笑っていて、そう願われた思いに応え、可能な限り親友のソバで笑顔で在り続けた。

共に戦った友人達——守護者——が、親友が次代に役目を譲り渡したのと並行して、まるで己の役目を終えたかのように死んでいくのを見て、悲しむ親友に戦慄を覚えるまでは。

親友は、“みんな”の為に茨の道を進むことを決意、覚悟した。
：では、その“みんな”がいなくなれば：、彼は、どうなる？

何だかんだ言つて霧としての役目を担い続けた男は、元より人体実験のせいで真の意味で丈夫ではなく、かなり無理をしていた。とつくに男の仲間とされていた部下の男二人は死しており、女性二人は男の死の後を追うように亡くなり、残る弟子はふらりと姿を消した。

妹夫婦を大切にしている、自身も結婚していた晴の役割を担っていた男は、孫の姿を目にしてから静かに息を引き取った。

生まれたファミリーの一員としての役割と雷の役割を兼任していた男は、親友に説得され元のファミリーに戻ったが、結局ボスを庇つて当たり所が悪かった為に死んだ。

決して完全にファミリーとして相容れることは無かったが、立派に雲としての立場であり続けた男は、親友が引き継ぎを終えると同時に日本に帰り、その数日後に猫のように姿を消したという。遺書とも遺言ともとれる内容の文書が残されていたそう。

最後の最後まで、彼と、嵐は：名実右腕で在った男は親友のソバに居た。

だがある日、親友が命を狙われ、嵐の役割を担っていた男は親友を庇って死んだ。：遂に、二人だけとなった。

正直、ほんのすこし、歓喜した。狂喜した。

親友にとっての“みんな”はもう自分だけなのだと、彼は内心暗い笑みを浮かべたのだ。勿論、それを表面化することは無かった。危険だからと、二人だけでナニモノからも逃げ続け、最終的に辿りついた地で彼は病に罹った。：不治の病だった。

誓ったのに。自分だけは、ずっと親友のソバに居るのだと。彼の存在意義で在り続けるのだと。：悔しかった。悔しかった。

泣きながらに、謝って。悔しいと心の中で叫んで。――そして、彼は、死んだのだ。

「……ツナ…」

あいたい、と呟く。心が叫んでいる。今度こそ、今度こそと。

「起きたの？」

「はっ、はあ…、」

声をかけられ、彼は自分がどこにいるのか一瞬把握できなくて戸惑い、そしてすぐに気付いた。

——保健室だ。聞こえてきたのは女性の声で…その違いにすら、涙が出そうだった。

「大丈夫？　もしかして興奮して眠れなかった？」

「そういうわけじゃないんすけど…」

ふと視界がやや滲んでいることに気付いて、ああまた泣いたのか、と彼は少し乱暴に拭う。

「なら良いけれど。無茶は駄目よ？」

「……ハイ。…あの、」

「もう入学式なら終わったわ。ちょうど教室で連絡を受けてる頃だと思うけれど…」

行く？、と問われ、彼は逡巡した。

行けばもしかしたら、また親友と会えるかもしれない。…もしかしたら、だけれど。例え同じクラスじゃなくても友達にはなれるし。

「…行きます」

「そう。ええと確か君は、」

「山本武っス」

「そうそう。…一年A組ね。教室は二階よ」

「あ、ありがとうございます。…あの」

保健医らしく白衣を着ている彼女が、名簿を見ながら言ったので、彼はふと聞いてみた。

「同じクラスに、“沢田綱吉”っていませんか？」

「さवादつなよし？」

「ハイ」

にこやかに尋ねた彼に、保健医は困ったように、どうして？と聞いた。

「…気になって。あの、やっぱいいっす」

よくよく考えれば、言うわけにはいかないのかもしれないと、彼は引いた。が、あっさりと彼女は教えてくれる。

「…いないわよ。貴方のクラスにも…他のクラスにもね」

「え？」

「全く…」

ぶつぶつ、と続けて何か言っている彼女の言葉は彼の耳に入って来なかった。

（ツナが、ココに、いない…？）

その可能性は、考えてもみなかった。

それから彼は必死で“沢田綱吉”を探した。だが、学校中のどこを探してもいなかった。

次に彼は風紀委員会と接触した。入学式の日、涙が出た一因は校門前に立つあの黒服の集団もあったと思ったからだ。

見覚えのある風紀副委員長に、風紀委員長と会わせてくれと交渉したが、無駄だった。

ならば目の前の彼は自分を覚えていないかと質問してみたが、結果は芳しくなかった。

「ツナ……」

あいたい。あいたい。あいたい。

思考を埋めるその言葉にぼんやりと歩を進めていれば、ふと気付くと見覚えのある住宅街に居ることに彼は気付いた。

「…このまま行けば、」

ツナん家だ。

眩きは声にならなかった。何かの衝動に駆られ、走り出す。その家に辿りついた頃には、辺りは真っ暗で息も切れていた。

「ツハ、バカじゃねーか、オレ……」

暗がりでもよく見えない表札に、段々と近づく。妙な胸騒ぎ。これで違っていれば、諦めるしかないかと、そう思いながら。

「…え」

だが、奇しくも。――そこには、見覚えのある『沢田』という表札がかかっていた。

「え、あ、」

震える手が、思考すらするまでもなく呼び鈴を鳴らした。少しして、懐かしすぎて涙が出てきた女性の声が、『はい、どちらさまでしょうか』と聞こえてきた。

「あ、の…、ツ、…沢田綱吉さんは、いらっしゃいますか」

草壁氏が何も覚えていなかったことを鑑みて、彼は愛称で親友を呼ばず、敢えてフルネームを使って問うた。

『ツツ君はお仕事でいませんけど…どちらさま？ その制服…並中のよね？ いくらツツ君がOBとはいえ、年が離れすぎているし…』

聞こえてきた情報に、彼は思考が停止するのを感じた。

OB。それって、あれだよな、ツナがもう、並中を卒業してる?? つつーか仕事って…働いてる…?

やがてぐるぐると頭の中で巡回し始めた言葉に、だいぶ沈黙が続いていたことに気付いた彼は慌てて言った。

「あ、のっ、オレがツ、綱吉、さん、を一方的に知ってるだけでっ、
…どうしても会いたくて、来たん、です、けど…」

『あら…そうなの？ ごめんなさいね、ツッ君今外国にいるのよ。
お仕事が忙しくて…中々会いに来てくれないんだけど』

(外、国…)

それはイタリアですかと叫んで問いかけかけた。…しかし堪えた。
きつと彼女は知らない。親友が、そして彼の父が、決して彼女に教
えようとはしなかった。これで余計なことを言って仮に迷惑などか
けたら、彼は自分を許せない。

…それに、もし、親友が、再びマフィアになっているとしたら。

(…もう一度、お前のソバへ)

躊躇いはしない。

「あの…連絡先を入れておくので。綱、吉、さん、が日本に戻っ
きたら、教えてくれませんか」

『…ううん…でも、それは』

「じゃあ、会いたって言った奴がいたってことを言っとくだけ
でも良いです！ オレ、竹寿司のこの息子の、山本武です。」

『あの、お寿司屋さん？』

「はいっ」

『…そう。わかったわ』

ほっとして、彼は膝から崩れ落ちそうになった。

それから、息苦しい毎日を過ごした。

親友は彼が野球をすることを推奨していた。再び親友のソバに在ることが人生の目標を通り越して目的に成りつつある彼だったが、手は抜かないでおこうと思い、ずっと続けてきた野球の為の特訓はやめなかった。

しかし、父親に願い出て剣道の稽古はつけてもらった。

二度目の技の継承。失敗などするはずもない。

野球と剣。どちらも手を抜くことは無く、ただひたすら、もう一度親友のソバに行く為に、彼は過ごしていた。

ある日、わっかんねえ…と呟きつつ宿題と格闘していた彼は、電話の鳴る音を聞いた。

「武、悪いが出てくれねえか？」

「わかった！」

あっさりと返事を返し、彼は走るように電話へと向かい、「はい竹寿司です、」と取った。

『もしもし？ 並を二人前お願いしたいのだけど』

その声に、耳を疑い、そして慌てて返事をした。

「は、はいっ」

『…もしかして、武君?』

「うあ、はい、ソウデス…」

思わず片言になりながら返事をすれば、…親友の母であるその人は、くすりと笑って続けた。

『ちょうど良かったわ。…ツツ君がね、久しぶりに帰って来るって連絡があったの。今日ね』

「…え?」

それ、は。

『貴方の伝言、伝えたわ。是非会ってみたいんですって。もし今日暇があるなら、お寿司を持って、いらっしゃい』

ああ、その場合は三人前にしてね。

「…っはい!! 一人前はサービスにします!!」

『あら、良いのよ?』

「いえ、むしろオレからお願いしたいくらいなんで!!」

『そう? …あんまり断ると、良くないかしらね。じゃあお願いするわ。今夜七時ね』

「はい!!!!」

がちゃん、と切ってから、はっと振り返った。

「何勝手にサービスしてんだ?」

「う、親父…その、悪い」

やや厳しい顔をしている父親に、向こう一年小遣い無くても良いから、と続けつつ、彼は目線を落とした。

「…はあ。お得意様か？」

「…違う。新規、だと思う」

「何でそんなことをした？」

今、“お前からお願いしたいくらいだ”とか言ってたな？

どこから聞いていたんだと思う気持ちと、自分も興奮していたからデカイ声で喋ってたような気がするし、聞こえていても当然かと思う気持ちとが一気に襲いかかり、彼は一瞬口ごもってから、言っ

「…：もう、後悔したくないんだ」

それは、父親に稽古をつけて欲しいと言ったとき、理由を問われ告げた言葉。

「…なるほどな。そっちの覚悟へ繋がってんのか」

「そうなんだ。…チャンスなんだ。もう一度、アイツに…、もう二度と来ないかもしれないんだ…！」

激情に駆られ父親を見上げる。…そして、静かに見下ろしてくる瞳に、心が冷えた。

「…わかった。それで？何人前だ？」

「並、を三つ。…オレも、一緒に、って言われたから、」

「わかった。久しぶりのご新規様だ、ちゃんと感想聞いて来いよ？」

「…っ ああ!!」

ほっとした。肩に入っていた力が抜けて、彼は慌てて支えを探して壁に懐くことになった。

こんなに緊張したのはいつぶりだろう、と思いながら、彼は沢田家の呼び鈴を鳴らした。

はーい、と奈々の声が聞こえ、扉が開かれる。

「いらっしやい」

「お邪魔、します。 …お届けにありがとうございました」

「はい、受け取りました。 お金は後でも良いかしら？」

「良いっスよ。」

「それじゃ。 ツツ君ならリビングにいるわ」

そこよ、と指されて、もう一度お邪魔します、と呟いてから靴を脱ぎ、恐る恐る彼はリビングへと近づいた。

「…ん、お客様？」

まだ声もかけないうちに、見えてきた、座ったままの後姿が振り返る。 …聞こえてきた声は、やはり想像していた通り…成人後の、親友の声だった。

「……ナ、」

「ああ、君？ オレに会いたって…。 ……、どうしたの？」

カタカタと震える身体。

ああ、また、あえた。

ポタリ、

「っ！？　どうしたの？！」

「…ナァ…！」

慌てて立ち上がり近づいてきたその人に、彼は抱きついた。

以前は彼の方が高かった身長も、年齢差があるからだろうか、その人の方が高い。

「…大丈夫？」

涙が出て止まらない彼の頭をそっと撫でながら、その人は問う。

（んな、こと、されたら…もっと、止まらねえ…っ！）

笑うことを“望まれた”。強要されたわけではない。でも望まれた、願われたからこそ、彼は自身にそれを課した。

嵐の男が、たまに泣いては親友に慰められているのを、どこか羨ましく思っていた。

「…我慢、しなくていいよ。」

やがてふう、と息を吐きながら言われた言葉に、彼はぎゅ、とその人を更に強く抱きしめた。

「オレは、ここにいるよ。　…ねえ、君の名前、教えてくれる？」
「…ふ、」

知らないのかと、聞きたかった。知らないのだろうかと、わかっていた。

だから彼は必死で涙を拭いながら、答えた。

「山、もと、たけし、です」

「たけし君。…知ってるみたいだけど、オレは沢田綱吉。ちょっと海外で色んな仕事シテマス。」

視線をあわせて、少し茶目っ気を入れて言われた言葉は、含まれたものを感じさせた。

それと同時に、彼は妙な気分になった。

（名前…）

特に互いに変えようと思わなかったから、親友は前世の彼が死ぬその時もずっと彼のことを名字で呼んでいた。
だからか、妙に感慨深い。

「…並中の、一年生です」

「うわぁ、並中かぁ、なつつかしー」

にこにここと、言われた言葉。その笑顔は、記憶にあるものと、全く変わらないもの。

「さあさ、お寿司食べましょー」

何か言わなければ、と口を開きかけて、絶妙なタイミングで入っ

て来た目の前の人の母親に、ちょっと残念な気持ちになった。

がしかし、うわぁ旨そう、と喜びを露わにするその人に、彼の脳裏に父親の言葉が蘇る。

やがて言われるまま、彼は供に食事を始めた。

そして、夕食を終えた後、その人は彼に爆弾を落とすのだった。

「ちょっと、イタリアに小旅行してみない？」

雨の場合（後書き）

この先多分出てこないのでも知らなくても良い補足。実は保健医さんは綱さんと並中期生。同じクラスにもなった仲。

晴の場合

その覚悟を疑うようなことをしたことを、ずっと悔いに思っていた。

『お義兄さん、二人を連れて、逃げて』

『だがしかし、』

『お願いです。…ここで妻が子供が、喪われるなんて、堪えられない』

その目。いつだって真剣に見つめてくるその強い瞳に引きつけられ、わかったと答えた。

だが妹を、甥を、安全な場所に逃がしてから、彼は不意に不安に駆られたのだ。

彼は大丈夫なのかと。生きて帰って来るのかと。

今や残る守護者は彼一人だった。周囲の反対を押し切り彼の妹と結婚したボスに、他の守護者達は弁護したくてもできない立場に追いやられていた。

内心では彼の義弟を助けてやりたくとも、様々な柵がそれを許さなかった。故に、味方となれるのは彼一人だけだったのだ。

後から考えれば、余計なお世話の責任感。

しかし彼は良くも悪くも真っ直ぐな男だった。思うままに行動し、そして、

『お義兄さんつつっ!!!!』

義弟のその目の前で、死んでしまった。

「…ん？」

聞き覚えのある特徴的なエンジン音に、ああ里帰りした彼^かの人が帰って来たのか、と彼は整理していたファイルを近くの机に置いた。振り返ればすぐそこにある窓から、外を見てみる。尤も、ここから彼の人の姿が見えるとは到底思っではない。

真の金持ちなだけあって、彼の人の持ち物である建物は殆どが横に広く作られている。ファミリーの本部である『城』もまたそうだった。

「…さて、これをヒバリへ回しておくか」

彼は無論、今も昔も書類整理等、事務作業は苦手だ。しかし、今やファミリー内で何をしてくすかわからない唯一の暴君と化している雲雀恭弥と、ともに相対出来る数少ない人物であった為、そのような仕事が回されている。

コンコン

「誰だ？」

「オレだ」

重々しい扉が不思議な程軽快に開く音ともに入ってきたのは、かつて――勿論前世で――の地位を取り戻さんと奮闘している、銀髪の少年だった。

「十代目が呼んでらっしゃる。一段落したら来い」

「ああ、ちょうどこれをヒバリに持って行くところだ。すぐ行く」
「わかった」

共に部屋を出、そして二人は別れた。

「…相変わらず、極限不機嫌なことだ」

たった今出てきた扉の前に、ぽつりと彼は漏らした。…誰のことかは言わずもがな。かの暴君である。

「まあ、仕方ないのかも知れんがな…」

呟きつつ、彼の人の待つであろう部屋へ向けて歩を進めだす。

彼が全てを思い出したのは、中学入学を目前に控えた春先のことであつた。

季節は春だが、実際にはまだまだ冬と言って良いほど寒く、蕾の気配がようやくし始めた桜の下。そこでかの暴君と再会した時、彼もまた、幼い時分から見続けてきた夢の全貌を思い出したのだ。

（焦がれ続けた相手に忘れられ暴走…、極限、あの時の奴の姿は忘れられん）

時を同じくして思い出したのであろうかの暴君は、茫然としていたかと思つたら次の瞬間から暴走しだしたのだつた。

まだ風紀委員長として全盛ではなかったのだが、持ち得る全ての権力を駆使して“沢田綱吉”を見つけ出した。

言われたままに行動しつつも、彼の存在と敬愛する上司の暴走に困惑していただろう風紀副委員長の姿が不意に思い出される。

草壁氏は、元より妙に達観した雰囲気を持っていた上司が一変して危うい空気を放つようになったことを、それはそれは心配していた。

だが一部下でしかない為に出来ることは少なく、たった一人、唯一上司が耳を貸す相手である彼に諸々を託した。

尤も、託された方はどうしたものかと悩んでしまったのだが。

それでも、“沢田綱吉”を発見し、イタリア行きのチケットを用意させられたとかの部下から連絡を受けた時は、自分の分も用意するようお願い、その上でかの暴君を何とか説得して二人でここま

で来たのだ。

(……ヒバリのことだからな。俺がいなくとも極限何とかしただろうが)

だがしかし、居て損は無かったはずだ、と一人勝手に納得しつつ、彼は辿りついた扉の前に立ち、一呼吸置いてノックをした。

「入って」

聞こえてきた言葉に、気付かず詰めていた息をほう、と吐きつつ扉を開く。

そこには、彼の人、銀髪の少年、そして……もう一人。

「山本?」

「先輩!」

「あ、やっぱり知ってるんだ」

互いに驚愕の声をあげた彼らに、彼の人には特に驚いていない様子で言った。

「……日本で会ったそうだ」

不機嫌……というよりは無然とした様子で言う獄寺隼人に、内心首を傾げつつそうか、と呟くように彼は言う。

「先輩がここにいてことは……もしかしてヒバリもここにいないのか?」

「恭弥君? いるよ?」

「……」

「え、何武く…じゃなかった、武」

パツと心なしか嬉しそうな顔をする山本武に、彼は内心傾げていた首が更に傾くのを感じた。

「…：なあ…そろそろ、教えてくんね？ ツナは、何も覚えてないのか？」

「うーん、ここにいるみんな同じこと言って来たけど、オレはさっぱり。」

「そ、か…」

途端に沈む少年に、彼は口を開く。

「見ての通り、獄寺もヒバリも俺もいる。ランボもいるらしいぞ、俺はあったことないがな」

「…もう一人は？」

「アイツなら、行方はよくわからん。…アイツのいたはずのファミリーなら、今傘下だ」

「…っ！？ マジかよ！？」

「大マジだ」

彼の後を引き取った獄寺の言葉に、反応する山本。

仮にも皆前世でマフィアとして生きていた者達だ。意味するところはずぐにわかる。

「うーん、中学生達があっさりこんな会話するなんて世も末だな」
「揶揄わないでください十代目」

「いやオレもマジなんだけどね。 ってことはやっぱり、武もマフィアのボスだったオレと一緒に過ごした記憶とやらがあるわけだね」
「あ、あ…ツナは、ほんとに、ないのか…」

「残念だけどね。まあそういうことだから、少し交流を深めとくと良いよ。オレは恭弥君のご機嫌取って来る」

そう言いながら立ちあがった彼の人に、彼は少し慌てて言った。

「かなり不機嫌だったぞ、下手をすると…」

「さっき、トレーニング場に来るよう伝えたから。じゃ、また後でね」

ひらひら、と手を振って部屋を出て行った彼の人をやや茫然と見送ると、彼の後方でほう、と陶然とした溜め息が聞こえた。

「「かっこいい…」」

「…お前ら」

確かに、所謂大人の魅力とやらがあって、モテているのだが。

「……ところで、山本はどんな最期だったのだ？」

しばらく額に手を当てていた彼だったが、陶然としたままの二人に呆れを通り越して疲れが出てきたので、話題を振ってみた。

振られた方といえば、“さいご”のニュアンスに気がついたのだろう、首を傾げつつ言った。

「オレが不治の病に罹って、ツナに見送られました。それが？」

「沢田を“ヒトリ”にしたことを後悔したか？」

「!? それを…なぜ」

「簡単だ。俺達…今は違うからな、元守護者とも言うか。皆、“『沢田綱吉』をヒトリにしたこと”を大きな悔いとして転生していることがわかってるからだ」

彼の言葉に、ソファに浅く座っている山本は傍らに突っ立っている獄寺を見上げた。

「…ああ、オレもだ」

頷き答えた獄寺に、山本は茫然と呟く。

「それ、どういう…」

「つまりはな、オレ達みんな、違う世界から来てるらしいってことだ」

「……ハア？」

「俺の前世では、沢田は京子と結婚し、息子がいた」

彼がそう言うと、完全に山本は固まった。

「…や、だって、結婚はしないって、いやしなかった、はず…っつか先輩死んでたし…笹川別の人と結婚したし…」

「ふん。死別にしろ他の理由にしろ、誰もが自分以外の守護者が十代目の傍にいない状況で自分が死に、ヒトリにしまった後悔を抱いてこの世界にいるってことはわかってんだよ!!」

キレるように言った獄寺に、彼はその肩を叩いて宥めつつ、やはり固まっている山本へ言葉をかける。

「彼の傍にいたいのなら覚悟しろ。相手は手強いぞ。何せ、約十も上だからな」

もう一度守護者という地位に就きたくとも、今の俺達では年齢が幼すぎて相手にされん。

「…覚悟なんて。ツナの傍にいれんなら、いくらだって捧げてやるよ」

彼の言葉に、生まれながらの暗殺者と評された男の目にもすれば危険な光が宿る。

「それなら良い。」

「…テメエ、何考えてやがる」

獄寺の陰のある言葉に、彼は肩を竦める。

「何も。極限わかってしていることは、恐らくこれが俺の役目なのだろうということだ」

「「はあ??」」

説明を求めるような目つきをする二人の横を通り過ぎ、窓の前に立つ。

そこから見える真っ青な空に、彼は思いを馳せる。

(…『明るく大空を照らす日輪』、その役割)

彼の人は何か悩んでいる。…否、^{いや}企んでいるとも言おうか。

そんな彼の人の行く先を照らすのが、自身の役割だと彼は知っている。だからこそ、余計なものは排除しなくてはならない。

(覚悟の極限無い者を傍に置くわけにはいかない…)

そう言い訳しつつも、山本武を試したその理由は、それだけでなかった自身の思いに彼は薄々気づいていた。

多くの敵と味方との前に立ち、敬愛され憎悪される、我らがボス。
彼の人への思いは、義弟に対する思いが多少強くなっただけのものだと彼は思いこんでいたのだが…

（…あるいは。）

彼の人と出会い、何も知らないと告げられ、彼が茫然とする横で暴走した雲雀恭弥。

今や『暴君』という言葉が代名詞となりつつあるその男が、暴走した勢いで彼の人につけた浅い傷。
それを見た瞬間、身体中が沸騰したように熱くなって、気付けば力尽くでかの男を叩きのめしていた。

（…同じところだったからな…）

前世の彼が、死ぬ直前に見た、沢田綱吉にあった傷、と。

雲の場合

『どうせ死ぬ場所は貴方の傍でしょうから、その時は塵一つ残さず燃やしてくださいね』

『うざい』

『クフフ、つれないですねえ』

何故、その言葉を実行しなかったのかと、悔やんだ。

『“塵一つ残さず”…？』

『そうだよ。君がやってあげれば』

『でも…オレじゃなくて、ヒバリさんがやってあげた方が』

『いいから。君がやりな。…来るよ、さっさとしなよ』

何故、あの時そんなことを強要したのかと、悔やんだ。

『…………骸…』

あんな顔をした君を、見てしまった自分を、憎んだ。

『ヒバリさんっ ヒバリさんっ!!!!』

そして…、死ぬ間際に見てしまった君の顔を、この上なく愛おしく思ってしまった自分を憎み、同時にそんな顔をさせてしまったことを、凄く凄く凄く――後悔した。

カラアン…

「…余所見でもしていたのか？」

闘う時は、彼の記憶にあるものと同じく、印象が変わる目の前の男に、彼はただ無言を返す。

吹っ飛ばされた片方のトンファーは無視をして、もう一つ取り出した。

「…本当に四次元ポケットでも持っているのか…？」

「何言ってるの」

『ヒバリさん、そんなにトンファーどっから出してるんですか…？』

不意に蘇った声に気を取られかけ、何とか持ちこたえ今度は吹っ飛ばされずに済んだ。

「…気になることがあるなら、やめるか？」

「っ やめないっっ!!」

目の前の、橙色の炎を額と両手に灯す男との闘いは彼が望んだこと。いつだって目の前の男の都合に左右されるが、それでも彼は、この時ばかりは彼のことを見て、彼のことしか考えていないだろうという事実には酔いしれるというとても不毛な想いを抱いている。

「恭弥」

名前を呼ばれ、がしつと得物を掴まれ、様々な意味で彼は固まった。

「落ち着け。俺はここにいる」

「…っ」

真っ向から向けられた視線。瞠目し、身体の強張りは更に酷くなる。

「どうした？」

「……………何でもない…夢見が、悪かっただけ」

今も昔も、不毛な想いを抱いていると知らしめる、不愉快な夢を見ってしまっただけ――

俯いた彼に、ふ、と息を吐くと、男は力を弱め、同時に炎を消した。

「っ 何で、」

「そんな状態で闘っても、納得のいく結果にはならないでしょ？」

お茶でもして気を静めよう。ここからなら恭弥君の部屋の方が近いね」

それに今オレの部屋は、了平君達がいるし：

「：彼と駄犬以外にもいるの？」

「ん？うん。日本に行って会ったんだ、山本武って子。恭弥君も知ってる？」

「：知ってる」

彼は知ってて、言わなかった。日本に残してきた、部下から連絡はあったのだけれど。

「後一人、っぽいね。そしたら六人：守護者とおんなじ数か」

「：君、それ、わざと？」

「ん？何が？」

トレーニング場の扉を開きつつ言った男の言葉に、何か含みがあるような気がして彼は言ったのだが、相手はさすがは大マフィアのボスというか、読めない。

（：彼なら簡単に読めたのに）

綱吉、と口の中で呟く。脳裏に思い描くのは、前世の記憶の中に在る存在。

「さて、あー、ここって紅茶しかないんだっけ」

「…僕が淹れるよ」

「あ、ほんと？よろしくね」

オレ砂糖一つね、と言いながら勝手にソファに座る男に、彼は内心溜め息をつく。

「恭弥君って丸くなったよね」

「…何が」

ぽつりと言われた言葉に、反射的に返す。

「だって出会いはあれじゃん？」

「……」

彼にとっては思い出すのも忌々しい、三人掛けソファに一人で寛いでいる男との初対面。

「まー、あんな出会いだったからこそ、君達をファミリーに入れることを了承させることもできたんだけど」

真剣に今時の小学生どうなってんだよって呟いたらリボンにアホかって凄い勢いで突っ込まれて痛かったな！。

たった一年ほど前の話を、物凄く懐かしそうに語る男に、彼は内心毒づく。ついでに聞こえてきた男の元家庭教師にはエールを送っておいた。

「たった二人で見た目小学生が乗り込んできて。見た目小学生の癖に大の大人と渡り合うだけの強さで。オレに会わせろって聞かなく

て。」

ザンザスが後から聞いてマジギレしてたなー。あれ引き留めんの
大変だったよなー。

(…そうだったんだ)

「いざオレと会ったら自分達のことを知らないかって聞いてきて。
知らないって答えたら暴走しだして」

「…………はい」

「あ、ありがとう」

にこっと笑顔で受け取られ、その笑顔に前世の記憶にあるものと
同じ気配を感じて息を吞むが、次の瞬間には失われていて。

「で、了平君が恭弥君のこと止めたんだよね、力尽くで。」

いやぁ懐かしい。と呟く男に、はあ、と盛大に溜め息をついて見
せつつ、彼は自分の分を一口口に含んだ。

「あんどき、実は超メンドクサイ連中の相手してるところでねー。
君達の乱入のおかげで色々事なきを得たから万々歳だったんだけど、
無茶苦茶苛々しててさー」

「…そうだったんだ」

「うん。それに隼人とかととっくに会ってたし、もしかしたら君達
のも同じかなとは思ってたんだけどね」

「…?」

「つまりはね、」

あの時のあれね、八つ当たり。

反射的に投げつけたトンファーは、軽々と受け止められ、彼は何か疲れて身体から力を抜いた。

「投げちゃ駄目だよ、ほらいいこいいこ。」

頭を撫でられ、何とも言えない気持ちになりつつ、どこか心地良い温度に彼は目を閉じた。

気付いた時には、沢田綱吉が気になってしょうがなかった。

彼がそれとなく見つめ続けていると、綱吉も見つめている相手がいることに気付いた。…六道骸だった。しかしその男も見つめている相手がいた。

…自分、だった。

その衝撃は、あの自分が学校に行くことを忘れてしまうくらいに酷かった。

心配したらしい副委員長が家まで来たことで、彼は自身の状態に気づき、自嘲した。

しかし、現状が分かったからといって、今更何とかできるような想いでもない。

何て、不毛な ———

考えるだけ無駄だとわかっていても、考えずにはいられなかった。距離を置いて、自然と相手の気配がすれば窺ってしまう。それに、忌々しい男は自分にまわりついてくる。そして綱吉は喧嘩を始める自分達の元へやってくるのだが、その視線はやはり殆どあの男に向いていて…。

クルシイ。苦しい。息苦しい。イキグルシイ。

死にそうなくらいだ、と思っても、愛しいと思う心は捨てられなくて。不毛だと、馬鹿なことをしていると思っても、忌々しい男と武器を交えれば、少しでも自分を見てくれる愛しい相手の視線に酔いしれた。

彼の最も強い衝動は戦闘に対するものだった。それは、想いすら超越して…あるいは、超越させて。忌々しい男との間に、喧嘩をやめさせるために入ってくる愛しい相手との闘いに、この上もなく身体は悦んだ。

やがて、愛しい相手は多くの困難を経てマフィアの頂点たるボン

ゴレファミリーのボスとなった。

日本を離れるのは嫌だったが、彼にとってそれよりも嫌だったのは愛しい相手との離別だった。勿論、風紀財団を立ち上げボンゴレとの繋がりはちゃんと得ていたが、個人的な繋がりがなくなりかねないのは宜しくなかった。

その為に、彼はその残りの人生の殆どを海外で過ごしたのだった。

ボスとなった後も困難ばかりに恵まれてしまったかのファミリーは、まず初めに『全てを洗い流す恵みの村雨』を失った。そして殆ど間をおかずに『激しい一撃を秘めた雷電』を。しばらく時を置いて『明るく大空を照らす日輪』を。またしばらく時間が空いて、粘りに粘った『荒々しく吹き荒れる疾風』を。

残った二人：三人と、我らがボスは孤立無援の状態で抗争に至った。敬愛する人を庇って『実態のつかめぬ幻影』の片割れが死に、庇われた方は彼を――『何者にもとらわれず我が道をいく浮雲』を庇って死んだ。

そして庇われた彼はといえば、自分を庇った忌々しい男が昔彼に言った言葉を思い出し、その処置を愛しい相手に任せ自身はその人を庇って死んだのだった。

段々と痛覚すら鈍くなり、ああ死ぬのかと思う意識の中。

好きな相手を塵一つ残さず燃やし尽くした、涙で歪んだその顔を向けて、彼の名を呼ぶ愛しい相手に。

ああ、やっとこっちを見た

そんなどこか仄暗い想いと。

その顔を、僕にも向けてくれるんだ…？

その、得難い喜びとが。

彼を支配し、唐突にそれらは後悔へと変わった。

「恭弥君？」

「…ねえ、君、守護者はどうなってるの」

この一年、聞かずにいたことを、彼は聞いてみた。

「いるけどいない…って感じかな？」

基本無表情だが、目は口ほどに物を言うタイプの彼の、真剣みを帯びた言葉に、男は肩を竦めつつ言った。

「…どういふこと？」

初めて彼らが城に乗り込んだ時。それらしい人間は見当たらず、いかにもな護衛が数名の他は、かの家庭教師が男の傍に控えていただけだった。

一年間、それらしい存在の影は一切感じられなかった。

というかいたら、笹川了平が自分担当にされてなかったんじゃないか？と思う彼なのだが。

「一応ね。オレがボス就任の段階で、早く決めろって結構圧力掛けられたんだけどさ」

カップをテーブルに置いた男は、指輪をはめた手を掲げた。

「こんな呪い染みたりング、適当に選んだ人間に扱えるわけないだろう？」

「……君は扱えてるっていうの？」

馬鹿馬鹿しい、と言いたげな台詞に、男は苦笑した。

（不完全な？バーナーでさえ撃ててない癖に）

彼の思考の通り、男の手に在るのは原型オリジナルのリングであるのに、男は死ぬ気の零地点突破までしか会得していなかった。

それは本人からも確認済みだ。：尤も、？バーナー等の技は必要に駆られた戦いで前世の記憶に在る存在が生み出したもので、同じ状況を全く経験していない男が何もなしに生み出せる技ではないのだが。

「さあね。オレの勘だと元々このリングを思い通りにできるのはオレじゃないと思うけど……。」

「……」

君以外に、ソレを上手く扱える人間がいるとしたら、故人のアノヒトしかないんじゃないの。

口をついて出かけた言葉は、思わず呑み込んだ。元々、不用意な発言は自然と呑みこんでしまう傾向がある。理由はわからないが。

「何の話だっけ。ああ、守護者か。それでも一応、ずっと封印しくわけにもいかないからさ。仮に、ってことで配ってはあるよ」

オリジナルを持ってるのは、オレだけだけどね

そう言つて最期の一口を飲みきった男に、彼はそう、と返した。

「^{フリーモ}？世の話だと、本当にふさわしい者の手に在るのなら、自ずから枷は外れるらしいけどね」

男がかちゃん、とカップを置いた音がやけに響いた気がして、やや茫然としていた彼はハッとした。

(…つまり、枷を外すことができたら…)

本当にふさわしい者 —— 真の守護者と、認められる…？

男が帰り、再び一人となった部屋で、彼は窓の外を眺めながら考

えていた。

そこから見える光景は既に暗く、外に明かりはさほど存在しない。
「あんまり明るくても目立ちすぎるだけでしょ」というのは男の言葉。大抵の人々は夜を警戒するものなのだが、男にとってはそうではないらしかった。

(……ここにいる綱吉は、アイツを好きじゃない……)

しかし彼は、例え男が自身の知る存在とは全く違うものであっても、“同じ”としか見えないその存在に惹かれているのだった。

(……なら。いい、よね)

にや、と、その無表情な顔に僅かな笑みが浮かんだ。

雷の場合

『ボンゴレっ』

一目惚れに近いものがあつたのではないかと思うくらい、彼のこ
としか見ていなかった。

『ん？ どうしたの、ランボ』

そして同じくらい、彼にも見つめられていると知っていた。

『もう、ここに来てはいけない』

『でも……っ』

『お前は最後の砦なんだ。 …中には、お前に特攻させるとか馬鹿
なことを言ってきている奴らがいる。このままじゃ、押し切られる
可能性がある』

『……オレが、他のファミリーの人間だから……？』

『…ああ。 全く、オレの守護者なんてファミリー内から選ばれた
のなんていないってのに……』

それどころかもっと厄介なのばっかだっというのに、年若だから
っただけで……！

『…ボンゴレ、でもそれじゃ、貴方の迷惑になるんじゃない』

『ランボ』

目は口ほどにものを言う。彼は一度だって想いを告げなかった。そして目の前の人も決して何も言うことはなかった。けれども、互いに互いを想いあっていることは、誰よりも、誰よりも、…知っていた。

だからその目に宿るものが何なのか、よく、わかった。

『…わかるね？』

『………はい』

頷きたくなかった。昔のように必死で首を振って、泣きながら嫌だと縋り付きたかった。

でもそれは許されない。そもそもそれが許されるのならば、

———— 二人は結ばれていたはずだから。

『…ボンゴレ、最後に一つ、良いですか…？』

『ん？ 何？』

これで最後ならば。もう、会えない可能性がほぼ零になるというのならば。

『昔みたいに…抱きしめて、もらえませんか』

ツナ、と呼びかければ。瞠目したその人は、泣き笑いのように顔を歪ませて。

『いくらでも』

記憶にあるよりもずっとしつかりとした腕に、痛いほど包まれて、彼は涙が滲むのを感じた。

『…ナ、ツナ、ツナア…！』

『ランボ。…ごめんね』

その言葉が何を示すのかは、感情が高ぶってしまったて、目を見なければわからない為に確認することはできなかった。

泣き止むまで抱きしめられ続けて、最後に、『…オマケ』と額に口づけられて。

『…さようなら』

『さよなら』

笑顔で、別れたのに。

ボンゴレファミリーの本部である『城』の崩壊が告げられたのは、その数日後。

多くの犠牲。その殆どがファミリー内で“膿”と呼ばれた者たちだったが、その中にボスの名もあった。守護者達が必死で手を尽くしたが、遺体を見つけることは出来ず、炎を失った死炎書が、その人の最期を示しているだけだった。

「ハッ！！　　ッハ、ッハッハッハッ……」

それは悪夢。　大量に汗をかきつつ息切れをしながら目を覚ました彼は、ベッドサイドに置いておいた飲料水のペットボトルを取り、一気に半分ほど飲みほした。

「…ッ、っそ、」

あの人と再会する前から見ていた夢は、再開した後会わなくなつてからより内容が明確に、目覚めはより酷くなった。

（…ツナ）

重なる、二人の優しい笑顔。

片方は、彼の知る存在ではないと、その瞳に宿る感情が全く別物であることからよくわかっていたけれども、焦がれる心を止めることはできなかった。

コンコン

「誰」

「わたし」

「ああ…どうぞ」

入ってきた女性は、その片目を眼帯に覆われた秀丽な顔を顰めて、まだ寝ていたの、と言った。

「すみません。今起きたところです…髑髏嬢」

「…ちゃんと起きて仕事しないと、ツナに会うのが遠くなるわ」

「はい、わかってます…」

わかっていても、毎日悪夢を見てしまう。…悪夢だけでも、それは幸せな記憶も兼ねている為、目覚めたくない衝動に駆られてしまうのだ。

「…日本に戻った時、雨の人に会ったそうよ」

「…!! では後は、六道氏、だけですか…」

「…そうね。骸様…どうしているのかしら」

ポツリと言いつつ、彼女は彼に着替えを手渡した。

「急いで。十五分後、会見」

「つつ!?! うわわ、急ぎますっっ」

時計を見て本日の予定を思い出したらしく、慌てて飛び起きた彼に、背を向けながら肩を竦め、彼女は部屋を出て行った。

「ランボ」

昼過ぎ。一段落した仕事に、ぐったりとしていた彼のもとへ、彼女がやって来た。

「…何ですか」

「あの人が、今日の午後空いてるかって。空けてきたから行きましょう」

「……………!?!?!? いや行きますけど、空けていいんですか!?!?」

“あの人”。示す人物は、彼女が無理矢理予定を空けるくらいだ、一人くらいしかない。

しかし、午後の予定も確か人と会う約束だったような…?、と盛大に首を傾げる彼に、しれっと彼女は頷き、言った。

「大丈夫。」

「いや、何が大丈夫なんですか…?」

「そりゃ、会う相手ってのがオレだからな」

キィ、と独特の音とともに開きっぱなしだった扉の影から現れた人物に、彼は瞠目した。

「ディーノ氏! ……そうか、次はキャバッローネとの…」

「本気で忘れてたのか」

普通なら機嫌を損ねてもおかしくないが、彼らはそれなりに親しい仲だった。車椅子に乗っているキャバッローネ十代目はからからと笑って彼に近づいた。

「…ご機嫌麗しゅう、ドン・キャバッローネ。」

「んー、まあいいか。そっちも元気そうだな、ボヴィーノの名代。」

高齢のボス、その後継が定まっていなかったが故の、名代という地位。彼はそれだった。

「ええと、それじゃこれから…?」

「おう、オレんとこの車で行く。目立つ格好はすんなよ」

「はい」

その地位を任されることになった時、あの人が力になってくれる人を紹介するよ、と言って紹介してきたのが、今現在彼のスケジュールのほぼ全てを管理し、彼の仕事を手伝ってくれている彼女、クローム・髑髏だった。驚いたことに彼女はあの人と同じ年で、その上で幼馴染であるらしい。かなり信頼している様子に、かなり嫉妬したことはあの人だけには秘密だけである。

そして、名代という地位、あまりにも年若であることに、彼の存在は公然の秘密とばかりに秘された為、以前のようにあの人と気軽に会うことができなくなってしまった。

『立派になった姿に会える日を、楽しみにしているよ』

言われた言葉は、楔のように彼を縛り付けた。同時に、彼女も。だが、今回、あの人から「会おう」と言ってきているのだ。躊躇う理由はない。それでも、一応一目は気になるのだらう、だからボンゴレと親しいキャバッローネを通したのだ。

「うう、緊張する…」

「……ボスは優しい。何も気にすることは無いわ」

「：髑髏嬢、失言です」

「うるさい」

「はは、お前ら仲良いなー」

聞いたところじゃ、ツナに引き合わされた時が初対面だったんだろ？何でそんなに仲良いんだ？

部屋を出て、彼らの数歩手前を進んでいるディーノが、首だけ振り返って彼らに問うた。

問われた方といえば、顔を見合わせ、

「「ただ、ちょっと知り合いだっただけ（です）」」

またそれかよ、という笑い声には、二人とも笑顔で応えるのだった。

コンコン

「ツナー、入んぜー」

ノックの意味があるのかないのか。返事も聞かずに扉を開けたデイーノに呆れる彼らだったが、室内にいた方は予測済みだったらしい。

「お元気ですか、デイーノさん」

「見ての通りだ」

「……では、身体の調子は？」

「すこぶる良いぜ。とはいえ、やっぱりこれは手放せねーけどな」

これ、と言いながら車椅子のひじ掛けの部分と軽くたたいた彼は、
「お前、またこっちに医療班派遣してくれただろ？ 感謝してる。」
と続けた。

「…元はといえば、オレが原因ですから」

「そんなことねーって。 ま、そんなじゃ、オレは仕事を果たしたってことで、いいのか？」

「ああ…ヴァリアーの方へ寄って頂けますか。」

「りょーかい。じゃ、またな」

「ええ」

部屋の外に控えていたキャバッローネの部下とともに、ディーノの気配が遠ざかった頃、あの人は漸く口を開いた。

「…さて、久しぶりだね、ランボ」

「…お久しぶりです、ボンゴレ」

何か他にも一杯久しぶりの顔触れがあるけど…！！

「「ランボか？」」「…君、もっと子供じゃなかったっけ」

「三人とも何言ってるの？ ランボは武の一つ下、了平君と恭弥君の二つ下なだけだよ」

「「「は？？」？」」」

本気で混乱しているようだ。

無理もない。オレだっていつだったか、マフィアのパーティーで

獄寺氏に初めて会った（…再会した？）時心底驚いた。

「元気に頑張ってるみたいだね。報告は受けてる。頑張ったね」

さあ、おいで

「…っ、ボンゴレ、オレはもう子供じゃありませんっ！」

「あれ？じゃあご褒美の“ぎゅっ”は無くてもいいの？」

「つつっ…！！」

それを言い出したのは自分なのだけれど、この状況で持ち出さなくても良いじゃないか…！！と彼は思った。何せ、周りからのやや殺意の混じっているように感じる気配が怖くて仕様が無い。

しかし躊躇いも束の間、このままこうしていても仕方ないと彼は開き直すことにした。時間は如何様にも人を変えるのだ。

「っと」

少し勢いがついてしまったが、しっかりとした腕の中に迎えられ、彼はほっとした。同時に、息苦しくもあるのだが。…その力強さは、“ツナ”との別れを思い出させるから。

「よしよし。…で、何で四人ともそんな目を向けているのかな」

「「「そいつを離れたら 言う／言います」「」「」」

「いや、何か殺しそうな目をしてるんだけど。駄目だよ、中学生がそんな目してちゃ」

「…ツナ、貴方が言えた義理じゃないわ」

「それはリボーンに抗議しないとね」

「「「…、え？？？」」「」「」」

一切気配を感じてなかったのだろう、突然聞こえてきた女性の言葉に、四人は気が削がれきよんとしてゐる。

「「「…髑髏？」」」

「ん、風のことかも知ってるの？」

「「「“風”！？！？」」」

「…そう呼んでゐるのは、ツナともう一人だけ」

むす、と彼女が意見したのは無反応の四人。

（ううん…混乱してゐるんだな）

仕方ないけど、と思いつつ、彼は抱きしめる手を緩めてくれるよう促した。

「ってか、何でお前、」

「…何が？」

「極限お前幾つだ？？」

「……」

「答えろよ」

「女性に年齢聞いちゃいけないよ。…まあ、オレと同年なんだけど。それが？」

「「「「同年！？」」」」

詰め寄る三人（残る一人は眼光が物凄く鋭い）に、あの人が割り込んだ。

「何だよ、何でお前だけ…っ！？」

「…知らないわ、そんなこと」

「っ！ アイツが関係してゐるんじゃないだろうな！？」

「…誰のこと？」

「果実頭に決まってるでしょ」

「…わからない。連絡…取れないし」

ポツリ、と言う彼女に、あの人がもうやめろ、と再び割り込んだ。
：彼女があんな風に弱々しくなるのは、六道骸の関わる話題が出た時だけだ。彼もそれを知っていたし、そうなった彼女はやや情緒不安定で危険なところがあったから、その庇うような姿勢にも納得がいった。

「とにかくみんな、落ち着いて。喧嘩させる為に集めたわけじゃないんだから」

殆どの面々がハッとして、黙り込んだ。

「今日ここに呼んだのは、オレの知る限りで“オレの知らないオレ”を知っているらしい人物だよ」

間違いは無いよね？

神妙に、全員が頷き、あの人に促されてそれぞれ席に着く。

「何で君達にそんな記憶があるのかは正直皆目見当がつかない。何となくトウリニセツテが関係しているような気がするだけ。だからこうして集まって、軽く話し合いでもしてみようと思って」

「…トウリニセツテが関係してるの？」

「そんな気がするだけだよ、風」

その言葉に、あの人と言うなら間違いは無い、と口々に言いだす残りの面々。

「…何でそう、確信持って言えるかな…？」

「十代目、御自身の超直感を舐めてはいけないと思います。」

「そうよツナ、虹の子達だって言ってたわ」

「…：…そもそも君、それなりに自信が無かったら口に出さないタイプでしょ」

ああ確かに、と頷く人々。

「って、話脱線してるし。そうじゃないんだよ、あー、でもどっから話せば良いんだ？」

がしがしと頭を掻いて悩んでいる様子のあの人に、幼馴染である彼女が言った。

「最初から、話せば良いと思う」

ツナのことなら、彼らは何でも知りたいはず

「…風サン。ニュアンスが何かおかしい気がします。っつーか何で目が輝いてんだ君ら」

呆れた声に、全員から非難の声。

「ハイハイ。オレの話ねえ。じゃありボーンとの出会いからとか？」

「ちなみに髑髏と会ったのはいつなんだ？」

「んー？幼稚園に入る、前？ オレはよく覚えてないんだけど」

「「「「そんな前から！？」」「」「」」

「…って、アホ牛は知ってたんじゃないかねえのかよ」

「そこまで聞いてなかったんで…」

そこで、あの人から、そりゃ幼馴染なんだからそんなもんでしょ、という言葉がかかり、一同脱力。

「でー、オレ小学校に上がってすぐの頃くらいまでは身体弱くてさ、小学校とか中学の頃はドジばっかやってたなー」

「身体弱かったって、持病か？」

「いや、よくわかんないんだけどね、了平君。しょっちゅう熱出して倒れてたけど。まあ、そんなんでやっとこさ高校に入学してすぐの頃、リボーンが現れたんだ」

記憶に在る時期と少しずれていることに、内心首を傾げる元守護者達。

「いやもう、高校三年間みっちりしごかれた。凧もいつも付き合わせてさ。大変だったよね」

「……有意義だった。」

「凧はそう言うけど、オレは大変だったよ……」

たそがれるあの人に、獄寺が恐る恐る、といった様子で声をかけた。

「しかし、その頃確か、何度かイタリアにいらっしやいましたよね……？」

「ん？ ああー、そうだね。九代目との面会とか会見とか面会とかで。ああ思い出してもウゼエ」

「……ツナ、本音出てる」

「いいじゃん別に。今更クソジジイの悪口聞かれたって、誰も文句言わないし。ああ、でもザンザスが嬉々としてジジイのこと抹殺にかかるか」

それは困るな。

「……九代目と、仲が悪かったの？」

「んーそっか、了平君も恭弥君も結局オレと九代目が一緒にいる場面とは遭遇してないのか。うん、過去形じゃないよ。」

「…つまり、今も極限仲が悪いわけだな…」

「……………城の門の周囲に植物の気配が無いのは、まいた塩の量が原因」

「塩じゃなくて塩の量か…」

ふふふふ、と遠い目に棒読みで笑っているあの人に、ぽそりと幼馴染の彼女が付け加えた事実は一同をちょっぴり戦慄させた。どんだけまいたんだ。

「…で、獄寺は何でそんなこと聞いたんだ？」

天の助けとばかりに、山本の質問に獄寺は嬉々として返した。

「オレが十代目を初めて拝見したのが、六年くらい前に出たパーティだからだ」

「そーいやクソ…、九代目に押し付けられて、何度か行っただけ。」

途中何度かリボーンに押し付けただけ」

「それで他の虹の子と遊んでたのがバレて、お説教」

「風も同罪だったけどね、あれは。いやあ、コロネロとリボーンがマジ喧嘩始めて、ラルがすごーい勢いでキレてさー。びびったなー」

「…それと、ツナ、緑の子に拉致られたわ」

「拉致って…。まあ間違いじゃないけど。別にヴェルデは悪い奴じゃない…、悪い奴か、アレ。うーん、良いところもあるんだよ、あれで。」

変わってるけど。変人だけど。マッドだけど。」

前世ではあの人の命を狙った人物の名に、幾人かが瞠目する。

「でーまー、高校卒業と同時にイタリアまで拉致られて、…継承式して、こっちで大学飛び級で卒業して…今に至る？」

（（（（（色々はしよった…）））））

「継承式って、どんなのだったんだー？」

山本の、その無邪気な質問に、空気が凍りついた。

「…：オレは、その話したくないから。知りたいんならオレは出てくから、風かランボに聞いて。」

鋭い目。怒りを堪えているような、そんな眼差し。そして、誰も返事する前に行ってしまった。

「…何があったの？」

雲雀が、鋭い目つきで名指しされた二人を見つめた。

「…人が死んだの。ツナの…親友が、ツナを、庇って」

「ディーノ氏が車椅子生活を余儀なくされているのも、継承式が原因です」

顔を見合わせた二人は、どこか痛みを堪えるような顔をして、交互に話し始めた。

「どういう、ことだ？ シモンファミリーか？」

「いいえ。…ボンゴレの親友というのが、そのファミリーの十代

目ボスです」

「古里炎真が?!」

「そう。ツナの言った通り、拉致の様にイタリアに来たわたし達が、初めて出会った同年代の人だったの。それで、ツナと彼はすぐに仲良くなったわ」

「そもそも、この世界ではザンザス氏が遠縁ながらボンゴレの血を引いているということがわかっていて、養子ということもみんな知っているんです」

「……ということは、“揺りかご”は起きていない？」

「そういうこと」

そこで二人は一度口を閉じた。空いた時間、聞き手になりつつも合いの手を入れていた方は、聞いた情報を改めて胸の内でも繰り返す。

「元々、九代目とは折り合いが良くなかったとオレは記憶してるんですが…髑髏嬢、」

やがて口を開いた彼に、彼女はこくりと頷いた。

「そのこともあってか、ザンザス氏とボンゴレは仲が良いようで…。」

「みたいだな。」

「獄寺は知ってんのか？」

「ヒバリが暴君扱いされてんのに、前は同じように暴君として有名だった奴の名前が出てこないのが気になってな。一回十代目に聞いてみたら、よく酒杯を交わす仲だとおっしゃっていた」

そうなのか…と一同やや呆れが表情に出る。

「…継承式の数日前、ツナは言ってたわ。『嫌な予感がする』って」
そもそも、わたし達は継承式のことを本番当日まで知らされていなかったの

「ちなみに、オレを含めた周囲は、準備の始まった一週間ほど前からボンゴレとの接触を禁じられていました」

「ずっと、虹の子達ともって一週間以上前から修行三昧。おかしいとツナと二人思っただけ、文句なんか許されなかった」

それで、これで終わりだって言われて、やっと城に戻れたと思ったら今度は、すぐに着替えろって言われて。

「継承式に出たボンゴレは、とっても怒っていました」

それはそれは、とても。オレもちょっと近寄りがたかったくらいで。笑顔で呼んでくれなきゃ近づけなかった。

「始まる直前までどこか不安そうにしていたんだけど、九代目と何か話した後は少し落ち着いていたみたいだったわ」

「始まってしばらくはずっと、近づきたいオーラを出していて、オレや髑髏嬢、ディーノ氏に古里氏くらいしかそばにいなかったんです」

「…そして、事は起こった」

二人の他にも十代目候補者がいたことは知ってる？

「……まさか」

「まさか、でした。…残る候補者達が結託し、九代目への抗議を込めて、ボンゴレを狙ったんです」

「わたしとランボを庇ってキャバツローネの人が重傷を、ツナを庇って……」

「倒れた古里氏をボンゴレが咄嗟に抱きとめてましたが、既に事切れていました」

「少し茫然としていたツナは、敵が更に攻撃しようとしているのに気付いて、すぐに反撃したの」

その時、今まで欠片も使えなかった零地点突破を使った

「欠片も使えなかった」？

「…零地点突破も、？バーナーも、それらの派生の技も…、全て、避けられない大きな戦いの為、編み出された技だった」

確かに、と頷く元守護者達。

「ツナは、そういう戦いを経験してないの。流されて…かなり嫌々だったはずよ」

けれども、九代目に見出されてしまった。

「ボンゴレが零地点突破を使ったことで、事態に收拾がつき、皮肉なことに誰もから認められる存在となりました」

当時、九代目以外に、零地点突破を使える人がいなかったそう。

「…今の話で気になったことがあるんだけど。あの子…かなり頑固な性格だったでしょ」

それなのに、流されてとはいえ、素直に言われるまま、ボスになろうとしていたの？

「…奈々さんの為。ずっと、心配掛けてきたから…、彼女の言うことなら何でもする、っていうツナの性格を利用して、虹の子達を使つて九代目が外堀をうめてたの…」

「「「「何（だ／ですか）ソレ非道…」「」「」」」」

「それがわかったのも、最近のこと。雨の人と会いに日本に行くちよつと前に連絡貰ったから」

ツナ、だいぶキレてて、次会った時はもう顔面に濃度100%の塩水ぶっかけてやる…って言ってたわ

「…塩を塩水?？」

「更に、濃度100%でもっと嫌がらせ、と。極限相手自身にかけるというのもそうであろうな」

「時々ボンゴレ、気の回し方が変なんですよね…」

さっきだつて…と、“ご褒美”のことを思い出した彼は、不穏な空気になりかねないことに気付き、慌ててやめる。

「？」

「な、何でも無いです。それで、その日を境にボンゴレは九代目とかなり距離を置くようになりました」

「同時に、ボヴィーノの方でちよつと色々あつて、ランボがファミリーの仕事をしなくちゃいけなくなったから、わたしはその手伝いをしてやってくれてツナに頼まれて、直接会ったのは数年ぶり」

「右に同じくです。…オレの場合は連絡すら取ってませんでしたけど」

はふ、と彼は息を吐きつつ言つて、ソファに身体を沈めた。

ふと、思い返すのは今世、あの人と再会した時のこと。

まだまだ幼い時分の彼は、思うままにあの人に走り寄り、抱きついた。そんなことをしてはならないと、理性ではわかっている、身体も中身すら殆ど子供であつたから。

そうして伸ばされて、泣きじゃくる彼を撫でた優しい手。落ちて着いた声が彼を宥め、更にはいつかと同じく、額にキスをされた。

『オマケ。』 ……台詞すら、同じ。

ご褒美が、『ぎゅっ』になつたのは、その頃の名残。あの暖かい腕の中に、もう一度…そう、ずっと、願っていたから。

嵐の場合

『君はオレの最も信頼する右腕だよ。』

『勿体無い御言葉です、十代目』

その言葉を聞くことは本当に少なかった。あの方はそういうことを滅多に仰らない謙虚な方であつたし、そこに至るまでオレ自身かなりの外的な行動をとつたものだった。だからこそ、その言葉を初めて頂けた時は、本当に、嬉しかった。

『他のどんな言葉よりも、こっちの方が君は喜んでくれるかなと思つて』

『はい！ 有難う御座います…！！』

優しい笑顔。 ずっと変わらない仕草。 どこまでも素晴らしい御人柄。

どれほど、想い焦がれたことか。 —— けれども。

『好き、だ』

『ツナ…』

あの方の想いは、中学時代からの友人に向けられていて。友人の方も、同じ想いを抱えていて。

…全く同じ想いを、彼も向けていたというのに。 あの方は、そのことには気付くことはなく。

『……ッッ』

人知れず、言葉を呑みこんだ。唇を噛み締めた。恐らく彼以外誰も知らない、二人の想いを、じっと見守り続けた。

“最も信頼する右腕”、その言葉こそが彼を支え、彼を彼たらしめるものとなった。彼の生きる意味、そのものと。

だって、その相手は彼にとってももう、言葉ほど内心では馬鹿に出来ない、大切な友人だったのだ。

だって、あの方は彼にとって何よりも優先すべきヒトで、優先したいヒトだったのだ。

だから、見守り続けた。そして、自身の居場所だけは譲らなかった。絶対に、絶対に……絶対に。

物心ついたときから、環境に違和感を感じていた。

既視感を覚える景色。妙に感じる温度差。己の境遇に苛立ちを覚えるとともに、そんなものを感じる必要はないと告げる自分がどこかにいた。

曖昧な感覚に揺蕩って過ごすうち、ふと“以前”は何かしら負けたこと、逃げていたことに立ち向かっていく自分がいた。

そして気付けばそこは、見知らぬ場所だった。

あの方と出会う糸口を見つけたのは、父親の主宰するパーティだった。勿論マフィア関係だ。

いつものように姉の差し入れを口にせぬよう頑張りつつ、ピアノに向かったその時、視界に入ったその人に、目の前が真っ白になった。

記憶に在るよりも随分と高い身長。黒服。何よりも特徴的な髪型と…、普段は片時も離さなかったその、ボルサリーノ。

次の曲を始めようと鍵盤の上に置かれていた手は、気付けばそこから離れ走る為に振るだけのものと化していた。

『リボンさんっ!!』

『!?!』

業界最高峰ヒットマンの名を、躊躇いもなく叫び呼んだ子供は、後にも先にも彼だけだっただろう。

そもそも、パーティに参加していたからといってその人が、たかが子供に気取られるような様子でいるわけがないのだ。

その人に気づけたのは、ひとえに彼が前世で努力した結果の賜物だった。

「みんな、話は大体終わった？」

ノックと共に戻って来た十代目である男は、開口一番にそう言った。

「…大体終わったわ、ツナ」

「そっか。実はこの後、とあるファミリーの代表と公然の秘密の極秘会合を予定してるんだけど…」

「……極秘なのかそうじゃないのかどっちなの？」

「建前上は極秘。でも何か情報が漏れてるんだよねー。たぶんアルコバレーノの誰かが漏らしたんだと思うんだけど…」

アイツらしつこいたら。

「どこのファミリーなんですか？」

“アイツら”の示す相手がどちらなのか少し気になりはしたが、取り敢えず一番最初に疑問に思ったことを彼は問うてみることにした。

「エストラーネオ。」

何年か前、妙な人体実験をやっているとかいふ噂で…と続けられている言葉は、誰一人として耳に入っていない様子だった。

「…エストラーネオ、ですか…？」

「え？うん。だからそう言ったじゃん」

不思議そうな顔をする男に、一様に瞠目したまま、何と反応すべきか迷っている面々。

「？？ みんな、どうしたの？？」

「…ツナ、エストラーネオファミリーとは敵対してたんじゃ…」

「ああ、風とこっち来た頃はまだ、ね。それよりもずっと前、風なしでこっちに来させられたときに、噂の実態を確かめて来いって、チェデフのメンバーと放りだされたんだよね…」

で、あまりにも酷い状態だったからついキレちゃってさー、めっちゃくちやにしちゃったんだよねー

あまりにもあつさりと言うので一瞬流しかけたが、よくよく考えれば凄い言葉である。

「そこから、比較的ボンゴレと持ちつ持たれつやってたエストラーネオの同盟ファミリーが吸収して何とか盛り返したらしくて、一応傘下みたいな扱いになってたんだけど。一年くらい前からかな、まあ同盟組んでもいいかなってぐらいの評判になってるんだよね」

で、今日はその相談、みたいな感じかな。

「…まだ傘下じゃなかったんですか」

「一応ねー。まあ名前だけ、って感じ。結構前から打診はあった

んだけどさ、なーんかアルコバレーノの驚いたことに過半数が駄目だって言ってくるもんだから、中々許可できなくて」

「アルコバレーノの、過半数…？」

「うん。リボーンにマーモン、コロネロ、ラル、スカル、あとユニ。風とヴェルデは一応話はされたけど駄目とは言われなかったな…：推奨もされなかったけど」

それって駄目って言われているようなもんじゃ…と全員の口からそれぞれの言葉で出てきた感想は、男のにつこり笑顔で黙殺された。

「…ってかさ、ツナ、そんだけのアルコバレーノとどうやって知り合ったんだよ？」

そもそもの話、マーモンとラル・ミルチを除けば、残るアルコバレーノ全員は一応ボンゴレと関わりは無い。リボーンはボンゴレに雇われている身であって、属しているわけではないのだから。属している二人とて、身を置いている組織はボンゴレ本部とは少し隔絶している。

「んー？ リボーンは元家庭教師だし、マーモンはヴァリアーとの会合で、コロネロは…リボーン繋がり？ラルはチェデフと行動を共にさせられた時で、スカルはそんな時偶然やりあった敵ファミリー。ユニは同盟ファミリーで、風は…何だっけ？」

「…：日本にいた頃」

「ああ、そうだ。リボーンが来る前、学校サボったら不良に絡まれてさ、そんな時ポッコボコにしてくれたんだよ。後で風と二人でお説教されたけど。んで、ヴェルデは…何か知らないけどオレのこと気に入ったらしくて、拉致られて人体実験させられかけた。」

「「「「人体実験！？」」「」」」」

「未遂だよ、未遂。色々あったけど、今は比較的友好関係だから

さ。ちょっと見返り高いけど」

「……ちょっとじゃない」

「…風、何でそんなに怒ってるの…?」

ふい、とそっぽを向く彼女に、男は困ったような顔をする。その光景に、一同が首を傾げる。そして五対の純粋な目が男に向けられ、と男は言葉を詰まらせた。

「……えーと、三日三晩、二人っきりで一緒に過ごす、みたいな…?」

「それが極限何故髑髏が怒るようなことなのだ??」

「…昔、三日間一緒に過ごしたら結婚したことになった」

「「何百年前の話（だよ）…」」」

彼女のそっぽを向いたままの台詞に、生粋の日本育ちの黒髪二人が呆れたように突っ込む。しかしながら、今度は男が目をそらした。

「「「「え??」」」」」

「いや、まあ…うん。この話はこれくらいにしようか。えーと、エストラーネオの話だったよね」

誤魔化した…と一同の内心が重なった。

「日本に行く前ようやくリボンが折れてくれたから、翌朝のうちにさっくりとスカルとコロネロも折って、同じ日のうちにマーモンも絆しておいたし…」

「（（（（（“さっくり”???））））））」

「ラルとユニは個別でちょっとした約束したら、まあオツケーだったから今日、無理矢理予定入れたんだよね」

「…デート？」

「…、黙秘」

（（（（デートか…）））））

今度はじとつとした髑髏の目線に、再び目をそらした男。やはり一同の内心が重なる。

「……だってさあ、ラルは兎も角最近ユニまで不穏なこと言ってるし…。確かにオレは流されるタイプだから、上乘られちゃったらやつちやうけどさあ…たぶん…」

「…ツナ、たぶん今一番貴方が不穏なこと言ってるわ」

「へ？ あ、口に出てた？ うん、みんな、気にしないでね」

（（（（（気になる…））））））

何か知っているらしい髑髏の、少し苛ついているような様子も気になるが、それ以上に若干挙動不審な男の言動の方が気になる面々。

「えっと。まあそういうことだから、この後エストラーネオの代表と会うんだけどね。みんなも行かない？」

「「「「「は？？」」「」「」「」

思わず、といったように六人の言葉が重なる。

「あ、の…オレ達なんかが行っていいんですか？」

「公然の秘密とはいえ極秘の会合だからねー。こっちが格上だし、文句は言わせないって」

にこにこと告げられれば、反論は出ないわけで。寧ろ、欠けている元霧の守護者がいた、あるいはいるはずのファミリーとあって、全員が気になっているので。

「行く」「行きます」「行くぜ」「行くぞ」

揃って立ち上がった。

「さて、ここだよ」

男の案内でやってきた部屋は、城の入り口近くにある接待室だった。

（本当に公然の秘密なんだな…）

彼はそう思いながら、ノックをして、返事を聞かないまま部屋に入ってしまった男の背中をじっと見ていた。

男に続いて六人が部屋に入ると、見覚えのある、がたいの良い長

身の男がいた。

「久しぶりですね、ランチアさん」

「…ああ。元気そうで何よりだ、ドン・ボンゴレ」

「やだな、そんな固くならないで下さいよー。それで、そっちは？」

恐らく、あのにこにこ笑顔で話しているのだろう男の言葉に、ランチアの背後にもう一人いることに彼らは気づく。

「…ウチの筆頭戦力だ」

「へえ。珍しい目だね。名前は？」

“珍しい目”。男に遮られ見えない彼らは、その言葉にハッとした。

「……六道、骸、です」

「骸様っ…！」

その言葉を聞くや否や、男の真後ろにいた彼女が飛び出した。

「っ、風!？」

「骸様、」

「え、風」

そして勢いのまま、抱きつくようにかの男に体当たりをした。

（あ、よろけた…）

以前…前世ならいざ知らず。年齢差故にできた体格差は、性差に

比べてまだ少し大きかったらしい。

「あっ、…ごめんなさい」

「いえ…貴女、なぜ、イタリアに…」

「それは…」

「それに今…、…ドン、ボンゴレは、凧のことを…」

「ん？ オレが何？」

「…あの、いえ」

六道骸の口籠る様子など、滅多に見られるものではない。というか、彼も含めた元守護者男勢は全員啞然としていた。

「…？ 別に今は堅苦しい場じゃないから、大抵のことはお咎めなしだよ？」

何を気にしているのか、と首を傾げている男に、内心で彼は同意しつつも、男の戸惑いもよくわかる、と遠い目になった。

「…何故、凧のことをその名で呼んだのか、と…」

「幼馴染のこと名前で呼ぶのなんて、そうそう珍しくないだろう？
って、まだ幼馴染って言ってなかったか」

「お、幼馴染！？」

このような素っ頓狂な声も珍しい。というか有り得ない。

（……まあ、何も知らなければ驚くよな、普通は）

うんうん、と頷く彼は、自身も体験したことに思いを馳せる。

「…この感じ、骸君も君達と同じなのかな？」

首だけで彼らを振り返って尋ねる男に、はい、や、そうだぜ、など、肯定の返事がそれぞれに返る。

「…」

男の影から微かに見えたオッドアイの少年が、啞然としているのを、彼は何だか腹を抱えて笑いたくなるような気分で見た。

君付けなんてされたことないもんな、という気持ちは、何故か歪んだ優越感を感じさせた。

「取り敢えず、座ろっか？」

そういえば、今まで立ったまま話していたのだった。

促されるまま、示されたソファに座っていく。

「今回は例の同盟の話でしたよね？　どうして、彼を？」

「…ボンゴレが色々やらかしてくれた後、主力がどうしても若い世代しかいなくてな。こいつはその中でも一二を争う、術師だ」

「術師…なるほど」

即戦力の殆どは、人体実験で潰されてましたもんね。

「ああ…。こいつの力あってこそ、何とか盛り返したと言えるな」

「へえ。それで、今回は何故？」

「…まあ隠していてもいずれ知るだろうからはつきりと言うが、同盟を組みたいなら見返りを、という声が無処からか聞こえてきていてな…」

「なあるほど。…後でザンザスに連絡しよう」

ふふ、と笑う男に、ランチアは少し目線をそらし、六道も若干瞠目していた。彼らにしてみれば男の表情は見えない位置にいるので、一体どんな顔をしたのか物凄く気になるところである。

「それで、所謂彼は、貢物、ですか」

「一概には、言えないがな。……中々カリスマもある。こいつがいなくてはやる気をなくす奴らもいる……、それだけ、賭けている言ってもいい」

「それほど？……そこまでの理由が、ありますか」

「しかしなボンゴレ、こいつを至上とする奴らでさえ、貴方のことは多少なりと認めているんだ」

「え？」

それは凄いことなんだ、とランチアは男の不思議そうな声を遮り、続けた。

「自分たちもマフィアの一員であることに自嘲しながら、マフィアを毛嫌いする連中が、だ。……寧ろ、大マフィアに庇護を求めるならボンゴレでないと、内部紛争が起きるだろう」

「……それはそれは、大変ですねー」

その直感でもって、男はランチアの言葉の真偽を誰よりも知っているはず。

腕を組み、やや茶化すような口調ではあったが、男は真摯に受け止めたようであった。そして、ずっとランチアと目線を合わせていたのを、その隣の少年へと移す。

「それで、君はそれでも良いの？」

そんな扱いを受けていて、不満はないのかと、男は問うた。

「…ボンゴレ」

「うん？」

「僕はあの日、貴方の姿を見かけました」

「あ、そーなの？」

「最初は、炎を身に纏った鬼かと思いました。世の中には、六道を巡った身である僕の知らない鬼もいるのだなと、死にかけの身で感心しましたよ」

「…これは褒められてる？ 貶されてる？」

彼らを振り向いて聞くので、彼は思わず、果たしますか、とつい口癖が出る。

「いや、それは困るから今のところ駄目。あ、ごめんね、続きをどうぞ」

「…しかし、次の瞬間に貴方が誰かわかったとき、わけがわからなくなりました」

「？」

その声が、彼には震えているように聞こえた。

「だから、もう、良いのです。…一度得たはずの安息が、そうでなかったらしい今、僕にできるのは再び、その安息を得られる日を待つこと…」

「骸様、それは、」

「クローム。…だから、貴方が許してくださるのなら、どうか、お側に」

名前を呼ぶだけで、彼女の言葉を封じ、六道は淡々と続けた。けれども、彼にはどうしても、その声が震えているように聞こえるの

だった。

「…許すも何も、ねえ。ま、君がそれで良いって言うんなら、いいんだけどね。別に」

じゃあちよつと、チェデフと口煩い幹部に連絡取らなきゃいけないでー。

「取り敢えずこれにサインお願いできます?」

さらりと差し出されたのは、死炎書だった。

「…わかった」

ちらりとその内容を確認したらしいランチアは、すぐにペンを手にとった。

「さて、と…オレちよつと電話するから、みんな静かにね」

そう言っって携帯電話を手取る男に、部屋を出ればいいものを…という眩きがどこからかもれたが、聞こえていないらしく、空で覚えているらしい番号を押してコールしだした。

「あ、ザンザス?」

(え、よりによってそこですか!?)

チェデフと幹部に連絡を…と先に言っていたのに、口頭で上げられた名前に彼らは目に見えて驚いた。

「何かあった? 煩いけど。え? あー…ゴメンネ? えっとね、今夜

空いてる？ は？…もしかしてリボンもいるの？」

（何があったんだ…？）

「いやそれは困る。つかメンドイ。お前だけで来てよ。え？ いやマ
ーモン、お前割り込んでくるとか珍し…っいやザンザス破壊すんな
よちよっ…」

ああもうっ、と男は切った。

「…何かあったんですか？」

「向こうで電話破壊されたッぽい。オレ知いらねーっと。 えーと
メールメール…」

ラルだと怖いからバジル君でいつか…と、電話帳を操作しながら
呟いている。

（ヴァリアーには電話でチェデフや幹部にはメールなんスね…）

何というか、気が抜ける。

「…ボンゴレ、これは…これでいいのか？」

「サインしてから何言ってるんですかランチアさん。」

「いや…こっちとしてはここまでしてもらえると何だか申し訳ない
というか…」

「幹部連中は文句言うかも知れませんがねー。ま、ザンザスに今
夜辺りお願いしとくんで大丈夫でしょう。オレ、幹部って看板を背
負った自意識過剰馬鹿が大っ嫌いなんです」

クソジジイは古狸な分まだマシですねー。

ふふふふふ、と笑っている。

「…そうか」

物凄く何か言いたげだったが、呑みこんだらしいランチアに一同は内心同情した。

「さってと、これでよし。 …後は、んー、どうするかな…」

ちらり、と六道を見遣った男に、彼は口をはさんだ。

「あの、例の仕事に入れてはどうですか？」

「例の？ ああ、隼人もこの間入ったあれね…まあ同じくらいの年代だし、妥当かなあ…」

けど、ランチアさんが絶賛するほどの術師だしなあ…

「…レベル差が出て危険じゃないかなあ」

「…：僕なら大丈夫ですよ？」

「いや勿論、君じゃなくて君に関わる構成員の方がね。 ああ、でも隼人と組めばいいのか」

「「え…」」

それは嫌だ、と言いたげな顔が重なる。

「そんなに嫌？ あーそれなら…、術師ならマーモンもいることだし、一時的にヴァリアーにいてももらった方がいいかもなあ」

ザンザスなら対外的には目付役にもぴったりだし。

「…暗殺部隊ですか」

「まあ暗殺部隊とは名ばかりの諜報部隊になってるけどねえ」

下手すりゃチェデフより優秀だからねー。

「…僕は、君に…ボンゴレに、従いますよ」

「わかってるよ。まあザンザスと話して決めるから、取り敢えずは
ー…仕方ないから隼人同じ配属でね」

あそこが一番、安全だから

「……わかりました」

「まあ確かに、安全、ではありますね…」

遠い目をして言う彼に、曖昧に男も笑いつつ言った。

「隼人は、まあリボンからの推薦もあったし、立派な学歴があったから手荒なことしなかったからねえ。その点恭弥君と了平君は学歴ない分微妙な位置にいるけど」

「「「は???」「」「」」

反応したのは国籍日本組と六道だ。ランチアは基本的様子を見て
いるだけだし、残りは事実を知っている。

「だって二人とも今のところ最終学歴小卒じゃん？ 義務教育だからこっちでサボってもそのうち中卒資格は手に入るけどさ」

「…獄寺は違うのかよ？」

「この年で高卒の資格持ってるよ、ね？」

「…はい」

ええ！？と反応が返る。

「何だってそんな…」

「んなもん、オレみたいなガキがボンゴレに入るには腕っ節だけじゃ無理だったのがよくわかってたからだよ」

ただでさえ、身分云々でオレは雁字搦めだからな

「…あー」

「テメエらもやる気あんなら今からでもやりゃいいだろうーが」

高卒資格くらい軽いだろうよ

「どーかなー…」

「笹川氏と山本氏はきついんじゃないですか、たぶん…」

「…同感」

「何だと、極限プンスカだぞ！ …まあ否定出来んが」

「………高卒、ねえ…」

「…さりと僕のこと無視してません？」

「テメエは幻術があるだろ。 …オレは、理詰めから入るからな」

よく言われていた言葉をポツリと彼は零した。

すると、ポン、と頭の上に誰かの手が乗るのを感じたので、相手を見上げる。

「頑張ったね」

撫でられ、真っ赤になると同時にほっとして、そしてほう、と陶醉する。

周囲から痛い視線を感じるが、彼は気付いていないことにした。だって勿体無い。

「…っと、この番号はラルだな…バジル君、言ったのか…もう…」

んじゃ、オレはランチアさん送りがてら連絡してくるから、風、みんなを執務室に連れてってくれる？

「ちょっと、アルコバレーノが暴れてるみたいでさ。收拾つけてこなきゃいけないから」

「…わかった」

携帯電話を取り出しつつの言葉に、頷いた彼女に促され、彼らは部屋を出た。

先に行っててね、と手を振りつつ部屋を出された。

彼は先導されずとも道を知っているので、一番後ろを進みつつ、部屋を出る直前に見た笑顔を思い出す。

（お変わらないな…）

尤も、変わらないというよりは、全く同じだ、と戸惑うところなのだろうが…、彼がリボンと接触し、必死こいてボンゴレに所属できるようになってから、何度も繰り返しきたので、いい加減戸惑いも慣れとともに薄れていくものだ。

（…けれど、あのように笑っていてくださるなら　――　）

どれほど、気が安らぐことか。

前世の記憶。彼が最後に見たあの方の笑顔は、様々なオモイを隠した、複雑なモノだった。…どれほど満面の笑みを見たかだったと、後悔したことか。

彼の最期、その発端。それは、重傷を負って絶対安静を言い渡されていたあの方の恋人である、雨の守護者。その男とともに日本へ渡れという指示だった。

命令でなくお願いという言葉とともに告げられたその言葉の真意は、説明されずとも交わされた視線のみで彼には伝わった。

…そして伝えるつもりなど毛頭なかったのだろうあの方は、気付いてしまった彼をわかったのだろう、曖昧な笑みで頼むよ、と言った。

譲れぬもの。愛するもの。大切なもの。様々な“もの”に対するオモイ。

『ボンゴレ十代目の右腕』。そうなるために、そうであるために、彼が積み上げてきた経験。それが告げる、あの方の心。

ああ、と。言葉に出すことは無く胸の内で呟き、一瞬瞳を閉じた。過る自身の様々なオモイに蓋をして、彼は頭を下げた。

そして、御心のままに、そう、答えたのだった。

(…そして十代目は…)

イタリアで、独り。他の守護者をも寄せ付けず、闘って。彼は、あの方のもとへと行こうとする雨の守護者を、必死で押しとどめて。

『獄寺、お前はツナのそばにいらなくて平気なのかよ?!?!?』

平気なわけあるか。行きてえに決まってるだろ…!!

『オレが、アイツのそばにいらなくてどーすんだ、行かせろ、行かせてくれよ…っ!!』

オレだって、そうしたいんだ。行かせてやりたいんだよ…っ!!

心はいつだって、悲鳴を上げていた。

でも、わかってしまったから。知っていたから。気付いていたから。

例え離れていても、この恋人達は心が繋がっている。片方が崩れれば、もう片方も崩れる。…逆にいえば、片方が無事なら、もう片方も決して有事ではないのだ。

だから本来は、彼はあの方の元に残りあの方を守っていたかった。何よりそれが望みで、そうであるべきだと思っていた。けれども。

『獄寺君、もしもの時は、オレじゃなくて山本を守ってね』

『…は…?』

『獄寺君はオレの右腕だもん。オレの言いたいこと、わかるでしょ?』

にっこりと、邪気のない、彼の一番好きな笑顔で言われた言葉。だからこそ胸に棘として刺さったように残って、離れてくれなか

った言葉。

十代目、十代目、じゅうだいめ。 そんな御言葉、聞きたくありません。でも、オレは、オレがオレとして在る為には、聞かないわけにはいかないんですね？ それはただの言葉の様で、お願いの様で、結果的に――― 命令なのですね…？

ずっと悲鳴のように心の中で叫び続けて。自身の心すら分解し始めているような気分に駆られてきた頃。 ……必死で、守り続けてきた相手を、死なせてしまった。

慟哭。悲嘆。後悔。懊悩。責苦。

残りは激情のまま、自身の役割のまま、怒濤の嵐と成り果てて、散った。

『オレを、ボンゴレ十代目に会わせてくださいっ!!』

『ナニモンだ、テメエ』

『このパーティの主催者の息子で、獄寺隼人と言います!』

『ああ…例の愛人の子か。…十代目、か。何故まだ表だって公表
されていない存在に会いたいなどと言う? しかもこの俺に』

『え…』

『十代目に確認したが、覚えはないそうだ』

『そんな…つつっ!?!? …直接会わせて頂くわけには…っ』

『前にも言ったが、テメエの身分じゃおいそれと会わせるわけには
いかねえな』

『…それならっ!! 決して二心は無いと、そして会わせるだけの
価値があると証明すればいいですか!?!?』

『大した執念だな…』

『筋金入りですから』

『はっ、口は達者だな。 しゃーねえ、十代目本人から言われてる
からな、明日、会わせてやる』

『本当ですか…!?!?』

『君が獄寺隼人君? 初めまして、沢田綱吉です』

『獄寺、隼人、です…つつっ!!』

そこから先は様々な感情に駆られて、言葉にならなかった。

ただ、向けられた、笑顔に。前世、散る直前にもう一度見たか
ったと思った、その、笑顔に…心が、身体が、震えた――その
ことだけはしっかり、覚えている。

霧の場合

見るな。見るな。見るな。 そんな目で ——— 見ないで、
下さい。

いつ頃からか、その瞳から『憎悪』しか感じられなくなっていた。
同じ空間にいるだけ、あるいは他の人間と一緒にいる時は一切感
じない。

：ただ、二人だけの時に。目が合えば。

——— お前が憎い、と。言葉にされていないのに、その瞳は
如実に語っているようで。

身体の震えを抑えることが、どれほど難しかったことか。 …だ
けれど、耐えた。 彼の人の思うことも、仕方ないことだと思った
から。

彼が彼の人に関わったことが、結果的に彼の人をマフィアに深く
関わらせることとなったのだから。

『何、お前何しに来たの』

『用がなければ来てはいけませんか』

『っっーか用がないのにお前がオレのどこ来ると不気味だろ… 獄
寺君辺りに何か企んでんじゃないかって言われなかった?』

『彼ならいませんでしたよ?』

不用心ですねえ。

『は？　いない？　…ああ、さっきヒバリさんがどうか言ってた
つけ…だからかな』

『…なるほど。　ボンゴレ、これを』

『んんー？　何これ…うええ、これって…マジかよ…』
『マジですねえ』

ああ、仕事が増えたあ…とぐちぐち言っている彼の人に、まだ目が合っていないことにほっとしつつ、彼は今のうちに背を向けて去ろうとした。

『あ、骸』

『ッ』

呼ばれて呑みかけた息を、ゆっくりと気付かれぬよう吐いて。何ですか、と言いながら、仕方なく振り返れば。

ああ。

合ってしまった目線。その瞳に宿る感情。

『頼みが、あるんだけど』

気付けば、その内容を吟味する前に頷いていたのだった。

ガタン

重々しい音とともに閉まった扉の気配に、彼はハッとした。

そこにいるのは、彼も含めた元守護者達。

場所は彼の人の執務室と言っていた。確かに、多少違いはあるが記憶にあるものと同じ部屋だ。

「あの、骸様…」

「…クローム…いえ、凧と言えば良いですか？」

「あ…どちら、でも…」

ツナは凧って呼ぶけど、他の人にはクローム髑髏って名乗ってるから…

「…こっちに来た頃、ツナには不思議な顔されたけど、大切な繋がりだったから…」

みんなと…骸様と

「…凧」

「で、テメエはずっと何やってやがったんだよ？」

「……相変わらずせっかちですね、獄寺隼人」

「極限少しくらいひたらせてやったらいいだろ！」

「……………君の口からそんな言葉が出てくるなんて…ね」

「ヒバリ、何気に凄い言い種なのなー」

視界の端で、みんな変わんないんだもね…と呟いている元雷の守護者に気付いたが、彼はふう、と息を吐いてから言った。

「ランチアも言っていたでしょう。…あのままではエストラーネオは他のファミリーに吸収された上、更に酷い状況に置かれかねなかったのですよ」

粗方はボンゴレが始末してくれましたが、吸収しようとしていたファミリーというのはそもそも、裏でエストラーネオに出資していたましてね。

「あの馬鹿げた研究が、続けられかねなかった。…生き残ってしまった僕らで、何とかするしかなかった」

そう…どれほど不愉快であろうと、マフィアを名乗り、自分達で立ち上がるしか。

「ランチアはボンゴレが連れてきた人材だったので、都合良く利用させてもらいました。おかげで何とか、周りに振り回されないだけのファミリーとなりましたよ」

しかし、今のままではいられない。

「所詮、烏合の衆です。そのうち切り崩されかねない…それなら

ば、その前に何もかもをどこかへ譲り渡した方が良いでしょう、と」

そう結論が出たが故の、今回の同盟の話です。

「：つまり、自分達で何とかやっつけていけるなら、テメエらはボンゴレと関わる気は無かったのか？」

「ええまあ」

肩を竦めながらの彼の台詞に、元嵐の守護者は目に見えて顔を顰めた。

「おま「なあ、取り敢えず座んねー？」割り込むんじゃねえこの野球馬鹿ッ！！」

お、その台詞懐かしいのなーと言いつつからからと笑う元雨の守護者に、盛大な溜息とともに元嵐の守護者は力を抜いた。：抜かれてしまったとも言おう。

「あ、じゃあオレお茶淹れてきますね」

いそいそ、とその場の空気から逃れるように元雷の守護者が隣室の備え付けのキッチンへと向かって出ていった。

「……」

促され、元雲の守護者以外が執務室の中央に設置された来客用のソファに思い思いに座る。群れるのが嫌いな彼といえど、少し離れた場所で壁にもたれかかっている。やがて、前世で何度も淹れたせいもあるのだろう、全員の好みのままに淹れ分けられたお茶が運ばれてきた。

「…風は、ボンゴレの幼馴染でしたか。では、君達は？」

「オレらは獄寺とランボ以外日本で生まれてこっちに来てんだ」

あつさりと答える元雨の守護者に、ふむ、と彼は相槌ともそうでないともとれる反応を見せる。

そして比較的穏やかに、互いの知る情報がある程度交換された。

「………実は、みんなに、言ってなかったことがあるの」

やがて沈黙が落ち、全員のカップの中身が半分以下になった頃。突然元霧の片割れである彼女が意を決したように言った。

「…なに？」

驚いたように皆が口を噤む中、元雲の守護者が声を上げた。

「ツナ…、ボスからの、伝言」

言い換えた、その言葉の意味。確認するまでもなく、その場の全員が瞠目する。

「何だよ…それ、十代目からの伝言って…っ！」

「…その前に、確認することがあるの」

呼ばれ、彼は彼女に向き直った。

「骸様…貴方の最期は、ボスの手で——、でしたか…？」

窺うような目線。問いの意図がわからず、ただそれが事実であっ

たから、彼は無言でうなずいた。すると、彼女はふ、と目線を落としてから、語りだした。

彼女と、その幼馴染が初めて出会ったのは、初等教育すら始まっていな幼い頃。

世間の目を気にして連れてこられた病院で、彼女は彼の人と出会った――否、再会したのだった。

私営の病院ではあるが、それなりの規模で、腕も確かと有名だった。その庭。唯一花をつける大木の、その木陰。小さな車椅子に近づいたのが、その瞬間。

「クローム…？」

こちらの姿など、見えていない筈なのに。彼の人、ただ声をかけてきた。

「ボ、ス…?」

彼女は驚いた。物心ついたときからある記憶。その最期に現れる、自身の手で血に染めた人との、その再会に。

「ああ、やっぱり…最初に会うなら、何となく、クロームの気がしたんだ」

ねえ、オレの前まで来てくれる? ちょっと怠くてさ、今自分では椅子動かせないんだ。

驚くほど穏やかな声の促すまま、彼女は彼の人の前に立った。

「久しぶり、と言えはいいのかな…」

「ボスも…覚えて、るの…?」

「まあね…尤も、覚えてるのはそれだけじゃないんだけど…」

熱に浮かされているような顔。酷くつらそうなその顔に、彼女は心配そうな顔をした。

「…大丈夫?」

「あんまり。…でも仕方ないこと、なんだと思うよ。でも原因はオレじゃないから、それだけは恨むけどね…」

「…?」

「ああ、ごめん、意味、わからないよね…。実はオレもよくわかってないんだけど…」

甚だ億劫そうに動かされた彼の人の手が、その額に当てられた。

「オレには、ね…生まれてこの方、数年しか経っていない“オレ”自身以外に、六人分の“オレ”の、記憶があるんだ…」

「…え…？」

「一体全体どうなってんだ、って感じなんだけど…ああもう怠い…また熱上がったかな…？」

殆どぶつぶつ言っていて呟きのような言葉から、混乱しつつも彼女はほぼ鸚鵡返しに返した。

「じゃ、あ…わたしが、ボスを…その、」

「うん、覚えてるよ…」

くたりとしていたもう片方の手が、その胸元を握った親指で指す。

「三叉槍が、ここに刺さった、あの瞬間…オレは、すごくほっとしたんだ」

言っていることは、とんでもないのに。…彼の人は、穏やかに、恐ろしいほど穏やかに——、微笑んでいた。

「ボ、ス…あの、あの…っ」

何を言ったらいいのかわからなくて、感情が高ぶる。涙が滲み、彼女は彼の人に抱きついた。そして気付き、彼の人の言葉を思い出す。——物凄く、熱い。

「気にしなくて、いいよ…クローム。だって、それはオレが望んだこと、だろう…？」

「で、も…っ」

ふっと笑った彼の人は、ゆったりと彼女の涙を拭う。その手の熱さにも、震える。

「オレは、今、ここにいる…。ね、そんなに後悔しているのなら、今度は“オレ”を、助けて？」

その小さな背を、小さな車椅子に預け、両手以外を殆ど動かそうとしなかった彼の人は、物憂げに小首を傾げつつ言った。

「……っ 何を、すれば、いいの…？」

「“オレ”、はね…：また、マフィアのボスにさせられる…嫌だけど、嫌で嫌で仕方ないけど、“オレ”は、それを受け入れる…」

その頃にはね、今持っている記憶、“オレ”は無くしているから「そうしたら、もう一度会えるだろうみんなのこと、何も気づけないんだ…」

六人分の記憶、ってことはね、守護者の数分なんだと思う…

「クロームと、骸は、二人で霧の守護者、だから…」

だから、守護者全員が、互いに違う、オレ、の記憶を持って、“オレ”と会うんだ…

「きっと、きつとね。みんなにとって、それは喜びで光明で、そして絶望、なんだ…」

「…わかるわ、ボス」

だって、彼女も思ったから。また、会えた。そして会ってし

まったと。喜んで、そばにいたいと願うと同時に、悔やみ怖くなつてしまったから。

「うん…だから、ね…みんなに、伝えて欲しいんだ…」

オレに、縛られないで　――――

「みんなが、オレをおもって、この世界に集った…それだけで、目的は達成されてるんだから…」

「どういう、こと…？」

「さあ… オレにわかるのは、それだけ。　…本当はちゃんと事実を知る人間が、いるんだろうけど…」

その人物に会う頃には、やっぱりオレ、忘れてるんだろうな…

「…ボス」

「……クローム…頼むよ。オレに縛られないで、とか言っついて…この先の、新しい君の人生を、“オレ”に縛り付けることになるけど…“オレ”の、そばにいて…そして、みんなに、伝えて…？」

君にしか、頼めないんだ…

熱に浮かされているような、ではない。本当に浮かされているのだ。少々息が荒くなるほど、高い熱に悩まされているらしい彼人は、やや涙を滲ませて彼女に懇願した。

「…わかった。ボス」

ずっと、そばにいるわ。　そして、ボスの願いを、叶える。

「…ずっと、なんて…。みんなに伝え終えたら、好きなように、生きていいよ…？」

さっきも言った…矛盾してるけど、オレに縛られて…、“オレ”にまで縛られないでも、いいんだよ…？

「そばに、一緒に、いたい…。…ダメ？」

「…クロームの、好きに、すればいいよ…」

それが君の、望みなら…――

「うん」

「そんな、ことが…」

淡々と、無表情の彼女の口から綴られていく過去の話に、彼らは

始終瞠目し通しだった。

「六人分の、記憶…」

つまり、ツナは昔は、オレらのことも覚えてたってことか？

「…たぶん。もう、確かめる方法は無いか？」

「十年バズーカは？」

「……この世界に、十年バズーカは無いんです」

沈んだ面持ちで元雷の守護者が言った言葉に、はあ？と反応する一部の面々。

「何でだよ」

「わかりません。まあ正しくは無いというか…、オレが生まれた頃、突然使えなくなったそうです」

十年バズーカがあれば、改造させて過去と入れ替えさせる…ということも不可能じゃないと思った面々であったが、その言葉に諦めざるをえなかった。

「……『オレに縛られないで』、か」

随分と勝手なこと言ってくれるよね。

「今現在、そばに置いてるのは誰だと思ってるのかな、彼は」

「だが、帰りたいけばいつでも日本に帰ってもいいとも言われただろう？　そういうことなのではないか？」

「オレなんか、今回結局小旅行扱いなのな…：ぜってえ日本に返される」

「オレは…どう足掻いてもマフィアに関わらないで生きるのは不可能だから…」

「そういう意味では僕も同じですね」

「…オレっちも…」

クローム髑髏を除いた残りの元守護者の半数は、不愉快だ、と言いたげに顔を顰めた。

「そばにいたいと言えば、置いてくれるわ、ツナは。わたしは、そばにいたいって言ったから、ずっと一緒にいたの。ボスは、幼稚園に上がる前にはボスだったことを忘れちゃってた…」

わたしは…、いつか、伝言を伝えても、ずっとそばにいるって決めたから。…だから、修行に対する努力だって惜しまなかった。

「だったら、言えがいいんですね」

ボンゴレに、ツナに、綱吉に。ずっと、そばにいたいと。

「…うん。だけど、そう簡単には許してくれないと思う」

「…何でだ？」

「シモンの人のことがあったから…ツナ、よほど堪えてるみたいで…」

昔に比べて、もっとずっと、頑なになったから。虹の子も、言ってたの。

「“最近、ツナが何を考えてるのかわからない”——って」
だけど、思うの。

「こうして、守護者が全員揃ったんだもの。　…そろそろ、『事実を知る人物』が現れてもいいんじゃないか、って…」

それに、ツナ、言ってたでしょう？

「“トゥリニセツテが関係している気がする”、って。もしそうなら…」

「…まさか、白蘭が？」

「ミルフィオーレの名前は聞かないが…」

「ああでも、ジェッソらしきファミリーの噂なら耳にしたことがありますよ？」

「何で調べておかないかな南国果実」

「人を果実扱いしないください鳥。　こっちはこっちで色々忙しいんです。」

彼は溜め息をついた。　そしてすぐに調べねば、と決意する。

「…ツナはずっと、何かを、誰かを待ってるみたいだった。　わたしはそれを、みんなが揃うことだと思ってたんだけど…」

「何か別のことだと？」

「…わからない。　だけど、みんなのことは信頼、してるみたい…」

今まで、会って間もない人が多い中、あそこまで素で喋ってること、なかったから…

「信頼…」

「今はその言葉を信じて、十代目に気持ちをぶつけてみるしかない、か…」

そこへノックの音が聞こえ、皆が反応する前に部屋の主が入ってきた。

「ん、何か話してた？」

「もう終わったわ」

「そ。えーと、取り敢えずこれからのことを確認しようと思うんだけど。」

まず、武。これからどうする？

「オレは、ずっと、ツナのそばにいたい。」

「……オレのそばにいたって、何も楽しくないと思うんだけど……」

オレは君達のこと、覚えてないんだし。思い出さないだろうし。

「それでも、いいんだ……ッ　これから先ずっと、そばにいてえんだよ……！！」

元雨の守護者の悲痛な響きを帯びた叫びに、彼の人は困ったように顔を歪めた。

「……ねえ」

「何……？、恭弥君」

「ボンゴリングに炎を燈し、またその真の姿を取り戻させることができるのは、“強い『覚悟』を示せる者”、だったよね？」

突然の割り込みに、彼の人は少し驚いたように反応した。

「……そうだけど……」

「僕達が、『君のそばにいる』っていう強い覚悟を示せば、君は僕

達をそばに置いてくれる？」

数秒、瞬いてから彼の人はその言葉の意味がわかったようで、ハッとした。

「そりゃあ、置かざるを得なくなるな」

彼の人の背後から聞こえた横槍に、全員が驚いて声のした方を見る。

「…リボーン」

「不用心だゾ、ツナ」

「いいだろ別に…今月末まで、ここに許可なく近づけるのはお前らアルコバレーノぐらいだよ」

ふん、と鼻を鳴らしつつ彼の人に近づいていく黒服の男は、…そう、男。赤ん坊ではないのだ。

それを知らなかったごく少数は、驚きに瞠目している。

「置かざるを得ない、って…？」

「今リングを持ってる奴らは、幹部どもがウルセーから仕方なく適当に選んで渡してるに過ぎねェ。だろ、ツナ？」

「…っつーか、そうしたのお前じゃん」

「黙って答えやがれバカツナ。」

「あーはいはい、そうですよー。 ついでに、知ってる子は知ってると思うけど、原型のリングを持ってるのはオレだけだよ」

ひらり、と翳された片手の甲には、見覚えのあるリングが。

「ヒバリの言ったこと、ここにいる全員はわかってんのか？」

「わかってんじゃない？ …びっくりするぐらい顔付き変わってるし。」

そう、つまりは強い覚悟でボンゴレリングに炎を燈し、またその真の姿：原型リングに戻すことができれば、彼らが将来、彼の人のそばにすることができる…否、いなければならないということは、確実、ということ。

「じゃあ早くリングを…」

「ストーップ！ 一応アイツらはリボーンが選んだ精鋭だから、それなりに強いし。君達なら勝っちゃいそうだけど、それだと結構危ういバランスを保ってる今、バランスが崩れちゃいそうだからさ」

せめて、君達が成人してからにしてくれない？

「危ういバランス？」

「同じ穏健派なのに九代目とオレの折り合いが悪いこと、で、幹部連中の大半をオレが毛嫌いしてること、んでもって対立するはずのザンガスとオレがやたら仲良いこと、まあ主にこんな理由から、傍目にはわかりづらいんだけど内部分裂してたりするんだよね」

その上で、守護者なんて幹部中の幹部に、例え実力が伴うとはいえ…、結果的にオレの一存で成人もしてない子達を据えたら、何言われるか…っつーか何しようとするか…

「さっきはヴァリアーを使うとか言ってますでしたっけ？」

「エストラーネオの件はね、長い目で見れば悪い話じゃないし。毛嫌いしてるとは言っても、一応ちゃんと認めてる相手もいるんだよ、幹部に。そういう人間の中には、この件に賛成してくれてる人もい

るから」

でも、こればかりは、ねー…？

「そーだな。一番確実なのは、その実力をツナが見抜いたってことで引き抜き、修行させといて、成人した頃ツナに心酔しだしていったコイツらが守護者になりたいとか言い出したって流れか」

もう殆ど心酔してる奴らばっかみてーだが

「…何気に妥協案出してんじゃねーよ」

「文句あつか」

「…別に」

諦めている。

「それでみんな…ああうん、すごーい乗り気だねー…」

疲れた顔をしている彼の人。確かに、特に元雨や元嵐なんかは目をキラキラさせている。元雲に至ってはギラギラさせている。

「…取り敢えず、さー。恭弥君と了平君と武は日本に戻って、せめて中学ぐらいは卒業してきた方が…」

「…：しゃーねえから、オレはそうする」

「極限、俺もそうしよう」

京子をずっと放置しっぱなしだからな…

「…僕は、イヤだ」

「恭弥君？」

「こっちにいる。　…君のそばにいたいんだ。何でもするから、だから…」

あの元最強の守護者、雲雀恭弥が。　薄ら涙まで滲ませ、懇願する姿に、前世を知る全員が驚く。というか　ドン　引く。

「う、あ、えー…」

段々近づいてきて、更には抱きついてまでお願い、という元雲の守護者に、彼の人は本当に困った顔をしている。口にしていなくてもどうしよう…と考えているのがよくわかるほどだ。

(…というか、ちょっと近づきすぎではないですかね…?)

「「「つてか近すぎだ(ろ)!!」「」」」

元雨、元嵐、元晴とともに叫んだ元家庭教師が、元雲を引っぺがした。　ちなみに残るメンバーも非難の目で見ていたりする。

「…放せ」

「何だ、やる気か」

「ちょ二人とも待ってここでやらないで!?!　ここオレの仕事部屋なんですけど!?!」

破壊されたら困るから!!　今月末まで業者も入れらんないし!!

「「…(チツ)」」

(…)(…)(舌打ち…)(…)(…)

勘弁してくれ…と呟いている彼の人に、話が流れてますが良いんですか、と彼は言った。

「あ、そーだった。」

「…ってかヒバリ。日本での事業はいいのか」

「……事業？」

「お前、やってただろーが、財団」

「…ああ…」

その言葉に、はた、と元雲の守護者は何かを思いついたのか、少し考える様子を見せ、にやり、と笑った。 …それはそう、獲物を見つけた肉食獣の笑み。

「…恭弥、君…？」

「…わかった。日本に戻る。 ねえ、じゃあ、成人したらこっちに来てもいいんだよね…？」

「え？ あ、うん…」

拍子抜けした様子の彼の人だが、それ以外は何を思いついたんだ…と物凄く疑いの目だ。 …というか。

（さっきのアレ、まさか演技ですか…）

いつの間にそんな高度な技を、雲雀恭弥。

「…えーと、それじゃあ武の帰りに合わせて、二人の分のチケットも用意するね？」

「おう」「うん」

「で、えーとイタリア組は…っと。 ランボ、ボヴィーノは今、忙しい？」

「え？ あ、いえ…。 世代交代の関係で人間関係がごっちゃになってまして、色々話し合いをしているところですが…別に忙しいかといえ

ば、そうでもないです」

…よね、髑髏嬢…？

「…うん。」

「じゃあ、正式に話を通すから、凧と一緒にこっちで隼人と骸君と、ある仕事について欲しいんだ」

ある仕事？、と名を出された面々が真剣な顔をする中、そこまで身構えなくてもいいよ、と彼の人は笑った。

「ちよっとした、潜入ってとこかな。本当は君達みたいな子供に任せる仕事じゃないんだけど…」

オレ、信用できる相手が少なくなってさ。他に適任者がいるとは思えないし…

「幻術が使える人間が二人もいれば、确实だと思うからさ」

「…で、潜入先は、どこなんですか？」

「……リボーン、お前は大空のアルコバレーノから何か聞いている？」

「…いや。ユニがどうかしたのか？」

ユニ。その名前と、彼の人に来るまでに話していたことを思い出し、彼らはもしかや、と思う。

「最近、ジツリョネロにちよっかいをかけてる新興ファミリーがあるんだよね。名前は、ジェッソ。」

「ジェッソ…」 「…」 「…」 「…！！！！」 「…」 「…」 「…」

関係はないが、何となしに聞いていた日本帰還組も含めた元守護

者達が、その名前に激しく反応した。

それは、多くの前世で、ボンゴレを、ひいてはツナを、綱吉を、苦しめた存在の、名。

「…？ 何か、知ってるの？」

「あ、その、」

元嵐の守護者のその目が、何と云えばいい？と語っていた。別に誰かに助けを求めているわけでもなからうが、どうしようかと思っているのは事実だろう。

「…オレらの、記憶ン中にその名前があるのは確かだぜ。」

「しかし、逆に言えばそれだけ、の話でもあります」

元雨の守護者の、フォローともつかぬ言葉に、彼はやれやれと後を引き継いだ。

「そう…。で、まあ…ジッリョネロに向かってもらって、護衛ついでに何か探れないかなと思ってさ」

「危険なところなのか？」

「危険、ってわけではないんだけど…、何というか、ただ、気になるんだよね…大半が勘だからこれ以上何とも言えないんだけど…」

「超直観か…」

いっそ、オレが相対したら早いんだろうけどさあ…

「それはまあ、タイミングが悪いし…？」

「…だな。」

「っていうか危険を感じないからって相対するとか言わないで下さ

いよ…」

しかもジェッソ相手に…

「…何、君達の知るジェッソファミリーって危険なところなの？」

「危険どころか、後にボンゴレの最強の敵にまで上り詰めたんですよ…」

「え」

何ソレ。

「最強の敵？ 僕のところではそれはシモンファミリーでしたが？」

「ええシモンが！？」

「成程、同じに見えて何かしら違いがあんのか…」

「いや今、納得するところじゃありませんよね…？」

「ってーか今の話はジッリョネロ潜入、ひいてはジェッソの情報収集の話だろーが。ボケてんのかテメェら」

つきつけられた銃に、いややめてくれ頼むから、と彼の人が真っ先に反応した。

「えーとそういうわけだから！ 隼人、例の仕事はしばらくお休みね。」

「あ、はい」

「じゃあ、後は各自解散…ってわけにもいかないか。ええと…、つてか何でいんのリボン？」

「今更だな…」

呆れた口調の黄のアルコバレーノに、彼の人とはさっきヴァリアーにいたんじゃないかって？と不思議そうに問うた。

「自分で電話壊した奴がキレまくって話し合いどころじゃなくなっただからこっち来たんだぞ」

ダメツナがまた奴に何を頼む気だったのかも気になったしなあ…？

「ふーん。じゃあ暇ってことだね。あのさ、」

「テメエ人の話聞いてやがったのかあ、あ…？？」

「うっさい近い！ もういいよオレが自分でやるから」

「ちよつとマテ、今何か言いかけてただろーが」

「よくよく考えたらお前に頼もうとしたオレが間違ってた。うん。」

「オヤサシイこの元家庭教師様が聞いてやろう。で、何だ？」

「イイってば。お前絶対見返り要求すんじゃない！ んで高くてメ

ンドイか高くてシツコイのどっちなんだもん！オヤサシイならオレの心境を考えて黙ってるよ！」

「頼みを聞いてやるんなら多少の見返りくれえ当然だろ。なあ？」

「お前の見返りは絶対“多少”じゃねえっ！！」

…ってというか、また近づいてますよ。

妙に近い距離でややキワドク聞こえなくもない会話をしている二人に、彼は内心呟く。

「…ツナ。それで、どうしたいの？」

「だからなあっ…って、えっと、まず武を“宿”に連れてって、それで四人には潜入に対して詳しい話を…」

「ねえ」

ようやく軌道修正をしかけた話に、またもや横槍が。

「その潜入、僕達も行っちゃ駄目？」

「は？ いやだって恭弥君達…」

「うむ、日本に戻る前に極限それらしい仕事をしてもらおう！」

戦闘要員扱いの割に殆ど書類ばっか相手にしておったしな！

「へ？ いや確かにそっちばっか回ってたみたいだけど…」

「オレらも気になるんだよ、ジェッソとかジツリヨネロとかさ」

だから、すぐに抜けて日本に行くからさ。駄目か？

「…まあ…そこまで言うんなら…、えっと、術師の二人は大丈夫？
こっだけカバーできる？」

「…お安い御用ですよ」 「うん」

「なら、この際ここで潜入の話、しちゃおうか。 …んー、チェデ
フと連絡取っとくか…あ、リボーン、今休暇中だっけ？」

「…ああ」

「んじゃクソジジイさくつと捕まえて脅して半殺しにしてザンザス
の前に突き出した上でコレ頼まれてくれない？」

「ジツリヨネロとの交渉か…」

「オレが悪いわけじゃないのに…さんってばオレのこと目の敵にし
てくれちゃってるんだよねーほんとー。で、報酬はこれで。向こ
う一年限定品」

放り投げられたのは…銀色の、鍵？

「…ああわかった」

（…というか、幾ら仲が陰悪と聞いているとはいえ、九代目に対す
る仕打ちに誰も突っ込まないとは…）

突っ込めない、とも言う。

「えっと、それじゃあね…」

カチャン…

小さく響いた音に、彼は正面に座る彼女を見た。

「…風」

「はい」

二人は、話したいと申し出て、今、別の部屋でお茶を用意したところだった。

「僕があちらで死んだ後…何が、あったのですか」

彼らの…、元守護者達の、最も大きな共通点は、『沢田綱吉を“ヒトリ”にして死んでしまったこと』。

けれども、彼にそんな自覚は無かった。先程は、取り敢えず流していたのだが。

「骸様。…骸様は、ずっと、ボスのこと…どう思っていましたか…？」

「どう、とも。…何も感情など抱いていませんよ。」

そう、愛の反対は、無関心だと言うように。

「そうですか…？　ずっと、胸を痛めてらっしゃったじゃないですか」

「…僕が、胸を痛める？」

何を言っているのかと、彼は眉を顰めた。

「ボスからの視線を受け止めるたび、感じる痛みにご自分を誤魔化していた。…わたしは、知っています、だって、わたしは、」

「風、貴女は何を言っているのです…？」

不思議そうな、声。しかしよく聞けばわかる。…その声は、震えていた。

「骸様、わかって、ください。気付いて…ください。遅くなんてない、今だからこそ、その想いを言っても誰も何も言いません、だから、」

「だから…なにを、わかれと、気付けと…？」

片や真剣味を帯びた、鋭い視線。片や戸惑いを露わにする、緩慢

な視線。その二つが、交差する。

やがて一瞬目を伏せた彼女は、強い瞳で言った。

「貴方が、ボスを、好きだったことを。愛して、いたことを。」

「…っ　なに、を、」

言っているのか。…それは、音にすらならなかった。

「…最期にも、思ってたんじゃないですか。」

『これで…彼が、^{ボス}僕を^{貴方}忘れることは無い』、って。

「……ッ！」

突きつけられた言葉が、彼の心を抉った。同時に、彼女も痛みを堪えるような顔をする。

「…忘れたわけではないですよね？」

その時…あるいはあの頃は、二人の精神は、『契約』を通じてどこかで繋がっていた。

「………」

彼は、無意識に唇を噛んだ。耳に入ってきた言葉が、頭の中でぐるぐると巡っている。混乱しつつも——、どこかで、肯定している、自分が…いる。

「…骸様…」

「……仮、に」

しばらくして、噛みしめた唇から感覚すらなくなった頃、彼はゆっくりと口を開いた。

「そうだったとして…何だと、言うんですか…」

噛みしめた唇からは、勿論血が滲んでいる。しかし彼にその自覚はなかった。目線をあわしている彼女の方も、痛ましげだと思っ
てはいるものの、それを顔に出すことはしなかった。…彼女の方も、
それどころでなかったのだ。

「わたしは…ボスの命令で、ボスを…、ころしました」

「……、は??」

意味がわからない、とその顔は言っていた。彼女はもう一度繰り返す。

「骸様を、骸様のお願いで殺したボスを、わたしはボスの命令で殺しました」

「……それは、本…」

「本当です」

嘘など、言うはずが無い。わかってはいても、確認せざるを得なかった。

彼女は、彼を命の恩人と仰ぎ、尊敬、敬愛していた。同時に、彼の人に対しても思慕に似た思いを抱いていたはずだった。…その、彼女が?

「ボスが…言ったんです。」

『オレが骸を苦しめてた。ごめんクローム、何もかも終わりにしたいんだ。ここでオレが死ねば、みんな助かる、だから——』

「だから…?」

問いに、彼女は両手の平を上にして、深呼吸をした。 …見覚えのある、三叉槍が現れる。

「……これで、一突きに」

『どうか、一思いに。 ごめん、ごめんクローム…こんなことを頼んで。ごめんね…』

現世で、『契約』は成されていない。けれども、彼には彼女が思いだしている記憶の断片を感じ取ってしまった。

その……悲痛そうな、彼の人の声が、頭のどこかで反響している。

「骸様、ボスは、貴方のことを嫌っていたわけじゃありません」

「…は？」

突然何を言う、と驚いた彼に、立ち上がって彼の前にしゃがみ込み、その両手をがしっと掴んだ。

「再会してから少しして…ボスが、わたしに言ったんです」

感覚が、研ぎ澄まされていく。 先程と同じように、記憶の断片が感じ取れた。

『大量殺人者でかなり強い骸が現れなければ、オレが正式にボス候

補として名が挙がることも、その戦闘力について有名になることも、なかった』

少なくとも、彼ら二人の前世では。

「…ええ」

何度も思ったことだった。考えたことだった。

『だから、憎々しく思ってしまったんだ』

「…そうでしょう」

わかっていた。だから辛かった。苦しかった。…想いを、封じ込めた。

『だけど…だけどねクローム。オレは、アイツを嫌いなわけじゃない』

『「…え？」』

彼のその声は、記憶の中の彼女の声と重なった。

『だって、こんな同情、アイツはいらないって言うに決まってるけど、アイツは真の意味で悪い人間じゃないだろう？』

むしろ、被害者なんだから。

その言葉に、彼は震えた。

『クロームのことを助けてくれた。命を繋いでくれた。 オレのことだって、助けてくれた。力になってくれた。』

……憎む理由なんて、消し去ってしまってお釣りが来るくらい、オレはアイツに感謝しているのに……

『なのに、なのにさ。 アイツを見ると、思ってしまうんだ』

コイツが現れなければ、オレはきつと、こんなところにいなかったんだ…… って……！

『マフィアなんて、人殺しなんてしなくてすんだんだって。友達や仲間や家族を、苦しめたり傷つけたり、そうならないように頭を悩ませたり……必死になったり……っ しなくても、よかったんじゃ、ないか、って……！』

声に、嗚咽が混じっていた。

『被害、妄想だし、S^{if}e、の話だ。 わかって、る。 わかって、るんだけど……！！』

ボス、と彼女の困ったような声が小さく響いた。

『……ごめん。ずっと、クロームには謝ってばっかだ……』

でも、どうしても、言いたかった……言わずにはいられなかった

『君には前世で……辛い選択をさせてしまった。 骸にも、前世で辛い思いをさせてしまった……』

オレは、償わなきゃいけないと、思う…

何かして欲しいことはあるか、という問いに彼女が何と答えたのかは、わからなかった。

「…何と、答えたんですか…?」

「骸様が、望むことを、と。そのために尽力することを、許して欲しい、と」

揺るぎない瞳だった。

「ツナは、ボスを忘れてしまっても、完全にボスがいなくなっただけじゃないんです。最初は凪って呼んだりクロームって呼んだり、違和感を感じてるみたいで首を傾げてた。」

だから、骸様の望むことを、わたしが叶えようと尽力するなら、絶対力を貸してくれます。

「骸様、どうしたいですか?」

「どうしたい…とは?」

「ボスは貴方に、辛い思いをさせた、苦しい思いをさせた償いをしたいと言っていました」

その償いに、貴方は何を望みますか?

「え、…」

「今じゃなくてもいいです。考えておいてください」

『ボンゴレ、僕を殺してください』

『な、にを…ッ』

元雲の守護者が陰で暴れ、何とか持ち直したように見えた状況も、彼が持ってきた情報で崩れかけていることがわかった。

その為に彼の人は彼のみを連れて、敵方へ乗り込んだ。

『ここで今、僕を殺せば…』

時間稼ぎに、なるでしょう？

彼の得意分野は潜入による情報収集と特殊工作だ。 勿論、そこにも潜入したことがあった。

『駄目だ、そんなの。 殿はオレがやる、お前は先に行け…！』

『何を言ってるんですか！』

貴方はボンゴレ十代目なのですよ？！

『だから？』

交わされた視線は、いつもとは違って、ただただ鋭く真剣なだけだった。だけれど、否、だからか。彼はいつもほど怯まなかった。

『だからです』

強く言い返され、彼の人は一瞬気が抜かれたようだった。

『…（チツ）』

彼がひかないことを察したのだろう、彼人は走り出した。けれども、結果的に、それも悪戯に彼の時間を伸ばしただけのようだった。

ああ、そうだ。

彼人は、泣いていた。彼を殺して、涙を流した。灯火を消していく命、薄れる意識の片隅で、その雫が頬に当たるのを感じたのを、彼は思い出した。

そのすぐ後、風が来て：

涙ながらに彼女は彼の人をその命令で殺した。何も出来なくてごめんなさいと、謝りながら。彼の人を犠牲^{イケニエ}にしようとしている、

自分自身、マフィア：ひいては世界そのものを、憎みながら。

そうでした、あの世界は、彼の人を生贄にしようとしていた…、否、結果的には、そう、した。

世界の存亡を、たったヒトりの命が在るか否かで定めようとしていた：否、定めた。そんな、忌々しい前世^{セカイ}。

だから尚のこと、想いを告げることなんて、できるはずもなかった…

彼の方は、ヒトりで逝くつもりだったから。寧ろ、そうでなければ世界の存亡の危機になったから。：けれども。

：我ながら、無意識に、とんでもない思考に陥ったものですね…

彼の人の後で無く、先に、しかも彼の人の手で死ぬのなら、彼の人を結果的にヒトりにしなくてもすむのではないかと。そう、思っ
て。

けれどもその思いは、彼の人を手に掛けた精神の繋がった彼女の
思いに引き摺られ、変容してしまったようだった。

だから：僕は今、ここにいますのでしょ…

何故、と思いはしたけれども。でも、ある意味良かったのかもしれない。やり直せるのだから。

彼の人を、ギセイ／イケニエ にしないですむかもしれない、
そんな時間を ———。

霧の場合（後書き）

霧の、片割れに対する呼び方の使い分けがなってない…（統一したいわけじゃない。）暇を探して直すかもしれませんが、スルーの方
向で：

あと次回からロリコン疑惑の（違）白い人が出てきますが、口調が
何だかオリジっぽいです。

っつーか、次からタグに入れ忘れた「独自解釈によるオリジナル設定」炸裂です。

百花蜜の場合

ただ、もう一度、あの笑顔の傍にいたかったんだ。

「ボス、もうしわけありません、ジツリヨネロの内部で妙な動きが…」

「…フーン？」

がしつと掴んだマシユマロを、もぐもぐと食べながら、差し出された書類を彼は斜め読めした。

「ああ…やっと動いたんだ…」

じゃあ、丁重に迎えないとねー…

「…?」

「あ、正チャン呼んでおいてくれる?」

「…わかりました」

扉を閉める音を背に、彼はもう一度がしっとマシユマロを一掴み口に運んだ。

「ようこそ、僕の城へ」

両腕を大きく広げ、拘束された少年少女達を前に、彼は言い放った。

「白、蘭…ッ!」

「アレ、喋れるんだ? 凄いナァ…」

前世ではその副作用により常人では立つこともできない状況へ至らしめる毒をも振じ伏せてみせた、元雲の守護者がその目をギラギラさせて彼を睨んでいた。

できるだけ傷を作らないよう工夫された拘束の仕方だが、痛みだけはあらず。

(さすがは、ってことカナ…)

そういうのを、選んだんだけどね。

一様にして苛立ち、怒り、そしてほんのわずかな不安とを滲ませて睨んでくるので、彼は少し辟易していた。

「…心配しなくても、キミ達にそれ以上何もしないよ」

縛ってるのだって、暴れられたら困るからだし

「でなけりゃそんな、絶対怪我をしないように工夫するわけないデショ？」

にっこりと言うが、疑いの目は晴れない。 …まあ、仕方が無い。

内心溜め息をつきつつも肩を竦め、一つぽつんと置かれていた椅子を後ろ前にして座り、七人をぼんやりと眺めつつサイドテーブルに積まれたマシュマロへと手を伸ばした。

（あまり、迎えが遅かったら困るな…定期的に炎を浴びせなきゃいけないのは面倒だし…）

七人の拘束具は特殊で、死炎に耐性を持っている。しかし何度も浴び続ければ劣化してしまう。 彼・彼女らが、その言動の殆どを封じられているのは拘束具以前に雨の炎の効果があるのだ。

（…ま、綱吉クンだったらそれはないかな？）

何より、誰よりも、忘れてしまっても、大切に仕方ないはずの、元仲間達だ。

ツ
!
! ビ
!
ツ
!
!
ビ
!
ツ
!
!
ビ
!

赤いランプ。重苦しく耳に痛く響く、警戒音。

彼は緩慢に、サイドテーブルの隅に申し訳程度に置かれていた電話へ手を伸ばした。

「ハイ。どうしたの？」

『白蘭様、例のルートからボンゴレ十代目が……っ！っ！』

「ああ、いいよ通しちゃってー。余計な壁とか囲とかいらなからさ、素直に道あけちゃいなよ」

彼ならそれでまっすぐ僕のところに来るからさ。

『しかし…』

「だあいじょーぶだって。あ、そだ、正チャンそこにいる？」

『…いますよ』

「すぐ隣、戻ってきてね」

後は返事も聞かず、コードを引きちぎり本体を叩き割った。ついでにランプとけたたましい音を上げているスピーカーも破壊する。

「ん、これで静かになったね」

ふ、と微笑んでふとずっと視線が痛い七人の方を見遣った。

「……誰が来るのか、って顔だね？」

ふふ、と彼はどこか作った、しかし満面の笑みを浮かべた。

「キミ達の、ダイジなヒト、だよ」

ずっと変化と言えば眉間の皺を濃くするだとか殺気を増すだとかとにかく危険な方向しか見られなかった七人が、一瞬戸惑いや咄然とした様子を見せたと思ったら、今度は焦燥を感じ始めたようだ。

（…ああ、僕が綱吉クンに何かしようと思ってるのか思ってるのか）

そんなワケ、ないのにナァ。

彼は、ただ、説明をしなくてはいけなかった。彼の犯した、罪について。

「ああ」

来た、という声は音にもならず。

ただ次の瞬間、橙色の炎とそれを纏う影が、彼の目の前を通り抜けた。

「…みんな、大丈夫か」

「綱、吉」 「」「」「」「ツッ!!」「」「」「」

彼のことなど、気付いていないようだ。

「綱吉クン」

「…」

無言で見えてくる瞳は、隠しきれない怒りが溢れている。

「ごめんね、そして来てくれてありがとう」

取り敢えず、一番に言いたかったことを彼は言ってみた。すると眉を顰められる。…まあ、当然か。

思いながら彼は、ゆっくりと両腕を開いた。武器は持っていない、戦意もないと示すように。

「ようこそ、僕の城へ」

紛い物ばかりで組み立てた、砂のお城へ。

心の中で続けた言葉は、読むことは出来ないはずだけれど、とても良すぎる勘を持っているかの男は何かを感じ取ったようだ。

「…みんなを離せ」

「ウン、いいけど。一つ、お願いがあるんだ」

「…何だ？」

「話を、させて欲しい」

キミと僕、二人だけで。

前の前に立つ男の首が、やや傾いた。

「…まさか、その為に？」

「これぐらいしないと、キミと会うことはもうしばらく不可能デシ

ヨ？」

所詮僕らは、新興の弱小ファミリーでしかないからねエ。

にこりと笑って彼が言った言葉は、納得のいくものだったらしい。一つ頷くと、男はわかった、と了承の意を告げた。

「じゃ、交渉成立だね」

ちよつと待ってね、と言ってから男が通って来たルートとは反対の位置にある壁を、三度拳で叩いた。すると、そこが開く。

「…白蘭サン？」

「正チャン、あの子達ちよつとそちに連れてってもらえるかな」

よろしく、と促せば、一つ溜め息をついた彼の大切な人は、こちらの部屋へと入って来た。そして、“あの子達”のそばに立っている男を見て立ち竦んだ。

「あ…」

「？」

「正チャン」

「…君…」

誰だっけ、という小さな、小さな呟きが、漏れていた。…恐らく、自覚は無い。

「正チャン？」

「（ハッ）」

「早くして、ね」

「ああ、うん…」

例の拘束具は、ややぎくしゃくと手を動かしている青年が開発したものだ。一番扱いに慣れているのも、また。だからこそ彼は、本当は奥の部屋に大事に大切にしまっておきたいくらいの相手であるその人を、隣室に控えさせていたのだけけれど。

（…覚えては、いないみたいだけど）

ひっかかりは、するんだ。と思い、彼はどうも面白くない気持ちになった。けれども同時に嬉しくもある。…そしてそんな身勝手な自分に、苦笑する。

（…ほんと、罪深いな）

でも、後悔はしていないのだ。するはずがない。

（また、一緒に、そばに、いてくれる、いられる、んだ、から…）

彼は自身の隣を通り過ぎていく青年を視界に収めないように一瞬目を閉じて、そしてやがて開いて、それじゃ後でね、と笑いかけた。

「え、うん…」

戸惑い気味な様子を見せる青年に、笑みを濃くしながら彼はそこを閉じた。

振り返り、炎を消してこちらを見つめている男に、どうかした？、と問いかける。

「え、うん…みんなの目がね、一様に『そんな奴と二人っきりで話

なんかするな』って言ってたからさ」

これは後で怒られるなーと思って。とやや乾いた笑みを見せる男に、彼も笑う。

「よほど僕は嫌われてるらしいね」

「何か、みんなのもう一人のオレに関する記憶の中じゃ、悪の権化みたいになってるみたいだけど？」

苦笑気味に告げられた言葉に、彼は少し固まって、フーン…と呟きつつ、壁に設置されたパネルを操作する。すると、また別のところが開き、ロボットがソファ二つとテーブルを運んできた。…軽食と飲み物付きで。

「!?!?!」

「凄いデシヨ」

いや凄いのは凄い、んだけど…ええ、あれでバランス取れてるんだうわー

殆ど独り言になっている男の言葉に彼は笑い声をあげながら、準備の終わった話し合いの場にどうぞ、と男を促した。

「どこから話せばいいのかな」

コップをとって一口。

「最初から話せばいいんじゃない？」

珈琲の入っているカップをとって、うわぁいい香り。と呟いてい

る男。

「…何か入ってるとか、心配しないんだね？」

一口啜った男に、彼は言った。

「ん？入ってないじゃん。それに入れないでしょ？」

当たり前のように言われた言葉に、彼は再び笑い声をあげた。

「まず、前提として話しておきたいのは、トゥリニセツテのことなんだ」

無言で頷き先を促される。

「トゥリニセツテであるアルコバレノ、マーレ、ボンゴレのそれぞれに特徴があるのは知ってる？」

「ああ…ユニから何か聞いたことある。アルコバレノが点、マーレが横線、ボンゴレが縦線だっけ？」

「…ウン。まあそうだね」

随分と大雑把な言い方だが、言い換えればその通りだ。

「それを知っているのなら話は早いんだけど…」

まず、事の起こりは、パラレルワールド平行世界の僕が起こした、とある出来事なんだ。

言いながら、彼は片手を男の前にかざした。

「…？それ」

「これが、マーレリング。…力は封印されてるけどね」

「大空？」

「ウン。」

「…で…、平行世界のお前は、横の時間軸を使って何したの？」

さすがに話が早いね、と彼は笑顔で言う。

「伊達に何年もマフィアのボスやってないからねえ。で？」

「ウン…、まあ、端的に言うと、トゥリニセツテを集めたんだ。最終目標は…世界征服？」

「………馬鹿？」

「言わないでよ、言ってる僕だって恥ずかしいんだから」

恥ずかしがってる顔じゃないけど、と男は言いながら再び一口。

「でも、色々あって最終目標まで辿りつけなくてさ。そうこうして
いるうちにトゥリニセツテを集めてない世界が残り一つになったん
だ」

「よっぽど気が遠くなるような時間を過ごしてるよね、ソレ」

「まあね…で、その世界で僕は君に倒された」

かた、と止まった男は、笑顔を向けている彼をじーっと見つめて
から、へえ、と言った。

「倒された…ってつまり、殺したってことだね。どっかの世界
のオレ、中々やるじゃん」

「気にするところなの？　まあ、それで…一応僕はマーレリング

の適応者だから、そのやりたい放題やってた僕が倒されたことでそのくだらない野望もどっかいっちゃってさ」

「自分にくだらない言われてたら、倒されたお前ってかなり間抜けだね」

「だからそういう突っ込み恥ずかしいからやめてほしいな」

だから恥ずかしいようには見えないってば。と、彼が言ったのと同じく棒読みで返って来た。

「でも、心残りがあった」

死んだ瞬間、激しく後悔するくらいにね。

「……何か死ぬ気弾みたいな……」

「ン？」

「いや。続けて」

「それで、その後悔だけは消えなかったんだ」

最期の力を振り絞ったんだけどね、その僕がさ。

「……もしかしてさあ、その後悔ってさっきの彼に関係してる？」

「あ、わかる？」

「何となくね。何でだか知らないけど、あの人をそばに置くためにはトゥリニセツテの力が必要だったとか？」

「正に、その通り」

コップを置いて、ぎゅ、と両手を握った。

「正チャン……入江正一くん、って言うんだけどね。いつかの僕と彼は、親友だった」

またいつかのある時は、恋人だった。またある時は、義兄弟だった。

「色んな関係になって、色んな状況で過ごしたよ。でも、忘れられなかったのが――」

その、笑顔。

「もう一度、そばに……一緒にいて。その笑顔を見られる関係になりたい――」

願いは、ただ、それだけだったんだけどねエ。

「そうは問屋がおろさなかった、と。」

「ま、そういうことだね。」

男が呆れた目線を向けてくるので、知らぬふりをして彼は、ン？と満面の笑顔を向けてみせた。……溜め息を返された。

「で……わざわざオレを呼び出して話し合いの場を設けたってことは、オレも関係してるんだよね。……いや、この場合関係してるのはボンゴレリングの方？」

「両方、だよ。……継承者であるキミでしか、僕が必要とする力を引き出せなかったからね」

「けど、オレは適応者と違ってリングなしに力は使えないよ？」

不思議そうな声に、彼はそうだね、と頷いた。

「でも、キミは前世で確かにボンゴレリングに、そこに宿る意思に

選ばれた、ただの保持者でなく継承者だ。適応者ではないけれど、それに準ずる力がある」

「…前世…」

何だか不満そうな顔だ。

「どうかした？」

「…いや。何となく考えないようになってきた現実を突きつけられてちょっと嫌になっただけ」

「ああ、やっぱり気付いてたんだ？」

もう一人のキミとやらの記憶が、本当はあの子達にとっての前世の記憶だって。

「言明しなくても言葉尻から何となく読めたしね。…厄介な勘も働いてくれたし」

「便利な勘ジャン」

「お前、それ嫌味？」

「違うけど。僕も似たような能力なら持ってるしね」

あっそ、と若干白目を向けられ、彼は肩を竦めた。…確かにちよつと、ブラックユーモアが過ぎたかもしれない。

「ああ、でもあの子達の前世の記憶は、キミにとっての前世の記憶でもあるんだよ」

「…は？」

何言ってるのコイツ、と完全に馬鹿にしている目だ。

「…マジなんだってば。キミが忘れてるだけで」

「…………嘘言ってる気がしないのが、厄介だよなほんともう…」

オレにも、前世の記憶が、ねえ…？

「で？それって思いだせるの？」

「実質不可能じゃない？たぶん。完全に溶け合っちゃってるみたいだし」

「…溶け合う？」

ウン。と頷いてから、彼はカップを手に取り一口二口と口に運ぶ。

「つと。さっき言った通り、キミにはあの子達…“六人分”の“沢田綱吉”の記憶があったんだよ、昔はね」

「六人分、ね…ん？あの子達って、七人だけど？」

「守護者分って言えばいい？」

「…つまり、あの子達は前世でオレの守護者だったわけだ」
「その通り。」

ま、それが何で七人かは割愛するよ。わざわざ説明する内容でもないと思うし

「はぁ。で？」

「あの子達は一人を除いて、何かしら切欠があってキミのことを思い出したみたいだけど、キミは物心つく頃には記憶が既にあったんだよね」

「…前世のオレ達がどんだけ生きたのか知らねーけど、それって幼児にとっちゃかなりの負担じゃないの？」

「そーだね。だから小さい時、病弱だったデシヨ？」

「ああ…だからなのか」

「ウン。」

うわぁ聞けば聞くほど納得できてくる。ムカつく。　：最後の眩
きについては、彼は取り敢えず聞かなかったことにした。

「あの子達は、僕と同じく前世でキミに対して強い後悔を抱いてて
ね」

その後悔に対するオモイが、キミの力を増幅させたんだ。

「キミってほら、とおっても仲間思いだし。　記憶があることで、
無意識だけど尚のことその思いを受け入れちゃうわけだね」

「…大空の調和か…」

「そゆこと♪」

パチン、と指を鳴らす。

「歴代最強っつーか有り得ないほどの炎が出るのも、そのせい…？」

「元々の素質もあるだろうけど、一因ではあるだろうね」

「…元々の素質もあるんだったら、オレ、最大炎圧はもっと凄いつ
てことに…？」

「なるデシヨ。　平行世界のキミはブラックホールも吹っ飛ば…い
や、あれは調和の炎で取り込んだんだっけ？」

「…聞かなかったことにするよ」

額に手を当てて遠い目をしつつ、溜め息をつくその姿は、ちよつ
と色っぽい。

「あの子達がね、僕が干渉しなければキミと出会うことは無かった
ように、正チャンもね、強い、強い干渉をしなければ関われない状
態だったんだ」

「…ちょっと待て…、“お前が干渉しなければ”…？」

あ、…すっごい怒ってる。

「…お前が、何もしなければ、あの子達はマフィア^{コッチ}なんかに関わらなかったのか？」

「…綱吉^{ハイパー}クン。超死ぬ気化、しちゃってる、ヨ？」

「ああ、だろうな。死ぬ気丸など、継承式以来使ってない」

つまりは、継承式から己の意思一つで超死ぬ気化できるようになったということだ。

「…ウン。そう、だよ」

けれども、男に対して嘘をついても仕方のないことを、彼はよく知っていた。だから、虚勢だと思っても笑顔で頷いてみせた。

「……………何て、ことを」

橙色の瞳が、怒りの奥に悲しみを宿していた。…そう、男にとって、もう七人は手放せない存在なのだ。

「ごめんね。でも、僕にはあの子達が必要だった。そして、キミにも。」

「だけど、いなくても世の中は廻っていたんだろう！？」

「そうだよ。けれど、キミはそのうち持たなくなってたし、あの子達は潜在的に炎を扱うセンスがあるからそのうち見出されて、言いように利用されてたよ」

マフィア^{コッチ}なんかに関わらなければ、多少鍛えていても太刀打ちで

きないだろうしね。

「…………ツツ」

何が良いかなんて、わからないものだ。

「それでも、ね。キミが最初に思ったように、関わらないでいた方が幸せだったかもしれない。でも取り敢えず、あの子達はそうは言わないだろうね」

「…ああ。違うない」

誰に言われずとも、男が一番よく知っているのだった。

「どうしても正チャンに、会いたかった。…だから無理を押して、ここまでやって来たんだ」

「…無理、か」

シュウウ、と男の額の炎が消えた。

「その身体のこと？」

「あ…わかる？」

「わかるっていうか、ね。オレ一応すっげー家庭教師がついてたからさ、お前一応敵じゃん」

勘が大丈夫だって言っているけど、やっぱそれなりに警戒はするんだよ。

「けどどうみてもボスにしちゃひよろすぎるし、明らかに鍛えてないというか、鍛えても無駄っぽい雰囲気があるし。…オレも人のこと言えないけど、こればかりは体質だしなあ…」

「それは、身体がひょろいことについて？」

「当たり前。誰が虚弱体質だど？」

「はは、そこまでわかっちゃうんだ」

「いや、今のは鎌掛けだけど。やっぱりそうなんだ」

納得したように男は珈琲を啜る。　：彼も、誰が用意したのかは知らないが甘味の強い　野菜ジュースを飲んだ。

「っつーか、仮にもこっちは殴りこみに来た人間なのに、そんな相手との話し合いの場で野菜ジュースって。」

「割といつものことだけど」

「……………愛されてんね？」

「ウーン、誰の仕業かイマイチわかんないから、それも微妙なところなんだけど…」

曖昧に笑う彼に、男は鼻を鳴らした。

「それを愛されてると呼ばずして何と呼ぶ。虚弱体質のボスなんかめんどくさいだけだろ、なのにトップに据えてるんだ、信じろよ仲間を」

「…そうだね…」

偽りだらけ。　平行世界の僕が手に入れたものの、紛い物だらけ。　そんな、僕の、今にも崩れそうな小さなお城。

「…信じる気ないわけ？」

「っっていうか綱吉クンの口からそんな台詞が聞けちゃったもんだから僕感動しちゃったヨ」

「棒読みで言われても何の説得力もねー。　っつーか話脱線してる」
「ああ、そっか」

もう一口飲んでから、再開。

「力が封印されてるから、平行世界に干渉できるだけの力が無くてね。…どうしようか迷ってたら、“ユニチャン”に会ったんだ」

「…ユニ、に？」

「モチロン、この世界の、じゃないよ」

「…は？」

意味がわからない、と言われ、当然だよ、と返す。

「アルコバレーノには、キミの言う横線と縦線に干渉できる力があるみたいだよ」

マールやボンゴレを凌ぐほどじゃあないみたいだけどね。

「…へえ…」

「平行世界の僕の中には、ユニチャンに随分と酷いことをしたのがいてね。“ユニチャン”は、そんな僕から逃れて精神だけを飛ばしていたんだって」

「…ユニが……、橙の…大空の、アルコバレーノだから」
「ウン」

なるほどね、と言っているその顔は、とても不愉快そうだ。

「“ユニチャン”の好意で、力を貸してもらえることになってね。僕はまず、キミを探したんだ」

正チャンをそばに置いたためには、彼自身に僕のことを“前世の記憶”として知ってもらわなければならないから。

「そして、この世界のキミだけの力ではそれが不可能だってわかったから、平行世界のキミと守護者達を利用することにした」

「…何てあくどい」

「うん、ごめん」

返事は、真剣に。互いに、既に笑みは無くなっていた。

「縦の時間軸を利用して、前世の記憶を与えた。その影響がキミやキミの守護者達に出たんだ」

彼は立ち上がって、そして床にしゃがみ込み…土下座した。

「ごめん」

「…」

沈黙は、痛いというよりは寂しかった。まるで、そこに彼以外存在していないのではないかと思ってしまうくらい、男の存在が希薄になっていた。

「謝って、どうしたいの」

突如、問われ、彼は顔を上げる。

「謝ったからって、何かが変わるわけじゃないよね？」

「…それでも、謝らないワケにはいかなかったから」

「どうして？」

「…“正チャン”に、怒られる」

そのニュアンスの微妙な違いに、男は気付いたらしい。溜め息

をついて、座れば、と言った。

「入江正一：彼の記憶は、オレと同じような状態だったと思って間違いない？」

「ないよ。だからすごい怒られた。でも、綱吉くんほどは酷くなかったな、一人分だったしね」

キミはほら、大空だから。だからこそ受け入れられたし、受け入れてしまったからこそ、尚のこと苦しんだんだけど。

「でも彼、オレのこと覚えてなかったよね？」

「覚えてられることは、時間に比例して少なくなっていくみたい」

正チャンは、トゥリニセツテの保持者ですらないしね

「でも、それでもいいんだ」

：一緒に、そばに、いてくれるなら。

「だったらもっとちゃんと関係構築しろよ…」

「いやだって…どうしようか迷ってるうちにサ…」

「戸惑ってたし、説明して欲しそうな顔してたじゃん。きっと待つてるよ」

だからもっと話し合え、と男は言った。

「：綱吉くんってさ、やっぱり大空だよね」

「はあ？」

いきなり何だ、という顔。…と台詞。

いや、だってそうでしょ。ある意味諸悪の根源が目の前にいるっていうのに、そんな簡単に許しちゃってさ。

彼は、思うだけで、言葉にはしなかった。

「…溶け合った、っていうのも、大空の調和が？」

「ウン。完全にキミの中で融合しちゃって、深層意識辺りに名残が微かにある、って感じだね」

「ああ…言われてみれば、何となくわかるような」

男は、だから懐かしい感じがするのか、とぼつり。

「…何か、聞きたいことは、ある？」

「聞きたいこと、ねー…」

少し首を傾げていた男は、ああ、と呟いた。

「最近ジツリヨネロに何かちよつかいかけてたけど、それもこのため？」

「ああ、ウン」

「じゃあ、もうしないよね？」

「しないよ」

そっか、ならいいや、と男は言うのと、懷から何かを取り出して、そこに書きつけ始めた。

「はい、コレ」

「…え、これ…」

「お前のも頂戴。　　っつーか、ずっとお前って呼んでたけど、オレ、

お前の名前知らねーや」

「あ、白蘭：白い蘭、って書いて…」

「へえ」

差し出されたのは、名刺。：しかも裏に明らかにプライベートっぽい連絡先が手書きで書いてある。

「誰にも見せんなよ、今んとこ知ってるの両手に余るから」

「…そんな宝を…」

「宝って、大げさな…」

「いや、そうでもないと思うよ…?」

噂に聞くアルコバレーノ達の言動は、それはそれは凄いらしいから。

「アルコバレーノはなあ：アイツら、実際はブラッド・オブ・ボンゴレに惹かれてるだけっぽいから」

「それ、本人達の前で言ったら…」

「もれなく押し倒される」

「……………ウン、そっかー」

ふ、と遠い目をした男に、突っ込んだじゃいけないな、と彼は自重した。

「今できることはこれくらいかな。」

「…ねえ」

「うん？」

「あの子達に、話す？」

「え、話してもいいの?」

それって物凄く面倒なことになると思うんだけど。と言われ、そうだね、と返す。

「キミなら…どうするのかな、と思って」

「話す気はないよ。話したところで何かが変わるでもなし。お前は
お前で馬鹿なことをした罰は受けてるみたいだし？」

「結局馬鹿扱いなんだ…」

「自覚はしてるだろ」

「ウン、まあね」

確かにそうなんだけど。と内心呟く。

「結局、お前のせいで、わけのわからない進み方をしてるこの世界が、
自浄効果でオレ達も巻き込んだってことなんだろう？」

「ウン」

「これから先トゥリニセツテに妙な干渉をしない限りこれ以上面倒な
ことにはならない。わかりきってることだから、別に気にしないさ」

それより、もっと建設的なこと、考えないと

「…ファミリーの立て直し、とか？」

「お前はあれだろ、彼との付き合い方の見直し。とにかく、あの
子達連れて帰るよ」

立ち上がりながらの台詞に、思わずウン、と唸ってしまった彼
だったが、早く開けろよ、という言葉に慌てて壁に近寄る。

「…白蘭」

「何？」

彼が開けた壁の向こうを見つめながら、男はぽつりと言った。

「世界の安定に、興味はあるか？」

『キミ、は…』

『わたしが誰かは、言わずともわかっていますよね』

白蘭、と呼ばれ、彼はやはり、と確信した。

『ユニ、チャン』

『ええ。ここにいる貴方は、こうもまともだというのに。 どうして、あのひとは…』

『…しようがなかったんじゃないかな？』

『…そうなんでしょうね…』

真剣に溜め息をつくその姿は、例えるなら幽霊のようだ。

『似たようなものですけどね』

『…アレ?』

『それよりも、白蘭。随分と、悩んでいるようですね』

『…わかる?』

ええ。と彼女はふわりと笑った。

『ずっと、見ていましたから』

『いやユニチャン、その発言はちょっと、頂けない…と思うよ?』

『そうですか?それはすみません。ところで、力をお貸ししましょうか?』

『…あっさり流しちゃうんだ。で、力を貸すって?』

透けている少女の両手が、彼の頬を包む。

『貴方の望みを叶えるための力を差し上げよう、と言っているんですよ』

『……いいの? そんなことして』

『本来なら、許されるべきではありませんね』

少し離れていった、その笑顔が、悲しげに歪む。

『でも、あのひとに力を渡すよりはマシでしょう』

『……ねえ、その力って、もしかして…?』

にこっと、有無を言わさない笑顔を向けられた。

『…いいの?』

『わたしの命ですから、最期^{終わり}くらいは自分で決めます』

しっかりとした声に、圧倒される。

『…そ、か』

やがて出てきた言葉は、そんな、ささやかなもので。

『では、白蘭。受け取ってもらえますね？』

『それは、僕からお願ひしなきゃいけないよね。　…どうか、ください』

両手を差し出す。　そこに、何かを包むように広げられた彼女の
手が近づく。

しばらくして、橙色の光が輝き始め、段々と大きくなり　――

『……命の、炎』

例えマーレリングが封印されていようとも、彼は適応者だった。
だから、知っていた。

三千世界の平行世界。彼はその同じ時間の自分と同調することができる。それは感覚、記憶、能力等の共有というのがよく言われる力だ。　だが、平行世界というのは沢山の選択肢の分岐点にあるもの。　よって、適応者としての力を行使した『彼』とあまりにも違う選択肢の先にある『彼』との同調は、互いに疲弊させるものだった。

更には、そういう場合トゥリニセツテを手に入れるのが実質不可能であった。故に、かの野望を抱いた『彼』はそういう世界を切り捨てた。まあ、情報収集のためには遺憾無く使っていたが。

彼は、知っている。野望を持つ『彼』に、ほぼすべての三千世界の平行世界が支配されたことを。

彼は、知っている。野望を持つ『彼』から逃れるため、目の前の少女が幾度となくその命を散らしていることを。

彼は、知っている。野望を持つ『彼』が、滅ぼされる世界があることを。

『びゃく、らん…』

もう聞こえないと思っていた声に、ハツとする。 命の炎の向こうに、透けていた身体が更に透けて見えている。…そして何だか近づいてきている。

『…もう…こうかいは、しないで？』

『…後悔』

『あのひとが……あなたのような、ひと、だったら……』

わたしは、きつと…

言いながら、すう、と涙を流し――、軽く、触れて。 下から消えていく少女の姿。

『…え？』

実体はない。だから、実際は、触れた感触などない。 …けれど。

『…』

確実に実体があったのなら、触れ合っていたのだろう唇に手を当

てて、しばらく彼は呆然としていた。

「…ほんと、今でもあれだけ理解できないんだよね…」

ぽつりと、閉じていた目を開いて彼は呟いた。

「…まさか、ほんとまさか、なんだけどさ…」

何度も考えては、そんなわけないだろう、と否定してきた考え。

「“ユニチャン”、僕のこと…好きだったの…?」

当たり前じゃないですか、という幻聴が聞こえた気がした。

百花蜜の場合（後書き）

次はアルコバレーノがたくさん出てきます。梨は新章を読んでません。よって一部口調がおかしい人が見られるかと思いますがどうかお気になさらず…

虹と大空

「…さて…」

いつものように難なく侵入した城の中を、黒く長い三つ編みを揺らしながら歩く青年がいた。

「あれ？ 風？」

呼ばれ振り返れば、目的の人がいた。

「…また侵入してきた？」

「ボンゴレの警備態勢の問題ですよ？ 綱吉」

「いや、お前らに關してはそこ諦めてるんだけど…もう顔パスっていうか、おしゃぶりを見たら通せて言っているし」

「それでは偽物が出てきたら困るのでは？」

「…：仮にもトゥリニセツテの一角を本物そっくりに偽造できるか…？」

しかもオレのそばには、ほぼ四六時中リボンかラルカマーモンがいるんだぞ？

「それもそうですね」

あっさりと返しつつ、風は彼の隣に並ぶ。

「ところで、今は何を？」

「書類整理が一段落したから、ちょっと休憩がてら散歩でもしようかなと思ってたらお前と会ったんだよ」

「なるほど。ではお供しましょう」

彼が歩いて来たのであろう方向とは逆の方角へ足を進めつつ、風は問うた。

「ところで、リボーンはまだわかりませんが、ラルやマーモンもよくそばにいるんですか？」

「んー？まあね。リボーンは用がなくても居座るけど、ラルとかマーモンとかは任務のついでに寄ってくくらいかな」

ほんっとリボーンの奴人のこと何だと思ってんのか。

(……随分と株が下がっているようですよ、“元家庭教師”さん)

思いつつ、まあ敵が少ないのはいいことだと、風はにっこりと笑って相槌を打った。

「…ってか、風、今日リボーンが招集したんじゃないかった？」

「ええ。ですが、まだ時間がありますから」

どうせなら綱吉と一緒に過ごそうと思ひまして。

「ふーん…あのさ、何で呼ばれたか知ってる？ 何でかオレには教えてくれなくて」

「さあ…説明は後で、と言われましたので」

ですが、どうも貴方に関するこのようですよ？ 綱吉

「へ？オレ？」

「ええ。ですから教えなかったんじゃないでしょうか」

「いやオレ関連なら尚のこと…あ、でも口止めされてるってこともあるか」

あのリボンが素直に口止めされてくれるとは思わないけど…

「あるいは利害の一致かもしれませんが…。ところであては？」

「うーん…あんまり遠くに行くと面倒だからなあ… おっと」

突然携帯が鳴ったので二人は立ち止った。

「Ciao! あ、ユニ？あれ、オレ教えてたっけ？ …そう…、で、何？ ……今から？えーと、ちょっと待って。後でかけなおすよ」

「ユニからですか？」

電話を切り、Vさん、哀れ…、と呟いている彼に、風は声をかけた。

「うん。何か今から会えないかって。 えーと、この後は…、ま、何とかなるか」

いくつか部下らしい相手に電話をしてから、彼はユニへ電話をかけた。

「…：うん、今から行くから。あ、風どうする？」

「そうですね、一緒に行きたいところですが…、ジツリヨネ口まで行くと遅れてしまいそうなので…」

「そっか。じゃあオレだけで行くから、そんなかかんないよ。うん。迎えとかいらなから。じゃ、あとでね」

電話を切る前から懷をござとあさり出した彼は、切り終わって携帯をしまうのと同時に真白のミトンを取り出した。

「…それで行く気ですか？」

「これの方が早いし。今日は曇りだからうまくすれば人目につかないし」

「……お氣をつけて」

こういう、妙に事勿れ主義なところは出会った頃から変わらない。そう思いつつ、何を言っても無駄なのだろうとはわかっている風は、下手に諫めて印象を悪くするよりも現状維持を選んだ。それでも苦し紛れの一言が漏れたが。

「わかってるって。風も氣をつけてね」

リボーンってば何か最近不機嫌なこと多いからさ

（…昔は独り占め出来ていたのに、今はそうでないからではありませんかねえ…）

内心は微塵も見せぬよう鉄壁の笑顔で隠しつつ、そうですか、氣をつけます、と答えた。

「それじゃ、また…」

「ああ、綱吉」

ひよい、とその手を取る。きよとした顔もまた、昔と変わらないと言ったら童顔なことを気にしている彼はきつと、嘆くのだろう。

（確実に、成長はしているんですけどね）

曖昧な表現になるが、その雰囲気が変わらない、と言おうか。きつとこの気持ちはアルコバレーノ全員に共通するものだ。

「またの機会は、どうか二人っきりでどこかへ行きましょう」

言いながら、取った手の甲にそっとキスを落とした。

「あ、うん……ほんと、無駄に気障だね」

どこか照れ臭そうに笑った彼は、突然ふ、と少し色気を感じさせる笑みを浮かべたと思ったら、一番近くの窓に近づいて行って、開けてからそこに背を向けた。

「じゃ、オレも次の機会を楽しみにしてるから」

ちゅ、と。風が唇を落としたその場所に、彼の唇が、触れて。

「…ッッ！」

そのまま、背中から、落ちて行った。

慌てて窓に近寄れば、目にも止まらないような速さで飛んでいった橙色の炎を纏う人影。

（…やられた）

滅多にない不意打ちに、絶対に赤くなっていると思いつながら、まあ自慢話にでもしようか、と中々黒いことを考える風であった。

「それですね、ツナさんっ」

「うん、落ち着いてねユニ。紅茶がこぼれそうだよ」

「あらやだっ」

元気なのはいいことだねーと微笑ましげに言っている彼に、ユニはちよっと膨れた。

（ちよっと子供っぽくしすぎたかしら）

他のアルコバレーノと違い、彼女と彼とは、彼女は気にしないが彼は気にする年齢差がある。

それがなければ他の同朋のように強く迫ることもできたのだが…

（ちよっと年下だからって、他の人と扱いが違うって、少し酷いと思うんです）

基本的アルコバレーノに甘い彼だが、中でも年若なユニには特別甘い。けれどもその分そういう面では厳しい。

特別扱いと言えば聞こえはいいのかもしれないが、ちょっと納得できないユニであった。

「そういえばツナさん。　リボーンおじさまが鍛えてる人達がいるそうですが…」

「リボーンが鍛えてる…？　ああ、あの子達のことかな」

一瞬不思議そうな顔をした彼は、すぐに思い出したかのような声を上げた。

「どのような方達なんですか？　おじさま自ら指導なさるなんて、気になってしまっ」

「うーん…幹部にもまだ通してない話だから、口外は厳禁だよ？」

「はいっ」

真剣に応える。彼の話に限ってはとても口が堅いつもりだった。

（というか、超直感の持ち主に嘘なんてつけませんし）

誰が何と言おうと、口外なんてするつもりはなかったりする。

「オレの守護者…候補、かな。今のところ」

「…あれ？でも守護者って…」

「うん、一応いるよ。幹部が煩いからリボーンに頼んで適当に決めて貰った人達がね。」

でも、彼らは本当の意味で適任じゃないから

「大空のリングみたいに保持者持ち主を選ぶわけじゃないから、別に彼らでもいいんだけどね…」

あの子達に任せた方が、色々とこの世界の為になるだろうから…

「ツナ…さん？」

「ああ、ごめん。ちょっと関係ない話しちゃったね」

気にしないで？、と笑う彼からは、どうも疲労が滲み出ている気がする。

「…お疲れですか？」

もしかして間が悪い時に呼んでしまったのだろうか、と悲しげな顔をするユニに、彼は慌てたように言った。

「ああ、そんな顔しないで、オレがYさんに睨まれるからっ 確かにちょっと疲れはしてるけど、大したことないから」

「本当、ですか…？」

彼ほどではないが、彼女も大空のアルコバレーノである故、勘は鋭い方だ。じっとその瞳を見つめる。

「本当だよ」

返って来た真剣な光に、取り敢えずは安堵した。

「…ユニ」

すると、一呼吸おいて彼の手が伸びてきて、彼女の片頬に触れた。

「ツナ、さん…?」

自然と、上目遣いになる。机の向こうからだと遠いだろうに、そんなこと気にしていないかのように彼はじっと彼女を見ていた。

「どこか…辛いところは、ない?」

「え?」

「熱が酷かったりとか、変な夢を見たりとか」

「ない、です、けど…」

何を言っているのかわからないが、感情を素直に表現して彼を見返せば、彼はほっとしたように手を離した。…もっと触れていてくれても、よかったのに。

「そっか。…こっちのユニには、影響はない、ってことか…」

「え?」

後半の呟きは聞こえなかった。

「何でもないよ。ところでユニ、最近はどう?」

「え、と…特に、何も。以前は何だか妙な動きをしているファミリーがありました、今はそれもなくなりましたから…」

「そっか。何かあったら、すぐ言ってね」

「…はい」

その後は、楽しく談笑していたのだが、途中、電話があった。相手はどうやらアルコバレーノ最強の戦闘力を誇る彼のようなだったが、軽くないなして彼は切ってしまった。

「…いいんですか？」

「いーのいーの。どーせオタノシミなんだから」

これでつまらなさそうにしていたらユニは憤慨していたところだったのだが、その言い種はとても面倒臭そうで。

「…何か、あったんですか？リボンおじさまと」

「ないよーなーんにも、ね。うん。何かあってたまるか」

（…おじさま、何をしたんですか）

ちょっと荒んでらっしゃるんですけど、と彼への心配と彼にこんな顔をさせている人への苛立ちを覚えるユニ。

そこに、先程とは違う着信音が鳴った。

「え、うわ珍し」

（…携帯も違う？）

彼が最低二台携帯を持ち歩いているらしい、というのは耳にしていたが、まさか本当だったとは。

小さく断って立ち上がって小声で会話している相手は、どうやらかなり親しい相手のようだが。

（…誰なんでしょう）

「……は？…よう？そんな、いき……はあ、……た。わかったから。…くから。そんじゃ後でなっ……ったくワガママなんだから…」
「誰ですか？」

「一番扱いが一筋縄じゃいかない癖に単純な奴」

（…一体誰のことですか…？）

内心が、顔に出ていたのだろう。彼は苦笑して、ヴェルデだよ、

と言った。

「……今から…行かれるんですか？」

「行かないとここに襲撃するとかふざけたことぬかしてくれたからね。行くよ」

（…それは…困りますね…）

というかその確信犯的行動がとても癪に障るのだが。

思いつつ、立ち上がってその背中を見送りかけて、ちょっと思いつき抱きついてみた。

「おっと。 どうしたの？」

「あの、ツナさん、キスしてくださいっ」

「……………、ユニ、いきなり、何？」

っつーかそこにいるYさんが凄い形相してるんです、ケド…

言われてみれば、扉が開かれていて、そこに立っていたYが何だか怖い顔で彼を見つめていた。

けれども彼女は今更止まれるか、ともう一度ぎゅっと力を込めてから緩めて、彼を見上げた。

「だめ…ですか…？」

「……………」

どうしろと。と、その顔に書いてある。気付かないふりでユニは彼をじっと見つめた。瞬きをしないように努力しているからか、ちよっぴり涙も滲んできた。

「……（はあ）……、ユニ、ちよつと目を閉じて」
「っ はいっ」

パアア、と顔を輝かせた彼女は、視界の端で一段と顔を顰めた（父親代わり筆頭）という表現では足りないほど顔を歪めた）父を見なかつたことにして、目を閉じた。

微かな衣擦れの音が、彼が身を屈めてきているのを教えてくれる。とても、ドキドキする。

ちゆ

「…え？」
「どこにしろ、とは言わなかつたよね？」

間近で悪戯っ子のような笑みをかけられ、赤くなりながらユニは反論した。

「ずるいですっ」
「（くすくす）まだ早い、とは言わないけどね。もう少しシチュエーション選んでくれる？」

でないともうオレジツリヨネロに出入り禁止になるかもしれないし

「…ボンゴレ、今の発言だけでも十分引っかかるんだがな…」
「ほら、な？」

「…わかりました…、次は誰もいないところで言います…」
「姫もそういう問題じゃないぞ!？」

「まあまあ、Yさん。オレも別に無体なことはしませんから」
「人の心配を煽るなボンゴレ!!」

やだなあ、煽ってなんかいませんよ、と笑っている彼をYは嘘臭く思っているのだろうな、とユニは思いながら内心呟いた。

（あの顔は、本気なのに）

それが無性に、気に入らない。

「いいじゃないですか、ちょっとくらい。……眩しいものに目を細めるくらい、許されるでしょう？」

「…、ボンゴレ、それは…」

「ちよっとした、懂れです。……オレは、たぶん…」

その先を言わずに彼は目を閉じて、次の瞬間にはいつもの柔らかい優しい笑顔を浮かべた。

「それじゃ、また。」

「あ、ああ…」

ひらひら、と手を揺らして去っていった彼に、力を抜かれてしまったらしい。その背中を見送ったYは、肩を竦めてからユニを見た。

「ところで姫…、いつまで瞼に触れているつもりですか？」

「え？」

完全に無意識だったので、慌てて彼女は手を下げたのだった。

(…気に入らねえ)

リボーンがその日アルコバレーノの大半を呼び集めたのは、彼の最高傑作にして最愛の男が無意識に特別扱いしている少年達を鍛えるためだった。ちなみに面倒臭かったので本当はやりたくなかったのだが、進言してきた銀髪の少年に乘せられてしまったのだ。

そして今現在、何でかやたら戦い慣れている少年達を、他の同朋とともに扱っているわけなのだが。

(まったく何だってんだアイツ…ッ)

最近、妙にこっちの扱いが粗雑な気がする。 …いや、気のせいじゃない。絶対にそうだ。

初めは先程かけた電話の内容だったが、段々他にも色々と思いだして不機嫌になり、攻撃は容赦なくなっていくリボーンに、相手をさせられているランボは戦々恐々としていた。

ズガンッ!!

「ツッ?!?!? りり、リボーン今のはすっごい危なかったけど!?!?!」

「(チッ) 当たんなかったからいいだろ」

「舌打ちしてんじゃないか?!?!」

「よそ見してつと脳天ブチ抜くゾ」

「してない!! つつーか相変わらずお前理不尽だな!!?!?!」

「∴“相変わらず”∴か」

リボーンにしてみれば、ランボと会った回数は数えるほどののだが、ランボを含めた今日この場にいる扱かれる側の少年達は皆、アルコバレーノのことをよく知っているかのように話すのだ。初対面の面々の方が多いというのに。

「∴問い質してみるか?」

だが、少年達のことを無意識に特別扱いしているかの男のことが思い出される。“無意識”、というところがポイントだ。下手なことをすればどんな逆鱗に触れるか∴。恐怖^{こわ}くはないが、無視^{スルー}される生活が起こりうるのはいただけない。

「オイ、リボーン。少し休憩したらどうだ?」

いつもの無表情が盛大に歪んでるぞ?

やや揶揄のような口調で通り過ぎていったラル・ミルチの台詞に、リボーンは一瞬固まってから、休憩の合図を撃ち出した。

「中々の腕前だな、奴ら」

「ああ、扱き甲斐があるな、コラ!」

「っていうか何でオレまで∴」

「ところでリボーン、先程の電話の相手は？」

かけてましたよね、どなたかに。と風に聞かれ、リボーンは少し黙ってから、ツナだ。と答えた。

「そうですか：そういうえば貴方、彼に何かしたんですか？　かなり不機嫌そうでしたが：」

「知るか。アイツの俺の対する態度ならかなり前から酷いかな」

「そういやオレもしばらく来んなって言われたな」

「俺もしばらく会えないって言われたぞ、コラ」

「オレも、ちょっと前に会った時に：」

リボーンは、自分だけでなく他のアルコバレーノにも彼が冷たくしているらしいと聞き、少し首を傾げた。ぶっちゃけ、知るかとは言ったが、色々画策したせいもあって、元々彼はアルコバレーノをよく思っていなかったのを知っているのだ。それが何故こうも親しい関係にまで発展するのかといえば、ひとえに彼が御人好しであるからである。

少なくとも、すぐそこで互いの戦いっぷりについて語り合っている少年達が現れるより前は、幼馴染であるクローム髑髏と、親友となった古里炎真を除けばアルコバレーノが一番、彼の精神的上位にいたのだ。：それなのに、しばらく会いに来るなど言っている？

「まあこの後会いに行くつもりだけだな」

「おや、綱吉ならユニのところに行ったはずですが？」

「ユニのところには？」

「ええ、さっき別れる前に言っていましたから」

「：会ったのか」

「ええ。ですが、わたしには会いに来るなどとは言いませんでしたが：」

「風は一回会いに来ると時間が空くからな…だからじゃないか？」

休憩からそのまま気になることについての考察へシフトしている
アルコバレーノ達。

「ツナのことだから、何か一応理由はあるんだろうけど…」

「そうだなコラ。理由の大半が勘なのは困ったもんだが」

「そういやリボン、最近綱吉はやたらめったら城に詰める人数を
削ってるらしいが、理由は聞いてるか？」

「…いや。一回聞いたが言いたがらねえ。まあおかげで騒がしくな
くていいがな」

「潜入もとても楽でしたからね」

「テメエはいい加減正面から入ってこい」

だって面倒臭いじゃないですか、と笑顔。風は天然で言っている
ので性質タチが悪い。

「…ったく。何考えてんだか」

考察も一段落ついてしまったので、相手を変え再び特訓を開始し
た。

少し思いを巡らせば、簡単に思いつける初対面。弱弱しいが、と
ても頑固な性格だろうということがわかった。だからこそ彼は、強
くなるだろうと。

（ただのひ弱な人間が、あそこまで堕ちてそれでも立っていられる
はずがねえ）

だから本当は強くなれる人材なのだと。そう見抜いた自身を、

リボーンは一度として疑ったことはない。そして、素晴らしく成長したかの最高傑作は、笑顔で彼を：元家庭教師を肯定するのだ。ブラッド・オブ・ボンゴレ、超直感の持ち主の言葉ほど真実味のあるものはない。

だから、尚のこと苛立ちを覚え、そして少し、恐怖する。素晴らしく成長しすぎてしまったから。重き荷を背負い、人に頼らず生きることを、彼は覚えてしまったから。

(：俺が、覚えさせてしまった)

それは、必要なこと。わかっていたからこそ。：だけれどまだまだボスとして幼い彼が全てを背負う必要など、ないのに。誰もが皆、力を貸すというのに。

(：厄介なのは、そうして独りでも、まだ、立っている、ってことなんだがな…)

転機は、やはり継承式か。今では彼はちゃんと周囲の人間を使い、ボスとしてしっかりと足場を組み、日々努力している。だがその姿が、彼の身近にいる人間にはこわい。独りで笑顔を浮かべて立ち、何事もないようにボスとして在る彼が、いつ崩れるかとおそろしい。

リボーンは、それでもきつと、崩れることはないと思っている。だってそう、育てたから。だってそう、育ったから。

(：コイツらが成長して、本当に守護者になりや：少しは、マシか？)

詳しいことは聞いていないが、ジェッソとかいう弱小新興ファミリーと何かしらあってから、彼の態度は更に硬化している。それに気づいているのは恐らく、リボン一人だ。アルコバレーノの中では、それに気づけるほど彼のそばにいたのがリボンだけであったから。　…だから彼は、邪険にされても彼のそばへ行くのだ。

ガチャンツツ

「……………あとで…ジツリヨネロに行ってみるか…」

「ん???　何か言ったか??」

「いや、…行くぞ」

「おうっ!」

ダイナマイト。刀。拳。雷。　そして、アルコバレーノ達の首元で光る、赤、黄、白、青、紫。

特訓は、まだまだしばらく続いた。

「…は? ヴェルデだと?」

「ええ。そう言っていました」

「……アイツ…帰ってこない気か…?」

だがヴェルデの野郎の場所なんかわからねえしな…

「ところでおじさま、今日は何をなさってたんです?」

「今日?　…ちょっとした、訓練をな」

「あら：では噂の方々ですか？　でもツナさん、何も御存知ないようでしたけど：」

「ああ、アイツらの方から言わないでくれて言われてっからな。

一応指導云々はまだ先のことって話になってるから」

「：それは、よろしいのですか？」

「構わねえだろ。俺は悪くない」

ってかそういうことにする。

視界の端にちらつく、自身の最高傑作の何かしら含みのある笑顔には気づかないふりをして、リボーンはそう呟いたのだった。

「：ツと：ここだな」

携帯電話を操作しつつ、辿りついたのはどこからどう見ても廃墟。メールの確認をしてから、電源も切って彼はきよろきよろと周囲

を見渡す。

そして当たりをつけ、これか、と呟いてそれとわからぬよう細工されているスイッチを押した。

ウィィィーーン

「……相変わらず無駄にメカニカルというか、近未来的というか」

ぼつりと感想をこぼし、中に入って行った。

入口が開いたのを知り、ヴェルデはやってきた人物が見ればそんなモン一緒に保存してんじゃねえよ?!?!と悲鳴を上げられるような物（体）も一緒にくたに入っている冷蔵庫を開いて、あるものを取り出した。

ついでに数少ない生活用品がおさめられている棚にも手を伸ばし、軽快な足音ともにおりてきた彼に声をかけた。

「来たか」

「やつほーヴェルデ」

「くれてやる」

「あ、コレ前にくれたプリン?!」

もらうもらうー、とにこやかにそれを受け取った彼は、ラボの隅にある小さなスペースへと入りこんでいった。そこにはソファベツドとサイドテーブルが置かれている。ラボの中で唯一、“家”らしい場所だ。残りは機械で埋まっているから。

「んーっ うまっ」

一口食べて幸せそうな顔をしている彼に、一瞥をくれてからヴェルデは作業を再開した。

「何やってんの？」

スプーンを噛みつつの少々行儀の悪さが妙に可愛らしく見えるのは不本意なのだろうな、と感想を抱きつつ彼のもごもごとした問いに、貴様の注文の品だ、と答える。

「え、アレ？ 別に急がなくてもいいって言ったのに…」

「他よりも中々興味深かったからな」

言いつつ白衣を翻して彼に近き、ほら、とばさりと紙の束をサイドテーブルに置いた。

「ん、さすがは天才科学者。仕事が早いなあ」

プリンのカップをその横に置いて、紙の束を手に取りその内容を斜め読みしている。

「今悩んでいるのはここ？」

「ああ」

「うーん… こーゆーのはラルとかスカル辺りにハッキングとかクラッキングとかしてもらってさあ…」

「私にアレらと交渉しろと？」

「ん、無理だねー。 あ、じゃあこういうのは？」

一拍置いて彼の提案を聞くが、それはいけるかもしれない、とヴェルデは頷き、立ち上がった。

「…こういうとき、すぐに代替案が思いつくのも超直感か？」

「さあどうだろ。…まあ白蘭の言ってたことを信じるなら、そうかなあ…」

「白蘭？ それはジェッソのボスのことか？」

「ん？ 知ってんの？」

彼が落としていた視線を上げて問うので、あそこは興味深い技術者がいるからな、と軽く返事をする。

「へえ…お前にそこまで言わせるなんて凄いね…ん？」

言いながら再び視線を落とるので、その視界の端に入るよう手が伸ばす。その手にあるのは…

「礼だ。食え」

「いやまだこっち食べ終わってないんだけど…ソレ、珈琲ゼリー…？ 新作？」

「ああ」

餌付けか何かか。別に絆されてなんかやらないんだから。…ん？ 既に絆されてるようなもの？ と独り言か知らないがぶつぶつ言いながら、彼は一口。

「お、うま。でもミルクはもうちよつと濃いめが好み」

「そうか」

料理はしないものの、時折こうして手作りお菓子を用意する。尤

も、作っているのはヴェルデ本人ではないのだが。注文については優秀な頭脳の三分の一を占める彼に対するメモ欄に書きつけておく。

「ヴェールデーえ」

「何だ」

そしてまた再び何かしらの作業を開始したヴェルデに、口つけちやったし、とゼリーの方を攻略し始めた彼は、やたら間延びした口調で名を呼んだ。

「トゥリニセツテって何だと思う？」

「…どういう意味だ？」

「お前、科学者だろー？ 一科学者から見ても、トゥリニセツテみたいな力は、異端じゃないのかなと思ってさ」

彼の脈絡のない話は、それなりに慣れている。彼曰く、「ヴェルデぐらいだもん、オレの戯言に付き合ってくれんの。」だそうだが。

「トゥリニセツテは、科学の神秘だ。一種のオーパーツ。いずれか辿りつけるかもしれない技術の境地だな」

「わあ、結構理想論的なんだね、理性的でもあるけど」

「悪いか？」

「いや。ちょっとは人間らしくて安心した」

にしても、オーパーツか、言い得て妙かも。

感心した風な言葉を漏らしている口には、いつの間にかプリンが運ばれていた。

「トゥリニセツテがどうかしたか？」

「んー……」

かたん、と食べ終えたカップをテーブルに置いて。作業していると二人は殆ど向きが背中合わせになる。気配からこちらを向いたらしいと感じつつ、一応は我関せずという反応を貫く。

「世界平和、目指してみようかと思ってさ」

「…そうか…」

「え、何、そのどうでもよさげな」

「“核爆弾でもプレゼントしてやろうか？”の方が良かったか？」

「何その極論。そしていらん。どうせくれるんなら大西洋の向こうで何か馬鹿やってる奴らを締め上げる為の秘策とかさ」

「光学迷彩の試作品ならあるが」

「何ソレ見たい！」

欲しいではなく見たいなのか。という突っ込みは残念ながらどこからも入らなかった。

「んぐ…う」

寝苦しそうな声に目が覚めたヴェルデは、自身の腕が彼の胴に巻きついていることに少々戸惑った。

切欠を作ったのはヴェルデ自身だ。発端の出会いに関しては、当事者二人のみ良い意味で偶然だったと考えている。そして周囲は最

悪の邂逅だと思っている。もう一度言うが、この関係のきっかけはヴェルデだ。一度は無くなったはずの繋がりを、敢えて繋ぎ直したのは。

だからラボの場所を知らせているし、あまりに会っていないと会いに来いと連絡をしもする。それでも尚、何か物足りないはずと感じている。そして気付けば、このザマだ。

小さく溜め息をつき、力を緩める。…そして自分でも驚くほど力が入っていたことに更に戸惑う。取り敢えず息苦しそうな声ではなくなったので息をつく。

「…オマエを、閉じ込めれば気がすむのか…」

だがそれは禁止事項の一つだった。彼の勘の良さには本当に頭が下がる。そしてそう考えている自分に、まだ理性が残っていると安堵するのだ。

『言つとくけど、理性を失くして禁止事項を破ったら凍り付けにするから』

研究を続けられなくなることに、そして彼に触れることも触れられることに、ともに無くなるのは勘弁したい。それがヴェルデの偽りなき本心だ。

だから一息に言われた、並の人間なら覚えていられるはずもない禁止事項の数々を、常に脳裏に留め思い返しては、恐る恐る彼に手を伸ばすのだ。そんな内心など、気付かれぬよう細心の注意を払って。

今度は堪え切れず、盛大な溜め息が漏れる。目覚める様子はなく、ヴェルデは何かを諦めた気分で彼から手を離し、身体を起こした。

そして自分達のいるソファベッドへと目を落とす。

このソファベッドとサイドテーブルは、前の前の前の前……くらいのラボの頃、彼がせめてこれくらいは置けと言って置いていったものだ。その前は手術台モドキの上で寝ていた。ちなみに居場所が感知される前にヴェルデはラボの場所を変えている。

大体のものは使い回しなど（移動が面倒臭いから）しないのに、この二つだけは決して変わり映えはしない。

（……まあ、綱吉がやたら拘ったようだから、な……）

サイドテーブルは兎も角。

すうすう、と健やかな寝息を立てている彼に何だか言いようのない感情がわきおこる。ヴェルデは身体の赴くまま、彼に手を伸ばした。

「んんゝっ」

地下ラボから出て、少し離れた場所で伸びをした。

「やっぱり陽に当たるのっていいよね」

のほほんと呟きつつ歩を進めつつ、がさりと音のした袋を見て、彼はくすりと苦笑する。

「ほんと、マメだよなあアイツ。」

彼のアルコバレーノマメ度ランキングでは風と一位を争っているのがヴェルデだ。次点にスカル。四位にマーモン。最下位は意外や意外、リボーンだったり。

鼻歌を歌いつつ辺りを見渡せば、見知った人間が。

「………コロネロ？」

「んっ？ ツナじゃねーかコラ。何してんだこんなところで」

「愛の逃避行に誘われたから気絶させてきたんだ」
ランデブー ノックアウト

「ハァ！？！？」

「じょーだん。一夜明かしたら引越すって言うから、お土産貰って出て来た。コロネロこそこんなところで何してんの？」

笑いながら歩み出し、話題をふる。

「俺は今からマフィアランドに戻るところだコラ」

「ああ、マフィアランド… コロネロ、今、暇？」

小首を傾げて尋ねる。

「…暇っちゃ暇だが？」

首を傾げて自身よりだいぶ低いところにある頭を見下ろすコロネ口、にっこりと彼は言った。

「じゃあさ、ちょっと付き合ってよ」

「で、どうしてこうなるんだコラ…」

「えーっ？ 何か言ったーっ!？」

やたら小悪魔チックに誘われたかと思えば。

思いつつとても楽しそうにしている彼に、まあいいか、と思ってしまふ自分がいるのに気付き、溜め息の止まらないコロネロ。

二人のいるのは、マフィアランドだった。表の。「何か憂さ晴らしたいんだよねっ」とキラキラしい笑顔で告げた彼は、それはもう楽しそうな笑顔でアトラクションに向かって行ったのだった。

「はー、楽しかった。次はどこ行こ。っつーかコロネロも一緒に乗ろうよ？」

「…俺はいい。ってかツナ、何が理由でそんな憂さ晴らししてーんだコラ？」

呆れを隠さずに言えば、一瞬にして不機嫌そうになる顔。しまった、と思ってももう遅い。

「……………わかった、そんなに嫌ならオレ一人で…」

「だあああ！！ 聞かねえから！！ 聞かねえから一人で行くなコラ！！」

「何その反応。オレ聞き分けのない子供みたいじゃん！」

「場合によっちゃもつと酷い奴だぞコラ…」

何せ、その気になれば老若男女をオトして骨抜きにできる、実体はマフィア界において“最強の選^{イ・プレシエル・ティ・セツテ}ばれし七人”と呼ばれるアルコバレーノ（実際は七人でなく八人がその扱いを受けているが）全員を愛人に持つ、マフィア界の重鎮・ボンゴレファミリーの若き十代目ボスだ。何だか肩書きが凄すぎて笑えてくる。乾いた感じに。

「何乾いた声で笑ってんの？ ちょっと不気味だよ？」

「そーゆーのは思っても言うなコラ…」

「え、結構オブラートに包んだ感じだけど。 あ、コロネロお腹すいた」

「その上たかる気か」

「は？ まさか。リボンじゃあるまいし、ちゃんと払いますー ……
アイツのこと思ひだしたら何か無性に腹立ってきた」

あの理不尽俺様ぐるもみヒットマンめ…

据わった目で呟かれた台詞に、アイツは何やったんだ…と諦めの境地に入るコロネロ。

その傍ら、ということは旨い場所を教えろと、そういうことだなコラ、とぶつぶつ呟きながら、同じくぶつぶつ呟いている彼を促す。呟きながら動きだされると正直不気味なのだが、この際気にしない。気にしないったら気にしない。

（とぼっちちりを受けるのは勘弁したいからな…コラ）

というか理不尽は人のことを言えないのでは、という感想は、必死に胸中に収める。超直感という便利で厄介な代物を持つ彼は、時に読心術を持つ同朋よりも容易にはつきりとその心中を当ててみせるのだ。末恐ろしい。

「ほら、ここが一番量があって旨い店だぞ、コラ」

「はっ わ、ありがと！」

っつーかまだ文句言ってたのか…と黄昏つつ、注文をしている彼に何だか目を細める。

初めて会ったのは、彼曰く理不尽俺様ぐるもみヒットマンに、彼が師事させられていた頃だ。あの頃から内面は（一部のみ、もしくは一部を除いて）かなり変わったが、見た目は残念ながら身長が伸びただけで殆ど変わっていないと言わざるを得ない。

（いや…伸びてるだけでもマシなのかコラ？）

伸びてなかったら…、そんなことを考えてみると、何だか世を憐んでそうという考えに行きつく。そんな馬鹿な、と自分で突っ込むも、やっぱりその考えは離れてくれなくて。結局、聞いてみた。

「は？身長が伸びてなかったら？ …世界を敵に回してたかな」

「……どういことだコラ」

「ナイショ。すみませーん、おかわりー」

一瞬走った、本気でキレた大空のアルコバレーノと相対した時に勝るとも劣らぬ戦慄に、コロネロは殆ど棒読みで尋ねた。

しかし、笑顔でかわされる。

「…ところで…、最近城に詰める人数を減らしてるらしいが、何でだコラ？」

「へ？誰に聞いたの？…って、決まってるか。リボンカラルだよね。マーモンはヴァリアー本部のことですら気付いてないこと多いし」

はむ、と炒飯を口に入れ、彼は溜め息をついた。

「最近ねー…幹部の中でも妙な動きしてるのが増えてきてさ」

まあそれ自体は狙い通りなんだけど。

「色々あったから…ほんとはこんなあからさま過ぎて駄目だってわかってるんだけど、ちよつと耐えきれなくて」

「…疲れてんのかコラ？」

ノンアルコールをくいっとあおりつつコロネロが言った言葉に、彼はふっと笑った。

「ソレ、ユニにも言われた。…そう、見える？」

「お前は隠すのがうまくなったからな、コラ。少なくとも言動からはそうとれるぞ？」

「そ、か…じゃあ、そうなのかな」

感覚麻痺してんのかもなあ…、と呟いた彼は、かちゃん、とスプーンを置いた。

「…：決めてたんだ。ずっと、前から、決めてた」

今度はコップを手に取り、あおりかけたかと思えばテーブルに戻

し握りしめて俯き、彼はぽつりと言った。

「そのためには、絶対に、ゆるがない、って…ゆるがないために、なんでもしよう、って…おもった」

キシ、と嫌な音が。

「だから………本当は、」

こんな愚痴すら、許されるものじゃないのに、

(…ノンアルコールで酔っ払ったのかコラ?)

ふるふるふる、と震えている彼に、ちよっぴり失礼な感想を抱きつつ、コロネロは言った。

「お前は一人じゃないんだ、抱え込まなくてもいいと思うぞ、コラ」

その言葉に、ゆったりと顔が上がってくる。その瞳は、どん底にいる者の色を宿していた。

「…うん。 オレは、ひとりじゃ、ない。だから、誰にも言わないつもりだった」

「何でだコラ」

「誰かに言えば、揺らぐから」

揺らいだら、今背負ってる重荷を全て、投げ出してしまおうから。

「オレは、ボスで在らなきゃいけない。ボスに成る為に決めた覚悟は、正直、ボスで在るには不適合だ。でもその覚悟でなけりゃ、

オレはリングの本当の力を引き出すことはできなかったし、これからも引き出し続けることはできない。　：そして、リングの　――
トゥリニセツテの力は、何よりも必要だ」

揺らげない。揺らいじゃ、いけない。

「：ツナ、お前は本当に揺らぎそうなのかコラ？」

どうも、違う言葉を重ねることで、自己暗示しているように見えたのだ。

「：どうなんだろう？　でも、あの子達と関わって真っ先に浮かんだのが……ああ、だからか？」

「一人で納得すんなコラ」

「あーいや、だって説明しようにも：できないし？　うん。　でも言われてみればそうなんだよね。ほらアレだよ、心の中での葛藤が激しすぎて本筋から脱線しちゃう中二病」

「一人で　思　い　っ　き　り　あっさり自己完結した上で相当わかりづらい例えが出てきたぞコラ」

「え、そう？　結構わかりやすくしたつもりなんだけど：」

そう言って向けられた笑顔は、少し無茶しているようだったが、これ以上問い質しても口を割りはしないだろう、とコロネロは諦めた。

彼の口を本気で割れるのは、かの元家庭教師殿か大空のアルコバレーノくらいで、そして彼は恐らく、その二人には完璧に隠し通したのだろうから。

（いや、隠し通したんじゃないくて、誤魔化し通した、の間違いか、コラ）

内心の溜息を押し隠して、コロネロは脈絡がない話題に付き合うのだった。

「オイコロネロここかつ！ ……何で綱吉がいやがる」
「ラル…お前な…」 「あ、ラルだ、やつほー」

片や呆れ、片やのほほん、と返ってきた返事に、怒りでもって彼女は返事をし返した。

「何の用だ、ラル」
「この間お前が言ってたヤツの話だったんだが…それよりも綱吉、こんなところで何油売ってやがる」
「えー？ …ちょうど疲れてるって気づいたところだから、そう考える、息抜き？」

ワオ、久しぶりに息抜きとか言ったよ

「んなもん本部でしやがれ。ヴァリアーの奴らが探してたぞ」

「知るかそんなの。どーせ殺^{仕事さ}らせろだの何だの言ってるんだろーほつとけほつとけ」

「お前のサインが必要な決済とかは考えないのか」

「あそこの会計は抱き込んであるから大丈夫」

そうでなくても、マーモンは基本的オレの味方だし？

「お前な…」

「ラル、先にソレ寄越せ。あと、何言っても無駄だと思うぞ」

アルコバレーノの中で、彼に関しては一番苦勞人化しているコロネロが言うのだ、その通りなのだろう。そうは思っても、言わずにいられないラル・ミルチであった。

「まあ座って座って。で、何だか知らないけどソレ届けに来ただけ？ 用事にしては軽すぎない？」

「昨日のことについてついでに話すかと思ってな…」

「昨日のこと？」

きよとり、とコップに口をつけつつ問われ、一瞬息を詰める。そういえば口止めされていた、と気づいたからだ。彼を挟んで向こう側にいるコロネロが、素知らぬふりでアレと一緒に渡した書類を見ているのが腹立たしい。

「…ちよつとな」

「何かすっごい気になるんですけど？ ねえ、オレにも関係してるよね？？」

「そう思うんなら、そう、だろうな。だがオレには言えない」
「ふーん…?」

じと、と見られ内心冷や汗をかくが、言えない。というか言いたくない。言ったが最後、どうなるやら。

相手は歴代最強と呼ばれるドン・ボンゴレ。その超直感は末恐ろしくてたまらないが、万が一口を割った場合、起こり得ることを滔々とやや青ざめた顔で語っていた同朋の顔がよみがえる。…やはり、言えない。

「…ま、いいけど。何か聞いたら余計疲れそうな気がするし。無知は怖いけど幸せなことだもんね、うん。」

一人で納得され、ほっと一息。言っている言葉は少々聞き捨てならないが。

「…ツナ、それリボーンに聞かれたらヤバいんじゃないか？」
「何を今更。」

ハンツ、と鼻で笑うので、思わず顔を見合わせる二人。…コイツこんなキャラだっけ、と互いの顔にかいてあるのを見て、溜め息。

「オレが今現在疲れている全ての原因は結局リボーンがクソジジイの命令でやって来たことなんだし。…あれ、そしたら原因はクソジジイか。」

「…ツナ。そういうや九代目の^{暗殺}搜索をリボーンに依頼したらしいが…」
「何だとコラ!？」

「ああ、うん。断られたけど。『仮にも多少の恩ある相手だから勘弁してくれ』云々。まあそう言われるってわかってたけどね」

あんまり引き摺ったらザンザスが横から出てきて嬉々として抹殺しに行くから、冗談で済ませただけだ。

「いつものことだが、どこにスパイがいるかわからん。気をつけろよ」

「だーいじょーぶだってー。いつものことだし。オレが一方的に九代目のこと嫌ってるのは周知の事実だし」

“いつものこと”で流してしまえる神経を疑うぞコラ…」

何だか疲れたように呟いているのは無視だ無視。

「アレはもう何かのバケモノの域でいいと思う。月四回やれ嫁はどうしたやれ孫の顔が見たいうるっせえんだよクソジジイ…ツツ！心は若者とかふざけて女侍らせてんなら自分がハッスルしやがれ…ツツツ！！」

（（ついに人間扱いを放棄…））

オイ、アレ、どういう意味だコラ、と小声で問われたので、横目で窺いつつ、彼女も小声で返す。

「（どこにいるのかしれない九代目が、月に四回非通知で綱吉に連絡を取ってくるらしい。最初は度々番号変えてたみたいだが、最近はおかってくると電話線引っこ抜いてるそうだ）」

「（じゃあ何でキレてるんだコラ）」

「（リボーンか家光経由で伝わるみたいだな。二人の方も辟易してるようだったが…何せ、相手は九代目だ。性質が悪い。）」

「（…なるほどな。）」

何だか危険なオーラを放ちだしたので、二人は慌てて彼を店から引っ張り出した。忘れていたが、ここはマフィアランド。一歩間違

えれば荒くれ者どもが喜び勇んで喧嘩を売ってくるだろう。まあすぐに後悔することになるだろうが。

「もー何だよ」

「あんまり非生産的なこと考えてると禿るぞコラ」

「失礼な、ウチの家系は死ぬときですら色が抜けてなくてふっさふさなのばっかなのに！」

「…それはもしや早死にしてるんじゃないか？　つつーか綱吉、やつぱ戻れ、何か妙な通達が来てる」

三十分以内に捕獲せよ、だと。

「捕獲って。チェデフってオレのこと何だと思ってるの？　オレ九代目ほど敵前逃亡好きじゃないよ？　脱走はするけど」

「…どう違うんだコラ」

「九代目は仕事片づけないで逃げるけど、オレは仕事粗方片づけてから脱走するもん」

ほら、良心的でしょ？

「…どうなんだ、コラ？」

「事実だ。　だがコイツは場合によっちゃ九代目より性質が悪い」

「何でだコラ」

「そんなところで日本人気質を出さなくてもいいと思うんだがな…」

自分の仕事を怒涛の勢いで片づけた後、休憩せずに仕事に追われる部下達の手伝いを始めるんだ

「五日連続徹夜状態とかでな！」

「だってさあ…みんな仕事してんのにオレだけ休憩とか…」

「「もっと自分を大事にしろコラ／やがれ」」
「うー…」

口を動かしている間も歩いていた三人だったが、やがて出入り口まで来て。

「はーめんどくさい。コロネロ、暇なら一緒に来ない？」

「…遠慮しとくぜコラ。また来い」

「はーい。今日はありがとー」

チュツ、と軽くキスを交わして、手を振りつつ出てきた彼に、ラルは一瞬湧いた怒りを必死で押し殺した。

「ん？どしたの、ラル」

「…何でもない。急ぐぞダメツナ」

「うわ、ラルにそれ言われんの何度目だろ。片手に余るよなー？」
「黙れ」

少し離れたところに置いておいたバイク。…こんなこともあるうかと大型二輪だ。問題はない。

「あ、オレが運転するよ」

「…そう、だな」

あっさりとキー貸して、と言われ、流れるように渡してしまう。そしてしばし後悔するが、後の祭りだ。まあ何にせよ、早く着くに越したことはない。ないのだ、が…

「…綱吉。少しは抑え目に頼むぞ」

「ん？ああ、はいりょーかい。」

彼は、スピード狂だ。否、普段から超高速スピードに慣れすぎているのだ。そのため、常人には正直耐えられないと思ってしまうスピードを平気で出す。そして未だにゴールド免許だ。無事故無違反はどうかは、定かでないが。彼のことからバレルようなヘマはしないだろう。

しばらく吹かしていた彼が、ヘルメットをして促してきたので、ラルはその後ろに跨った。

「…そんな固くならなくても。さすがに女性後ろに乗せるときは手加減するってば」

「…」

その言葉に嘘はないだろう。何せ同朋にこれでもかとフェミニスト精神を叩き込まれている男だ。気づかれているのだから、敢えて意識して大きく息を吐く。…力は、抜けた。

「ん、よし。じゃあ行くから、しっかり掴まってるよ？」

…結論。確かに手加減はしてくれたようだが、結果としてやはり腰が抜けた。だがそんな彼女を苦笑して彼が横抱きで運んでくれた上でかなり気遣ってくれたので、良しとする。

(…まだかな…?)

対外的には敵対しているように見せかけているが、実際はとても仲良しなドン・ボンゴレ十代目と、九代目直属独立暗殺部隊ヴァリアー。トップ同士でよく呑みに行っていることは、周囲のごく一部の人間の間では周知の事実である。

そんな、ドン・ボンゴレの執務室にて彼の訪れを待っていたマーモンは、ふと、立ち上がった。

ガチャ

「綱吉っ」

「わっ、と。 マーモン？ あれ、君一人？」

「他の皆はもう外で号令を待ってるけど」

「…“命令”じゃなくて、“号令”、ね」

やる気だなあ…、とちよつと呆れたような声。

「ムム、何か問題でも？」

「だって相手はカルカッサだろう？ そこまでしなくても…」

「え、カルカッサ？」

「え？違うの？」

マーモンがどこで聞いたのそれ、と問えば。勘、との返事。

少し首を傾げてから、愛用のロールペーパーを取り出す。

「…ムム、ほんとだ、いる」

「調べてなかったの？」

「っていうか、今回の主犯格はカルカッサじゃないよ。主犯がカルカッサならリボンや僕が出てって終わりだからね」

「あー…そうだね、そうだよな」

うんうん、と頷いた彼は、はて、と首を傾げる。

「じゃあスカルの奴、他のファミリーで何してんの？そこ、カルカッサの同盟ファミリーじゃなかったよな？」

「さあね…本人に聞けば早いんじゃない？ってことで、号令」

「…まあ、殺さない程度にね」

「S i . “ だってさ、ボス ” 」

懷に忍ばせていたテレビ電話に告げて、珍しく目を丸くしている彼にそれを手渡す。

「…ザンザス」

『俺達に殺すななんぞ言うのはテメエぐらいだな。まあ仕方ねえ、今回は従ってやる』

「あーうん。よろしく。てかお前何でそんな楽しそうなの」

『…………アイツらはなあ、例のルート潰した奴らだ』

「…あ…………。まあ、程々に、ね。取り敢えずスカルは殺さない

でね、頼むから。じゃあ後は任せたから。…ほんと殺しすぎんなよ？あど壊しすぎんなよ？」

『善処する』

ブチッと切れる。

「…あのボスが“善処する”…さすがは綱吉だね。というか、例のルートって？」

「言うだけで実際は容赦しないと思うけどね…。まあ言質はとった。マジでやりすぎたら後でとちめてやる。で、えーと、ほら、ザンザスのお気に入りのおキーラの入手ルートがあつたじゃん？」

「ああ…先月潰されたっていう…それ？」

「そー。おかげで呑みに付き合わされてさ、おかげでストックのボトルが何本空いたことか…」

ハア、と悲しげな溜め息。

「何だろ。何だか思い出したらオレも一暴れしたくなってきたんだけど」

「ムム。…無理じゃない？」

ボスが殆ど全てヤっちゃうよ

「だよねえ。…よし、じゃあマーモン、スカルの捕獲に行こうか！」

（…キラキラしてるなあ…）「うん、わかった」

楽しそうに歩き出す彼の後ろについて行きつつ、我慢しないのは良いことだ、と思うマーモンだった。それが正しいかはさておき。

外へ出てみると、正面で抗争状態にあった。城の周囲には民家等はないからそっちの被害は気にしないで良いだろうが、派手だ。物凄く派手だ。

「…日本でこんなことが起こってたら警察呼ばれて自衛隊が出てきて…」

「綱吉？」

「…何でもない。さて、と。どの辺にいるかなー…」

んー、と見渡している彼に、ふと聞いてみる。

「もし、カルカッサから移ったとかいう話だったら、どうするの？」

「…どうしょ。ザンザスの殲滅対象になっちゃうなあ…でも仮にもアルコバレーノの一人だし、うん。…スカルはからかって楽しいしなー…縛り上げてオレの部屋にでも転がしておこうかな」

「ムム。こういうシチュエーションなのソレ」

「…プレイ？」

「…そんなプレイするんだったら他のアルコバレーノ全員で押しかけるからね」

ギラリ、とフードの向こうから向けた視線の意図は、伝わったらしい。冗談冗談、と軽く笑って言っているが、本当に冗談だろうか。彼は時折それはそれは突拍子もないことをしでかす。

「転がしてはおくけど、オレマニアックプレイ好きじゃないし。取り敢えずあーゆー厄介なところに所属するくらいなら、ウチの同盟ファミリー紹介するから、とでも説得するよ」

「…まあさすがにこれ以上ボンゴレに偏らせるわけにはいかないも

んね」

「そうそう」

「いっそ全員ボンゴレに集めちゃえば？」

「…いや、ユニは無理だろ」

確かに、本来はその両極端な二者択一のどっちかしかないだろうけど、さ。

バラけさせるか、あるいは逆に一か所に集めてしまうか。その、どちらか、しか。

(…正直、誰一人として否やは言わないと思うけど)

目の前の彼に、沢田綱吉という男に。 アルコバレーノ全員が惹かれ、そして結ばれあった。そこに後悔はないし元より躊躇いすらなかった。

一度、どんな話題が切欠だったか忘れたが、彼が「それって、ブラッド・オブ・ボンゴレに惹かれてるだけなんじゃ…」とかふざけたことを言ってくれたせいで、皆で色々…うん、ほんと色々、したことも、あったつけ。

“最強の選ばれし七人” (実際八人だけど) である、高すぎる誇^{ブラ}りすら打ち砕く、彼の魅力。 それに屈したことへの、一種の甘美^{優しさ}。 他の誰も、同朋以外の誰も知らない、彼の持つ甘い蜜。 大空の氣質。

しかしそれが、他の者にも向けられようとしている。 ふとマーマンは瞳を閉じて、先日の特訓を思い出す。 あの場にしたのが全員ではないらしいが、それぞれに中々素質があり、しか

も自身の力の使い方をよく知っていた。あの年にしては。

そう、よく訓練してきた者の動きだった。身体は未熟だが。

（あまり追及はするなって言ってたけど…）

気になる。そしてその答えは、目の前できよろきよしている彼が知っているはずなのだ。

だが、先日とは他言無用だった。一応かの少年達を対外的には鍛える目的で預かっていることになっているのだが、実際のところ彼があまり無茶はするな、させるなと命令しているらしい。だから先日のことを彼に語るのはタブー。

まだ、リボーンを除いたアルコバレーノは少年達の存在を知らないことになっているのだ。

（けど、いつかはバレル、よね…）

そのときはどうするのだろう。

少し首を傾げたマーモンだったが、まあリボーンが何とかするか。と勝手に自己完結しておくことにした。だって自分は彼の要請に応えただけだ。悪くない。悪いのは少年達の熱意と自身の好奇心とに負けたあの業界最高峰ヒットマンだ。

「マーモン？探してる？」

「ムム、ゴメン。ちょっと考えごとしてた」

目を開いて、にこりと返事をする。尤も、見えているのは口元だけだろうが。

何か気になることでも？と問われ、大したことじゃないよ、と答えつつ、マーモンは再びロールペーパーを手を取った。当初は抗争

の派手さにやめておいたが、時間が経った今なら障害物も少ないだろう。

「ムム。 अच्छだね」

「そっか。ありがとね、マーモン」

軽い音を立てて彼の唇が触れたのは、フードをかきあげたマーモンの額だった。

「…何を…」

「取り敢えずお礼？　じゃ、スカル捕獲に行こっか。」

にっこりと笑った彼は、すぐさまグローブを身に着け、空へとその身を投げ出した。

残されたマーモンといえば、ハア、とやや赤くなった頬を隠すように溜め息をついて、ふわりと空へと舞いあがった。

「いえその…何が何だかオレもよくわかんなくて…」

ただ嵌められた、らしい、です…

「嵌められた？」

エビフライ状態で床に転がされているスカルは、いい加減身体の節々が痛いんだけどな…と呟きつつ、不思議そうな顔の男に一つ頷いてみせた。そしてそんな小声の文句も聞こえているだろうに、目の前の彼は真剣な表情で聞き流している。

「…確かに、カルカッサで新入りの部下に促されて、計画を立てはしたんですけどね。あくまでお遊びのつもりだったし、穴だらけだってことはわかってたし…まあ新人の育成には丁度いいかな、と思っただけのまま渡したんですよ。そしたら…」

「それがそのまま今回の作戦になってた、と。じゃあ何でスカルは奴らの陣営に？」

「………信じたくないんですが、売られた、らしいです」

「売られたあ？ お前がいないとすぐに孤立無援状態になるカルカッサにいい？」

心底信じられない、という顔をしている彼に、たぶん…と沈痛な面持ちでスカルは告げた。

「オレ自身、事実確認している暇がなくて。拉致られるようにあそこ連れて行かれて、しようがなく指示してたもので…」

「ああ、まさかこっちが現れた途端諸手を挙げて駆け寄ってきたもんな。そんなにあそこにいるの嫌だったんだ」

「…ボンゴレ…いえ、ツナなら耐えられますか」

「いや、耐えらんない。零地点突破・初代エディションでバリケード作って寝ると思う」

「…それはそれで強心臓ですね…」

だって、壊せるのクソジジイとザンザスが力を合わせてやっくらいだからねー。

にこにこ恐ろしいことを言う。仮に別の状況で…そう、彼が仕事から逃れるためにその手を使えば、ボンゴレは上から下へ右往左往するに違いない。彼が仕事に関しては日本人氣質を発揮してくれて何よりだ。尤も、日本人が圧倒的に少ない中でそれが目覚めたのがとても不思議でなくてはあるのだが。

「まあたお前が何か適当にサインしたものが紛れ込んだ契約書とかだったんじゃないの？」

「……可能性としては…なくもない、かも…」

つい先日まで一カ月間平均睡眠時間一時間半だったので：

「何してたの、そんなに」

「まあ、色々…」

「あ、そっか。一応敵ファミリーだっけオレ達。何かカルカッサとぶつかることなんて最近なかったからすっかり忘れてたや」

「…先輩達が怒りますよ…」

気にすんなよー、と笑っている彼の笑顔は、本物で。本当に気負ってなどいないのだろう。

その笑顔に、どれほど助けられたことか。

「…ところでツナ、いつまでオレはこの状態なんですか」
「事実確認が終わるまで、かな。　　っと、電話電話…」

シンプルな着信音。　　電話に出た彼は、そんなに長く話すことはなくそれを切った。

「さっきのファミリーの殲滅は完了。　　ヴァリアーが独自で持っている情報で確認したら、最近カルカッサに入ったっていう新入りの顔が幾つかあったらしいよ。一応下っ端よりは上みたい」

「…スパイですかね」

「さあねえ。　　一応敵だし、情報提供はこのくらいで。後は自分で何とかすれば？」

意地の悪い笑みを向けられ、ちよつと泣きそうになる。　　慌てて出した声は、実際涙ぐんでいた。

「ちよ、ちよつと待ってください、今オレ一文無しも同然なのに…
っ」

「…（プツ）」

「…え？」

そのまま爆笑体勢に入ってしまった彼に、呆然とするスカル。
…ついでに節々の痛みがよみがえってきて、地味に痛い。

「あー、面白。スカル必死すぎ。　　リボーンやラルやマーモンやコロネロやヴェルデじゃあるまいし、オレはここで投げ出したりしないよ」

「…もうそれ殆ど全員ですよね」

「いや、風とユニは言っていないし。でもあの二人はそもそも悪意なく手を出さないタイプだからなあ」

(…よくわかってる)

ちなみに前者の面々は助けた上で、見返りを要求するかこの恥曝しがっ！とか何とかボコツてくるか大体どちらかだ。…どちらも性質が悪い。そしてスカルの方も絶対に見返りなど出さないし、わけもわからずボコられるのは日常茶飯事だ。特に、アルコバレーノの面々に関しては。

「…ツナ…」

「んー？」

「この際、オレもボンゴレに入っちゃ駄目ですかね…」

「だめー」

え、と固まる。あっさり軽い口調ではあったが、即答だった。

「ただでさえ苦しい言い逃れしてんのに、お前まで抱え込めないんだ、ゴメンな、スカル」

「…あ、そ、か…もう先輩達が、いるんですけど、ね…」

リボーン、ラル・ミルチ、マーモン。一番初めの人は一応まだ所属しているわけではないのだが、もう同等に見られている。

そして、あまり一つのマフィアに固まっではいけないという、掟。…わかっていたはずなのに、何故か。

「ちょ、泣くなよ、もう…」

「…いて、なんか…」

彼は、優しいから。そんなこと、はっきりと言わないでも思っていたのか。否。優しいからこそ、彼はきっぱりと言ったのだ。

わかってはいても、流れるものは流れてきて。 身体の体勢的に、拭うこともできず。

「しょうがないなあ…」

近づいてきた彼が、ハンカチで拭い取った。

「いい年した男が泣くなつての。 ボンゴレに所属すんのは無理だけど、同盟ファミリーなら紹介できる。それじゃ駄目か？」

「え…」

ぴた、と涙は止まった。 固まったまま、言われた言葉の意味を考える。 熟考する。 …そして、決断する。

「…いえ。 取り敢えず、カルカッサに、戻ります」

何を恐れていたのか。 どうもそのせいで情緒不安定だったようだ。

今までの彼ならば、スカルにそんな提案をしなかった。 そうさせるほどの何かが、彼にあるということだ。 だって彼は知っているから、掟を。 だから本来、冗談でも、更に苦しい言い訳をすることになりかねず、またアルコバレーノ達の立場を悪くするような提案など、するはずがない。

つまり、それをさせるだけの何かが、彼の中にあるということだ。

ならば、自分がすべきことは、とスカルは考える。

逃げている場合じゃない。 自分の置かれた立場を見つめ直して、改めて彼の提案を考えるべきだ。 今、流されてはいけない。 …彼も、自分も、後悔することになる。

信頼していたファミリー。 裏切られたかもしれない事実。 でも

それも、結局自分の目で確かめてみないことにはわからないのだ。

しっかりと意志を宿したスカルに、彼はほわりと笑った。

「しっかりとやれよ、軍師殿。じゃ、縄切るからちょっと待ってろ
ー」

「…あの、それでこれは何だったんですか？」

「んー？ …特に意味はない」
「え」

ただ、マーモンが縛るんだったらがっちりやれって言うからさ

「…がっちりって、やりすぎでしょう…」

「つとー、ナイフだと服も一緒に切りそう…んー…あ、そうだ」

立ち上がってどこから何かを取ってきたらしい彼は、動くなよ
ー、と声をかけると、それを動かした。

ズビシビシビシビシツツ！！！！

「うえっっ！？」

「さすがはヴェルデー、切れ味いいなあ」

鞭が切れ味良くても困る気がするけど

「…むち…？」

「鞭。」

身体を起こしながら彼の手元を見れば、確かにその形状は鞭だった。
…どうみても素材が金属だったが。

「え、どうやってたらそんなしなやかに曲がる物体に…?!?!?」

「さあ？ その辺はヴェルデに聞いて。 あ、あと早く行かないとリボーンとかラルとかマーモンとか来るよ」

「ゲッツ!!」

慌てて身を翻したスカルの腕を、彼はがっしりと掴んで振り返らせた。

「何をうつ…?!?」

一瞬の、触れ合い。 ペろりと、唇を撫でていく。

「餞別。 じゃ、また今度」

「…うあああもうっ！ はいまた今度っっ！」

あの天然誑しがあああつと内心悲鳴を上げつつ、絶対真っ赤になっ
ているだろう顔を隠すようにスカルは走り出した。

虹と大空（後書き）

テーマは愛人らしくちよつとしたスキ^{キス}ンシップ。約数名してない人がいるのは仕様です。

次で完結。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3161y/>

今一度、貴方に

2011年12月21日15時49分発行